

---

# 王様と喪女

館野寧依

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

王様と喪女

### 【Zコード】

Z0653BA

### 【作者名】

館野寧依

### 【あらすじ】

只野はるか、27歳事務員。漫画を描くことと、預金通帳の残高を見ることが生きがいの非モテ女。

そんな彼女が大事な原稿を抱えてジャージ姿でいきなり落ちた先は、なぜか異世界の王様の婚礼契約書の上だった。

怒り心頭の王様は、責任をとつて結婚しようと迫るが……？

よし、これが打ち終わつたら、すぐに家に直帰するわ。  
わたしはそう心に堅く決めて、主任に頼まれた文書を普段の一割  
り増しくらいの速度で、パソコンのキーボードを叩いていた。

わたしは只野はるか、二十七歳。職業は製造業の事務員。

……そんなわたしの印象は、とても地味だ。

ファンデを薄く塗り、リキッド口紅を軽くつけたのみの化粧は、  
よく言えばナチュラルメイク。

一応手入れはしているけど、眉も描いていないという手抜きぶり。  
髪の毛もうねるくせつ毛を簡単に一つにまとめただけだ。

それに、会社の事務服があか抜けない水色のだぼつとしたものだ  
というのも、わたしの地味さを更に強調していた。

だけど、わたしは作業員のおばちゃん達相手に、巻き髪したり、  
つけまつげバチバチしたりする趣味はない。

そんな支度する暇があつたら、趣味か睡眠に当てたい。

そんなわけで、わたしはとつても垢抜けなかつた。

ただ、わたしに特筆するべきことがあるとすれば、大きすぎる胸  
くらいだろう。これだけは、みんなに褒められる。

わたしにしてみれば、肩は凝るし、太つて見られるし、服選びは  
大変だしであまりいいことはないんだけどね。

「只野さん。仕事あがつたら、みんなで飲みに行かない？」

「あ……、『めんなさい。今日は用があつて無理なんです。すみま  
せん』

ちょうど金曜日の仕事上がり前といつともあつて、会社の営業  
の相田さんという女性から誘いを受けたけれど、気乗りのしないわ  
たしあはせつかくのお誘いを断つてしまつた。……本当は大した用は

ないんだけどね。

「只野さん、付き合い悪いよー」

「本当にごめんなさい」

相田さんは冗談めかして言つてくるけど、たぶん内心では氣を悪くしているだろ?。

この飲み会、本当はただの飲み会じゃなくて、実際のところわたしと取引先の結構お偉いさんを引き合わせるための場であることをわたしは知つている。

「あの子もこんな機会でもなきや、彼氏もできないんだから。それにあちらともこれからもいい付き合いができるかもしないしね」「うつかりというか、ラッキーというか、わたしが給湯室でお茶を淹れている時に、そのドアの前で相田さんが同じ営業の人と話しているのを聞いてしまったのだ。

なんでも、その取引先の人はわたしの胸が大きいのが気に入つたらしい。

……とすると、うちの会社に訪ねてくる度にわたしの胸のことを「相変わらず大きいねえ」とセクハラ発言してくるあの人だろうか。

……うん、やっぱり会いたくない。

会社のためなら、会つた方がいいのかもしれないけど、接待とか

苦手だし。わたしにはお茶出しどがせいぜいだ。

それに、お酒の席とかで「まかされて、胸とか触られたら最悪だし。

おまけに、男慣れしていないわたしが取引先の人につましく対応できることも思えない。

「なんだ、このつまらない女は」

なんて思われたら、ちょっと、いやかなりへこむかもれない。

それでもつて、もしかしたら円滑だった今までの取引先との仲も悪くなるかもしれない。

……いや、これは最悪の事態を想像しただけだけどさ。

でも、相田さんのわたしへの心証は多少悪くなるかもしないけ

れど、それは仕事の方で挽回することにしよう。

わたしは渋る相田さんに謝り倒してなんとか飲み会は回避するこ  
とに成功した。

「そんなんだから彼氏もできないのよ」

相田さんに嫌みを言われたけれど、わたしは気にしないことにし  
た。

これは何度もいろんな人に言われてのことだつたからだ。

確かにわたしには恋人はない。というかこの歳まで彼氏がいた  
ことはない。

いわゆるもてない女　喪女というやつだ。

顔自体はそこまで悪くはない……と思つ。

ものすごいブスでもなければ、美人でもない。ごく普通の顔。

もちろん、この歳になるまでに恋人が出来る機会が全くないこと  
はなかつた。

今までに異性を紹介してくれる相田さんみたいな人もいたし、知り  
合いや親に婚活を勧められたりした。

でも、わたしにはめんどくさい男女の関係よりも、もっと大事な  
ことがあつたのだ。

「よーし、下書きまでは完成ーっと」

わたしはあの後、主任に文書を確認してもらつてOKが出たとこ  
ろで、脇目もふらず家に直帰した。

趣味の漫画の下書きが予定したところまで終わりそつたから  
だ。

その時のわたしは作成中のオリジナル漫画の進行具合が大変よ  
しかつたので、その事に浮かれ気味だった。

これなら早めにサイトに載せられそうだし、気の乗らない飲み会

よりは、時間の過ごし方としてはやつぱりこっちのほうが有意義だ。今は騎士と姫君の恋物語を描いていて、そこそこ見てくれる人もいるので、わたしはそれが嬉しくて頑張ってサイトを更新していた。でもどこかの出版社に投稿する気はさらさらなかった。

そんな自信もなかたし、ウェブ経由でいろいろな人に見てもらえるということにわたしは満足していた。……それは完全に自己満足っていうものかもしれないけれどね。

「しつかし、さすがに肩こったなー」

ジャージ姿のわたしは、自分の部屋でこきこきと首を鳴らしながら独り言を言う。いい加減、この癖は改めなければと思うが、長年の癖なのでなかなか抜けない。

わたしは今度のサイト更新分の下書きまで終わった原稿と漫画道具一式を百均で買ってきたプラスチック容器にまとめるとい、本棚兼物置に置きに行く。

この後の予定では、わたしのもう一つの趣味の預金通帳の残高を見て一人で悦に入る予定だった。……まあ、あんまり他人に見せられるような趣味じゃないよね。

預金通帳を見て、ニヤニヤする様は自分でも不気味かもしないと思う。

しかし、その予定に反して、汚部屋に積み上げた漫画本の角に足の小指がぶつかり、わたしは見事に前につんのめった。

「いってえ～っ！」

一十七の女の叫び声として、「これはどうかと思うが、本当に痛いのでしょうかない。

人間、とつさの時にはつい地が出てしまつものだ。

だが、原稿一式は死守。

“ひつあつても、死守。

足の小指の痛みをこらえながら、わたしは転ぶのだけはどうにか持ちこたえて、その場に座り込んだ。

しかし、そんなわたしの目の前を何枚もの紙が舞っている。

……あれ、原稿用紙は封筒にしまってあるし、あんなふうに散らばる「とはないはずなのに」。

「……おー」

わたしが舞い落ちる紙に見とれていると、なぜかいきなり横から男に声をかけられて、わたしは思わず後ずさりとした。……がなんだこれ。

「おー、やめるー。」

なぜかいかも高価そうな馬鹿でかい机の上にいたわたしは、目の前の男に取り押さえられて呆然とする。

どこだ、じこは。

さつ きまでわたしは自分の汚部屋にいたはず。

だけど、今いるのは異国情緒溢れる豪華絢爛な広い室内。

そしてわたしを取り押さえているのは、浅黒い肌に銀髪の、深い青色の瞳をした美形。

「おまえ……、なんてことをしてくれたんだ」

美形がその秀麗な顔を歪ませて見てくるけど、いつしかせわざくろじやなかつた。

いつたい、なに? なにが起つたの?

汚部屋から豪華絢爛な室内に一瞬にして移動していくなんてあり

えない。

それに、目の前の絶対日本人じゃない顔立ちの男。

……これはもしかして、ひょっとしてひょっとすると、SFとかで言うなら海外とかにテレポート？  
もし、ファンタジーならウェブ小説とかでよくある異世界トリック  
�ってやつですか！？

高価そうな馬鹿でかい机の上からとつあえず降られたわたしは、田の前の美形に尋問された。

「おまえは誰だ。どうやら移動魔法で現れたようだが、どこから来た」

移動魔法とか言われても、よく分からない。

美形から魔法って言葉が出たってことは、やつぱりこれはファンタジーで、異世界トリップってことなんだろうか？

わたしが言葉を失つていて、美形は「答える」と厳しく言つてきた。

田の前の美形は威厳があつてとても偉そうだ。

……どうやらわたしは不法侵入者っぽいし、ここはおとなしく質問に答えた方がいいのかもしれない。

「……只野はるかです。日本から來ました」

「タダノハルカ？ ニッポン？ どこだそれは」

日本で通じないとしたら、じゃあ、これでどうだ。さすがにこれは通じるだろ。……ここがわたしが危惧したとおり異世界じやなければだけど。

「産業が工業中心の島国です。ジャパンとも呼ばれています

「……ジャパン？ 島国？」

美形男は首を捻つてる。これでも通じないのか。  
やつぱりこには、考えたくないけど異世界なんだろつか？

「……恐ながら」

今まで気がつかなかつたけど、近くには五十代くらいのおじさん  
がいた。その人が言葉を発する。

「この方は、異世界召喚された方では？」

「しかし、異国の者には見えるが、言葉が通じるぞ」

「ニッポンという国名に聞き覚えがあります。……確かガルティアの最強の女魔術師がその国の出身だつたかと」

わたしはおじさんのその言葉に、今の状況も忘れてぽかんとしてしまつた。

「…………そつすると、その最強の女魔術師つて、日本人なの？」

「…………そうか。異世界召喚だといつなら、こつも自然に言葉が通じるのは疑問だつたが、かの魔術師なら納得できるな」

美形が得心したように頷いた後、ガルティアに問い合わせなければなど呟いた。

「…………あの、普通は言葉が通じないものなんですか？」

異世界では言語が共通とかはないんだろうか。

「それはそうだろう。…………おまえはまったく行つたことのない大陸で話が通じるのか？」

それが、あまりにも当然の言葉だったので、わたしは納得してしまつた。

アメリカに行つて、日本語が通じないと一緒だ。

まあ、稀にハワイとかグアムみたいな観光地の例もあるけど、でもそれは特殊な例で、一般的には他の大陸で日本語は通じない。

「言われてみれば、そうですね」

「…………でも、なんで召喚されたのがわたし？」

こんな枯れた地味女じやなくて、もつと若くて可愛い女子高生とか召喚すればいいじゃない。

「…………しかし、召喚されてきたのは分かつたが、おまえはとんでもないことをしてくれたな」

「はい！」

美形に呻くよつにして言われたので、わたしは思わず大きな声で聞き返してしまつた。

「おまえは届いた婚礼契約書を滅茶苦茶にしてくれたぞ。あとは署名するだけだつたのに、どうしてくれる」

「どうしてくれるつて……、再発行してもうえぱいいだけでは？」

なんだか嫌な予感をじわじわ感じながらもわたしは答える。

「あれは他国からの書簡だ。そんなものをまた発行してもいいわけにはいかん」

美形にそう言われて、わたしは自分のしたことの重大さに血の気が引く思いだつた。

「す、す、すみません！」

これつて、わたしがこの人の婚礼を駄目にしちゃつたつてことだけよね。

わたしは頭を下げて美形に謝つたけど、こんなことでは許してもられないだろうな。どうしよう。

ちらりと美形を覗うと、彼は苦虫を噛みつぶしたような顔をしていた。

「……仕方ない」

美形がそう言つたことで、わたしは許してもらえたのかと思つて頭を上げた。

「おまえが代わりに俺の花嫁になれ」

「えええ、嫌ですよ！」

わたしは思つてもいなかつた彼の言葉に、飛び上がって拒絶する。今まで男とは無縁の生活をしていたのに、いきなり花嫁になれてなんなんだ！

「俺だつて嫌だ。しかし、契約より先に婚礼が決まつていたことにしなければ先方に言い訳できん」

「でも、なんでわたしなんですか！？ 花嫁にするならもつと若くて綺麗な人がいるでしょう！？」

「この人がせつぱ詰まつていることは感じられたけど、やつぱり納得できないよ。

こんな美形なら、地位もありそうだし、女の子もよりどりみどりそつなのに。

「無理矢理そうすることもできるが、いきなり訳も分からず俺の花嫁にされる姫が氣の毒だ」

はい？ この人今、姫つて言った？

姫つて、貴族とか王族の女の人だよね？

……そんな人を花嫁に出来る日の前のこの美形はいつたい何者なんだ。

「姫つて……、あなたの身分はいつたいなんなんですか？」

「俺は、ザクトアリア国王、カレヴィイだ」

「ルビー？」

なんとなくポテチが食べたくなつてくる名前だな。ちなみにわたしはコンソメ派だ。

わたしは目の前の緊迫した状況を一瞬忘れて、とぼけたことを思う。

「違う。カ・レ・ヴィイだ」

すると美形が律儀にゆっくりと発音してくれる。

なんだ、某お菓子メーカーと同じ名前じゃないのか。紛らわしい名前だな。

「……つて、国王なんですか！？」

「……おまえ、驚くのが遅いぞ」

カレヴィイ王が呆れたように溜息をついたけど、わたしはそんなこと気にしていられなかつた。

だつて、そしたらわたしは一国の王の花嫁になれつて言われてるつてことじやない！

だとすると、わたしは国王の結婚を駄目にしたつてこと…？  
是非とも彼との結婚は拒否したいけど、なんといっても相手は王様。決定権はむこうにある。

下手したら不敬罪で投獄されちゃつたり、最悪の場合、國家同士の繋がりの機会を駄目にしたつてことで、極刑に処されたりするかもしれない。

あああ、まだ死ぬのは嫌だ。死にたくない。

今描いている漫画もまだ完結していないのに。

それなのに、なんでよりによつてわたしはそんな人の結婚を滅茶苦茶にしちやつたんだよーつ！

「お願いです。どうか殺さないでください」

「……俺は、なにもそんなことは一言も言つてないぞ」

わたしが王様に必死になつて頼むと、彼は畳然とした顔になつた。

……あれ、違うの？

いや、だつてさ。

わたしはこの婚礼の契約で生まれるはずだった国と国の利益をぶち壊したんだから、展開的にはその場で殺されてもおかしくない立場だ。

だつたら、全くその可能性がないとは言えないじゃない。

「でもわたし、大事な契約書を駄目にしてしまつたし」

「だから、おまえが代わりに俺の花嫁になれと言つているだろうがわたしの言葉に対して、カレヴィイ王は面倒くさそうに答えた。いや、でもそれはいくらなんでも投げやりすぎない？」

こんな地味で、政略的価値もないわたしを花嫁なんて、きっと国民も納得しないよ。

「国王の花嫁なんてわたしには無理ですって！」

それにわたしには王妃にふさわしい気品もなにもない。むしろがさつという言葉がふさわしい。

わたしは必死で訴えたけど、カレヴィイ王の反応は冷たかった。

「無理でもやれ。自分のしたことの責任は取れ」

「ええええ……」

わたしは情けない顔でカレヴィイ王を見る。

一般庶民のわたしには、王様の伴侣なんて重すぎる。

それにわたしは美人でもなんでもないし。

わたしが困り果てて、近くにいたおじさんとカレヴィイ王の顔を見回してたら、王様におもむろに言われた。

「とりあえず、タダノハルカ」

「あ、名前ははるかです。名字が只野で」

わたしが説明すると、カレヴィイ王は納得したように頷いた。

「そうか分かった、ハルカ」

そして、カレヴィイ王がわたしのよれよれのジャージ姿を見下ろして一言。

「その格好を今すぐどうにかしろ」

王様にどうにかしろと言われて、わたしはとりあえずこちらの衣装に着替えることになった。

それに当たつて、わたしはお風呂に入れてもいいことになってしまった。

そしたら侍女の一人に大事に持つていた原稿一式を奪われて、わたしはちょっと気が動転してしまった。

「そつ、それ、すごく大事なものだから、絶対捨てないで！ ゼッタイ、絶対だよ！！」

「か、かしこまりました」

侍女達はどん引きしていたけれど、間違えて捨てられでもしたら困る。

とりあえず、原稿の安全だけは確保したわけだけど、次にはわたしが侍女達に身ぐるみ剥がされるというピンチが待ち受けていた。

「おとなしくお湯に浸かられてくださいませ」

年甲斐もなく少々暴れてしまつたものだから、年かさの侍女から呆れたように言われてしまった。

……まあ、着るもののがなければ、素直にそうするしかないし、わたしは半ば自棄になつて一個目の湯船に浸かった。

湯殿を見渡すと、泡風呂とか薬草風呂とかあるみたい。ちょっとした温泉施設だね。

侍女達は湯船に浸かっておとなしくなったわたしに安堵の溜息をついていた。

……おかしいなあ。そんなに暴れたつもりはないんだけど。

そして、泡風呂へ移動すると彼女達は一斉にわたしの体を洗い始めた。

「えええっ、ちょっと、ちょっと！」

自分の体ぐらい自分で洗えますってと主張したが、侍女達には聞き届けてもらえず、わたしは体の隅々まで彼女達に洗われてしまつた。

……なんというかちょっと犯された気分。ほとんどが若い女の子達だけだ。

シャワーで全身に付いた泡を落とされて、今度はわたしは薬草風呂というか、ハーブ風呂に連れて行かれた。

ハーブ風呂はラベンダーが主体らしく、リラックスできるようないい匂いがしていた。ついでに浴槽にバラの花びらも浮いていた。

わたしに似合わねええと思ったが、口に出すと無粋なのでやめておく。うん、賢明だ。

そんなこんなでお風呂から上がったら、侍女の一人に台の上へ横になつてくださいと言われて、すでにやけくそになつていたわたしはその通りにする。

そこで、いい匂いのするオイルを擦り込みながらの全身マッサージを受けた。

あー、肩と首のこりがちょっと酷いんだよね、と言つたらやっこを重点的にマッサージしてくれた。うへへ、極楽極楽。

さつきまでの羞恥もどこへやらで、わたしはご満悦になる。

そうしている間にも、他の侍女達がムダ毛の処理とか、手足の爪

磨きとかしてくれた。

一度も行ったことないけど、Hステッフでこんなのかなあ。

まあ、たまにはこんな体験もいいよね。なんといってもタダだし。

……ここが異世界つてんじゃなら、もっといいんだけどね。

「それにしても、大きいのに形のよい素敵なお胸ですね」  
侍女の一人が感心したように言つた。

うん、その点だけはみんなに褒められるよ。ありがとうございます。

「それに色白で、肌のきめも細やかで素晴らしいですわ」

まあ、日本人としては確かに白い方だけど、ここには白人の侍女  
もいるし、これはお世辞だろうなあ。

それに、肌のきめ云々はわたしによく分からぬ。みんなこんなものじゃないの?

全身マッサージも終わって、ちょっと休憩と言つことで、出されたジュースを飲んでいたら、侍女達はキラキラした素材の衣装をいくつか出してきて、わたしは思わず噴き出しそうになってしまった。まさかと思うけど、それをわたしが着るのか?

もうちょっと地味な素材はないの? せめて着る人に衣装は合わせて欲しい。

キラキラはやめて、キラキラは、と主張したけど、どうやらこれしかないらしい。えつ。

しかも、そのどれも胸元露わで、体の線を強調した衣装だった。

……つーか、これを着るのか? 普段、ダラケкиつた生活をしているこのわたしが?

逃げ出したかったが、なんといつてもわたしは裸。なのでそのままわけにもいかず、おとなしくわたしは侍女達にキラキラした衣装を着せられた。

お腹周りとか心配だつたけど、それはなんとか帯を巻いてしのい

だ。

衣装のスカート部分はくるぶしまでだけど、これが脚にまとわりついて非常に歩きにくい。

で、足には編み上げサンダル。

こここの気候は少々暑いみたいでこれが基本だそうだ。

そして丹念に化粧をされて、わたしの支度は終了。

「まあ、ハルカ様、とつてもお美しいですわー」

「ありがとう」

侍女達が褒めてくれたけど、目の前の鏡で自分の姿を確認したわたしは、特に舞い上がりもせずに冷静だった。

確かに三割増しくらいで綺麗にはなっている。

さつきのよれよれのジャージ姿からしたら別人だろう。

だがしかし、元が平凡なわたしだ。

うん、やっぱり普通は普通だよねー。

わたしはそのことにむしろ安心しながらも、侍女達に先導されてまたカレヴィ王の前に連れて行かれた。

着替えさせられたわたしは、さつきカレヴィ王がいた部屋へ戻られた。侍女が言うにはそこは王の執務室らしい。

入室すると、そこに見知った人物がいたのでわたしはびっくりした。

だつて彼女がここにいるはずない。思わずわたしは自分の目を疑つた。

着ているのはドレスだし、ものすごく綺麗になつていてるけど、でもやつぱり間違いない。

「ち、千花～っ！？」

「はるか、ひさしふりー。元気だつたー？」

幼なじみの千花に抱きつかれてわたしはちょっと呆然とする。千花とは小さい頃からの友達だけど、こんなことは聞いてない。まさに青天の霹靂だ。

「げ、元気、元気だけどー……なんで、ここに千花がいるの？」

今は確かに、結婚して外国にいるつて聞いてたんだけど。

「あれ、最強の女魔術師が日本人だつて聞いてなかつた？」

「聞いてたけど……まさか、それが千花だつていうの？」

友達が異世界で魔術師なんて、そんな馬鹿なことがあるの？

「うん、そのまさか」

「うつそ、そんなことありなの？」

千花、いつの間にそんなことになつたんだ。

「うん、まあ……。驚くのも無理はないと思つけどー……」

千花はそう言つと、困つたように頬に手をやつた。なんというか、どうしたことなく気品のある仕草だ。

「……なんだ、知り合いだつたのか？」

久しぶりのわたし達の再会を遠巻きにして見ていた王様が声をかけてきた。

「知り合いつていうか……友達です」

「久しぶりにはるかに会いたいなと思つたら、召喚の座標指定を少し失敗してしまいました。」「迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

千花はわたしから離れると、カレヴィイ王とおじさんに頭を下げる。「いやいや、ティカ様が頭など下げないでください。あなた様にそんなことをされたら我々がガルディアに睨まれてしまいます」

おじさんがどことなくにやけた顔で、それでも慌てて言う。……まあ、千花は友達の羨眞目を引いてもとっても美人なんだけれどね。

「……それについてもなんでティカって呼ばれてるの？ 千花でしょ？」

綺麗な響きだけど、やっぱり聞き慣れないせいか違和感がある。「うん、この大陸の人には千花って発音しにくいらしいんだよね。だからティカって呼ばれてるの」

そうなんだ。それなら納得。

それにしても友達が最強の女魔術師って呼ばれてるってすごいくらい？

「それにしても、千花、魔法使えるなんてすごいね。わたしにも使えるかな？」

わたしがわくわくしながら聞くと、千花はちょっと困った顔をした。「うーん、はるかはあまり魔力がないから、あかりを灯す魔法ぐらいしか使えないと思つ」「えー、そうなんだ。残念」

最強と言われる千花がそう言つんだから、事実なんだろう。でもあかりくらいは灯せるんなら、それを教わってもいいよね。向こうの世界ではそれでも珍しいことだもの。

「……話に割り込むが少しいいか？」

カレヴィイ王が遠慮がちにわたしだの話の腰を折った。

「はい、どうぞ」

千花は相手が王様だつて、いづれに堂々としている。ひょっとして、最強と言われるほど魔術師だと、いろいろな国の王族と対等に渡りあえるんだらうか。

さつきのねじれたもいやに腰を低くして『ティカ様』って呼んでたし。

すごい。すごいよ、千花。

わたしなんか、王様と向き合つて、命の危険まで感じて内心冷や汗ものだつたのに。

千花のこの肝の据わり方はマジでただ者じゃないよ。

「ハルカが突然現れることで、隣国の『ティアルスタン王国の王女との婚礼契約書が滅茶苦茶になつた。最強の魔術師の力でどうにかならないか」

あ、そうだつた。

千花がどうにか出来るならわたしのしたことは不問になるよね。

そしたら、王様と結婚しなくてもいいし。

「そうですね、婚礼契約書はどうにもなりませんが、ティアルスタンと話を付けることは出来ますよ。この場合、この婚礼はなしとうことになりますが」

「ああ、それでもいい。だが、国内に相手の名までは伏せてあるが、近々婚礼を挙げることは知らせてしまつてある。どうしたらいい」

ええ、そんなにせつぱ詰まつてるの？

だから、わたしを代役にしようとしたんだ。

「そうですね……」

千花は顎に指を当てて難しい顔をして考え込む。

その次に、千花の爆弾発言が投下された。

「はるかには申し訳ないですけど、このままあなたの花嫁になつてもうつことになりますね」

「ああ、それでいい」

えええええつ！？

カレヴィイ王は簡単に頷いてるけど、ちょっと待つてよ、わたしはそんなこと納得しない！

わたしは驚いて思わず飛び上がってしまった。

「えええ、千花ちょっと、それはひどいよ」

元々は千花がわたしを喚びだしたからこいつなつたんじゃない。

わたしは千花に縋りついて抗議する。

「うん、本当にこめんね。でも、カレヴィイ王に酷いことをさせないつて約束する」

それって、結婚しても手は出させないってことだよね？

「いや、それより家に帰れないことが問題なんだけど。趣味だけど、サイトもやってるし」

「それは異世界召喚でどうにかなるけど。問題は会社だよね。それは残念ながらやめる」とになりそうだけ……」

それを聞いて、わたしは少なからずショックを受ける。

あああ、わたしの楽しい貯蓄生活が遠くなっていく……。

「そんなあ……。わたし、せっせと貯めた預金を確認するのが楽しみなのに」

わたしがしょんぼりしていると、千花が慰めるようにわたしの肩に手を置いた。

「それなら、わたし向こうに架空の会社作るけど。はるかはるの事務員つてことにするよ。給料も今よりはずむし」

「ええっ、本当に？」

思つてもいない千花の言葉に、わたしは色めきたつてしまつた。なんだ、そんなんだつたら大歓迎だ。

それでも、魔術師つてそんなことまで出来ちゃうのか？

つていうか、会社設立つて、千花いくら稼いでるんだ。

「カレヴィイ王と結婚すれば、多少王妃の仕事はあるけど、それ以外は趣味に没頭できるよ。……はるか、どうする？」

千花にそう言われて、わたしは躊躇することなく笑顔で頷いた。

「ええー、それなら結婚する！」

こんな素晴らしい機会を見逃すなんてこと、わたしには出来っこ  
ない。……ああ、この先には充実した生活が待っているんだね。  
訪れるだらう近い未来を予想して、うつとりするわたしをカレヴ  
イ王とおじさんが呆れた顔で見ていたけど、わたしはそんなことに  
構つてなかつた。

……多少問題ありだけど、趣味に浸れるつゝです”く素敵じゃない?

「ちょっと待て。王妃になるなら子を成してもらわなければ困る」  
しばらくわたしを呆れて見ていた王様が、はつと我に返ったように言った。

「けれど、はるかに無理強いはしたくないです……。その件については、わたしがどうにかしますから、カレヴィイ王はもう少しをお待ちいただけますか？」

千花がわたしの顔を見てから、少し困ったような様子で言った。  
うん、でもまあ、カレヴィイ王が言つたことはいく当たり前のことがなんだよね。

形だけの王妃なんて、もりつても困るだけだらう。  
そしたら、わたしはおいしいだけの話に食らいついでちや駄目だよね。

「千花、わたしなら別にいいよ。王様の子供産んでも  
わたしが決意表明すると、千花は驚いたように瞳を見開いた。  
「え……、はるか、本当にいいの？ もしかしたら、この先好きな人が出来るかもしれないのに」

千花がうろたえたようにわたしの顔を見た。それにわたしは強く頷く。

「うん、いいよ。……ていうか、わたし自身、自分に好きな人がある甲斐性があるとは思えないんだよね」

それに加えて、今も彼氏いない歴更新中なんだから、この先もうな可能性が高い。

……だったら、別にカレヴィイ王とそうなっちゃつてもいいんじやないかなって思うんだ。

わたしのその言葉に、千花は微妙そうな顔をした。

……まあ、もてる千花には分からぬ感覚だろうなあ。たぶん、千花はわたしが投げやりになつてゐると思つてゐるかもしない。

まあ、成り行きっちゃ成り行きだけど、結婚するんだつたら、こ  
つちもそれ相応の義務を果たさなければ駄目だよね。

「はるかが〇Ｋなら、わたしが口を挟むことじやないよね。……で  
も、なにか困ったことがあつたらすぐにおこなってよ？　出来るだけ協  
力するから」

千花がわたしの手を取つて、それでも心配そうに言つてくれる。

うん、持つべきものはやつぱり友達だなあ。

こういう友達がいるなら、別に彼氏とかいなくていいや。……

今度王妃になるけど。

「うん、ありがと。その時はよろしくね、千花」

「うん」

わたしと千花が和やかに話していると、カレヴィイ王がそこに割り  
込んできた。

「……話は済んだか？　ハルカが子を成す覚悟をしてくれて助かっ  
たぞ。……ところでハルカの歳はいくつだ」

「え、二十七歳」

わたしがそう言つと、カレヴィイ王とおじさんが絶句した。

「俺より三つも上なのか？　てつきり二十歳そこそこかと……」

つていうことは、カレヴィイ王は今二十四なのか。

それじゃ、地味な上にこんな年上の女じや嫌かなあ。

「その歳では、既に男を知つているんじゃないのか？　王妃になる  
なら、清らかでなければならないぞ」

うんまあ、そう思つのが普通だよね。

「ああ、それはないですから。わたしはとっても清らかですよー。  
なんといつても、わたしはもてない女ですから」

だから、その点だけは胸を張つて言える。

そしたら、わたしは事実を述べただけなのに、三人にものすゞく

微妙な顔をされた。なぜだ。

「……そ、そ、うか、ならばいい。だが、おまえの年齢は二十歳とい  
うことにさせてもらひ。二十七ではなにかと都合が悪い」

「……まあいいんですけど……」

個人的には鯖をよむのはどうかと思つけど、王妃にするにほこの歳ではいろいろと不都合な点があるんだろう。

……さつきカレヴィ王が言つてた男を知つてゐる云々と言つてくる輩も今後出てこないとも限らないしね。

「それじゃあ、今後よろしくお願ひします、カレヴィ王」

わたしが王様に深々とお辞儀をすると、彼は笑顔で頷いた。

「ああ、よろしくな。俺のことはカレヴィでいいぞ。俺に対しても敬語もいらない」

今まで気が付かなかつたけど、この王様はかなり気さくらしい。この先の人生、ずっと付き合つていかなくちゃならない相手なんだから、変に気を遣うような人でなくてよかつた。

わたしはほつとしながら笑顔で頷いた。

「うん、分かつた。カレヴィ」

「……ただし、公式な場ではそれなりの言葉遣いにしてもらうがなう、やっぱりそういうオチがつくよね。まあ、これは仕方ないか。「とりあえず、おまえには趣味に没頭する前に礼儀作法をみっちり学んでもらう。覚悟しておけ」

「ええ~っ

わたしはカレヴィの言葉に抗議の声を上げたが、彼はどこ吹く風だ。

「千花、助けてっ

「ごめん、こればっかりは我慢して」

頼みの千花にもそう返されて、わたしは撃沈した。「う、やっぱり駄目か。

王妃になるなら、それなりの気品を要求されることになるだろうから、たぶんその礼儀作法の授業は厳しいんだろうなあ。

……やっぱり、そうそううまい話は転がつてないよね……。

そう考へながら深く溜息をついているわたしにカレヴィが言つてきた。

「取り急ぎおまえとの婚約の書類を作成するから、ハルカはそれに署名しろ」

「うん」

カレヴィイからしたら、善は急げってことなんだろうなあ。  
カレヴィイがさらさらと書いた『両名は婚約の契約をする事に合意  
した』という文面に、わたしは彼のサインのあとに名前を書いた。  
「これで契約成立だな。ハルカ、おまえも慣れない環境で大変  
だとは思うが頑張れ」

「うん」

いきあたりばつたりの政略結婚だというのに、わたしの心配まで  
してくれて、カレヴィイなんだかかんだ言つてもいい人だなあ。  
……うん、この人とならうまくやつていけるかもしねりないと、  
わたしは少しだけ安心した。

婚約も決まったことだし、わたしは婚礼までに王妃らしく見える礼儀作法やこの国の歴史なんかを勉強しなきゃないから、これから大忙しだ。

……漫画描いてる暇あるかなあ。あるといいけど。

「話がまとまったのなら、ハルカに俺の血縁の者を紹介したいが、あいにく父母は諸国を旅している。連絡は入れておくから、まあその内帰つてはくるだろう。後で弟を紹介する」

とりあえず今すぐ先王陛下や王太后陛下にお会いする訳ではないらしいと分かつて、心の準備がまだできていなかつたわたしはちょっとほつとした。

「ハルカが心配することはないよ。お一人とも気さくな方だし

千花がわたしの心配を察したかのように、フォローしてきた。

そうか、それならちょっと安心した。

でも一人、会わなきやいけない方が残つてるんだよね。

「……王弟殿下はどういう方なの？」

「シルヴィは今年十六になつた。少し気難しいところもあるが、まあハルカが心配することはない」

……でも、一応近い血縁なら、わたしの歳のこととか言わなきやいけないんだろうなあ。

それを若い殿下がなんと受け取るか、ちょっと心配だ。なんでも気難しいって言つし。

「ゼシリア、シルヴィを呼んでこい。いつのものは早い方がいいからな」

「かしこまりました」

いつのまにか控えていた地位のありそうな年かさの侍女がスカートを摘んでお辞儀をする。そして、王弟殿下を呼びに出ていつてし

まつた。

うわあああ、こ、心の準備が！

なんだか急に心臓がバクバクしてきたよ。

わたしが胸を押さえて深呼吸していると、それがおかしかったのか、カレヴィイが笑つた。

「そんなに堅くなるな。ティカ殿も言つたが、おまえはなにも心配することはない。未来の王妃として堂々としていればいいんだからな」

堂々って……、ついさっき決まったことなのに、そんな無茶な。わたしが不安な面もちでカレヴィイを見ていると、彼はわたしの頭を撫でてきた。

……一応、わたしはカレヴィイよりも年上なんだけど……。

そんなことを思つてゐるうちに、ゼシリアと呼ばれた侍女が戻ってきて、程なくシルヴィ殿がお越しになられます、と伝えてきた。このゼシリアという人、結構地位がありそうだと思つたら、侍女長なんだって。

なるほど、どうりで妙な威厳があると思つた。

それからすぐに、シルヴィ王弟殿下が来られたといふことで、わたしは一気に緊張してしまつた。

執務室に入つてきた人は、カレヴィイと同じ銀髪と彼よりもやや薄い青い瞳の持ち主の少年というか、青年だつた。

褐色の肌のカレヴィイと比べて、色素は薄いらしく色白だ。

「お呼びですか、兄王」

十六という年齢にそぐわず、シルヴィ殿下はなんだかしつかりした印象を受ける。

後で知つたことなんだけビ、この大陸では十五で成人と見なされるらしい。

「ああ。この度、俺の婚約者となつた娘をおまえに紹介したいと思ってな」

カレヴィの言葉に、シルヴィ殿下は瞳を見開いた。

それに構わず、カレヴィは続けた。

「名はハルカ・タダノ。歳は二十歳といつ」としてあるが、実は二十七だ」

わたしの実際の歳を聞いて、殿下は黙つていられなかつたらしく、少々怒りを含んだ口調で言つてきた。

「兄王、婚礼を挙げる予定だつたのは、ディアルスタンの王女では？　この方は他の大陸の方に見受けられます。それに王の花嫁が二十七とはどういうことです」

確かに、彼の憤りは分かる。

それも兄の相手がこんな冴えない女なんだから。

「ティアルスタンとの縁談は残念ながら破談となつた。……だが、このハルカはティカ殿の友人だぞ。王妃とするのに不足はあるまい」「ティカ殿の……」

そこでシルヴィ殿下が千花の顔をまじまじと見つめた。

それに対して、千花はなんだか氣乗りしなさそうに頷いている。

……ああ、そうか。

それでわたしは氣がついてしまつた。

わたしを王妃にとカレヴィが言つたのは、最初は腹立ち紛れからだつたからかもしれない。けれど、途中でわたしとの結婚に乗り気になつたみたいのは、わたしが千花と友達だつたからなんだ。たぶん、わたしがカレヴィと婚礼を挙げれば、千花はわたしのために最強の女魔術師としてこの国に協力することになるのだろう。

……そつか。

別にわたし自身が必要とされてる訳じやないと分かつてしまつて、わたしあはなんだかがつくりしてしまつた。

そりゃそうだよね。

わたしには王妃にふさわしい美貌も気品も教養もないもの。でも、元々が喪女だったわたしだ。

わたし自身に期待されることは慣れきつている。

それでなんとかわたしは氣力を持ち直すと、笑顔でシルヴィ殿下に手を差し出した。

「はるかです。よろしくお願ひします、殿下」

「うちの礼儀作法はよく知らないので、彼に笑顔で握手を求める」と、困惑しながらも殿下は素直にわたしの手を握り返してきた。

「それとわたしはどうが立つてますが、一応清らかなので王妃となるのは大丈夫ですよ。わたしはこれまで男性にもてなくて恋人もいませんでしたから」

それを聞いて、シルヴィ殿下がなんとも言えない顔をした。  
あれ、わたしました変なこと言つたかなあ。

そしたら、カレヴィイが渋い顔をしてわたしに言つてきた。

「ハルカ、そんな余計なことは言わなくていい」

「え、そう？ 結構重要な事実だと思うんだけど」

わたしがカレヴィイにそう言つていると、シルヴィ殿下は困惑したように言つた。

「そ、そうですか。それでは俺のことはシルヴィと呼んでください。それから、あなたの義弟になるわけですから、兄王より丁寧な言葉遣いでは困ります」

「あ、そうだね」

彼の言つことももつともなので、わたしはあっせんといつもの言葉遣いになる。

……じゃあ、お言葉に甘えて、彼のことはシルヴィと呼ばせてもらおう。

「それじゃ、よろしくねシルヴィ」

わたしがにっこり笑うと、それまでいくらかうろたえていた彼がほほとしたように笑つた。

……うーん、可愛いな。

実はわたし弟が欲しかったんだ。

彼とは仲良くなれるように、暇を見て時々会いに行こう。

そんなことを考えて、にこにこしているわたしに、カレヴィイがい

きなりの爆弾発言を発してきた。

「それでだな。挙式の予定だが、一ヶ月後とすることにした」

ええっ、それっていくらなんでも早すぎない？

礼儀作法のこともあることだし、せめて三ヶ月は余裕を見てほしいんだけど。

でも、国民に近々挙式するつてことを知らせてあるんじゃやつぱり駄目なのかなあ。

……やっぱり、わたしうまい話に食いつきましたかもしれない。

などと思つても、後悔先に立たず。

ちょっと心配そうな千花の視線を受けながら、わたしはひきつり笑いをしていた。

## 007 カレヴィイ突撃？

「そんなに早く？ ちょっと早すぎない？」

この奇妙な状況を両親に説明して、会社も辞めなきやならないわ  
たしはカレヴィイに食い下がつた。

「……なにか困ることでもあるのか？」

カレヴィイが眉を上げて見てきたので、わたしは素直に伝えた。  
「会社をすぐに辞められるか分からぬし、そんなに急に王妃にな  
るもの、わたし自信ない」

できれば円満退社にしたいし、一ヶ月やそこらで礼儀作法が身に  
付くとは到底思えない。

「はるかの不安は分かるよ。準備するにもちょっと期間が短すぎる  
ものね。……カレヴィイ王、その辺りはどうにかならないのですか？」  
わたしのこぼした不安に千花は頷いた後、カレヴィイに交渉してくれ  
れる。

「期間が短いことは分かっている。だが、国民に婚礼が間近にある  
ことを知らせてしまつていて、わたしはちょっとがっ  
ない」

「……そつか、そうだよね」

カレヴィイにはつきりと断られてしまつて、わたしはちょっとがっ  
くり。やつぱり駄目かあ。

「悪いが、式は予定通り行う。なんならおまえの勤め先には俺から  
説明するが」

「え……」

カレヴィイの思つてもみなかつた申し出にわたしは目を見開いた。

いやでも、みんなにカレヴィイなんて言つて説明するの？ 真実を  
正直に話したら正氣を疑われかねないし。

「でも本当のこと話をわけにはいかないでしょ？ そこはうまく  
脚色とかないと。それにカレヴィイ、向こうのこと全然知らないで

しょ？ そんなんでうちの上司説得するとか無理があるんじゃないかな」

わたしがそう言つと、ちょっとカレヴィはむつとした。

ありや、機嫌をそこねちゃったかな。

カレヴィが好意で言つてくれるのはよく分かるし、それはすぐありがたいよ。

せつかくこう言つてくれてるのに悪いけど、でもカレヴィを職場に連れていくのはやつぱりやめた方がいいかもしないと思うんだ。千花はそんなわたし達の様子を窺いながら顎に指を当ててなにかを考えているようだつた。そして、おもむろに口を開いた。

「それなら、わたしも付いていつてその都度カレヴィ王に遠くから指示することにすればいいんじゃないかな？」

おお、それはいいアイデアだ。千花、ナイス。

カレヴィもそれはわたしと同じだったみたいで、納得したように頷いた。

「それはいい考えだな。ティカ殿、ぜひ頼む」

……となると、カレヴィを職場に連れて行かなきゃいけないんだよね。

うーん、でもそれって、わたしこんなイケメンと結婚するんです！ つてみんなに見せることになるんだよね。

今まででなかつたわたしが突然イケメンを連れていつたらどうなるか、想像しただけでも恐ろしい。

できればカレヴィが出てこない方向で、上司にわたしの退職を納得させたいけど、たぶん無理だろうなあ……。

そう考えてわたしがちょっと息をついていると、カレヴィがわたしの肩を励ますように軽く叩いた。

「そういうことだから、ハルカは安心している。ティカ殿の協力もあることだしな」

わたしの溜息を不安感からのものと勘違いしたらしいカレヴィは笑顔で言つてくる。

「う、うん」

仕方なくわたしが頷くと、それまで黙っていたシルヴィも後押しするように言った。

「兄王がいつも言っているのです。ハルカはもう少し気持ちをゆったりと持つて兄王に任せなおけばいいんですよ」

「う、うん……」

未来の義弟にまでいつ言われちゃもつ反論の余地もない。わたしはまた頷いた。

ああ、できれば穩便にことが済めばいいなあ、とか思つてたけど、これはちょっと無理っぽい。

けど、自分で決めたことだから仕方ない。

千花もわたしのために動いてくれることだし、ここは頑張ろう。とりあえず、その前に両親にカレヴィとの結婚を知らせる難題が待ち受けているけどね。

そして、カレヴィの王妃になることが決まったわたしには、彼の部屋の隣の王妃の間が与えられることになった。

まあ、隣と言つても間に共同スペースみたいなものがあつて、王と妃が一緒に過ごすときはそこを使うらしい。

この大陸ではどここの国の王宮もこの作りだと千花に教わった。千花はその能力でいろんな国に行つていろいろじしく、この世界のことを知るに当たつて、すごい先生だ。

「はるか、今日は積もる話があるから泊まつていきたいんだけどいい？」

千花がそう言つてきたのをわたしは喜んで受け入れた。

ああ、ひさしひに千花とお泊まりかあ。千花のこれまでの生活のことも聞きたいし、すごくわくわくする。

すると、なぜかカレヴィが渋ってきた。

「なにも俺の婚約者になった今日でなくともいいだろ。ティカ殿

とは別の機会に……」

「カレヴィイとはまだ結婚してるわけじゃないんだからそのくらいいいじゃない。本当に千花とは久しぶりに会ったんだから、たくさん話したいことがあるし」

「しかし、今夜は……」

そう口を挟んできたシルヴィイをカレヴィイが片手で押しとどめると、仕方なさそうに溜息をついた。

「仕方ない、今夜だけだぞ」

「あ、ありがと。それで、明日は次の日に会社に行くから家に泊まるね」

そう言つたら、なぜかカレヴィイがひきつったような顔をした。そして、それをシルヴィイが気遣うように見ている。

あれ、なんかまずいことでもあるのかな？

「……どうかした？」

千花もそんな二人の様子を不思議そうに見ている。

「いや、なんでもない。明後日にはハルカはこちりに住むところとで間違いないんだな？」

「うん」

……まあ、会社の上司の説得がうまく行けばの話だけど。

とは、思つてもわたしは口に出さなかつた。

それを言つたら、千花のお泊まりがなくなりそうな予感がしたからだ。

カレヴィイ達の様子はちょっと氣になつたけど、わたしは目の前の千花とのおしゃべりのことで頭がいっぱい、すぐにそれを忘れた。

……ああ、本当に楽しみだなあ。

これから氣の重い両親と職場の説得が待ち受けているんだし、とりあえず楽しいことで気を紛らわそう、うん。

それでわたしは今、わたしにあてがわれた寝室に千花といった。で、二人とも寝間着に着替えて、一緒に天蓋付きのベッドの上に座り込んでいる。

絹の寝間着は千花の綺麗な体の線を露わにしていて、友達のわたしでも惚れ惚れする。

出るところは出てて、手足は細くて長いつていいなあ。格好いい。

「……まず、はるかに謝らなきやいけないことがあるんだ」

千花が改まってわたしに向き合ってきたので、わたしはちょっとうろたえる。

「な、なに？」

「召喚の座標指定を失敗したっていのは実は嘘なの。わたしは、わざとあそこにはるかが現れるようにして向けたの」

「え……」

にわかには信じがたい話に、わたしの頭が理解を拒否する。

「うそ……」

じゃあ、千花がわざとわたしとカレヴィイが結婚するようにして向けたつてこと？

「本当にごめんなさい！」

千花はベッドの上で土下座する。対するわたしは信じられない事実に呆然としているだけだった。

「な、なんで……？」

とりあえずそれだけ絞り出すと、千花は顔を上げた。

「今回カレヴィイ王と結婚する予定だつたディアルスタンのリリーマリー王女は既に想い人があったの。それは王女の守護騎士なんだけど

なになに、王女と騎士の恋！？

それに対するわたしの反応は素早かった。なにを隠そう、今わたくしが描いている漫画は騎士と姫君の恋物語だ。なので、わたしはその話にものすごく興味を引かれてしまった。

「 詳しく聞かせて」

わたしは千花に詰め寄つて肩をがしつと掴むと、田を輝かせて彼女を覗きこんだ。

千花はそれに若干引き気味になりながらもちゃんと説明してくれた。

「 王女の守護騎士の方も、彼女を憎からず想つていてね。そのうちディアルスタン国王に思い切つて結婚したいと申し出るつもりだったらしいの」

「 あらー……」

わたしは思わず氣の抜けた声を出してしまった。

だつて、それじゃカレヴィ、思い切り邪魔者じゃない。

物語的にはおいしいけど、ディアルスタンの王女と騎士はさぞ焦つただろう。

下手したらそれつて、一人の愛の逃避行フラグだよ。

「 でも、王の方はそんなことは全く気づいてなかつたから、王女とカレヴィ王との婚約話を進めちゃつたのよね。カレヴィ王も今まで執務に明け暮れてたけど、重臣達にせつつかれて、そろそろ結婚しないとまずいと思つたらしくて、その政略結婚を決めたらしいのね」「 政略結婚かあ。よく知らないわたしに結婚しろつて言つてくるくらいだもんね。それくらい平氣でするよね」

まあ、あの時のカレヴィは、ほとんど決まりかけていた婚礼を目の前で駄目にされて頭にきてたんだろうけど。

それにしても、カレヴィは王女がどんな人物でも一向に構わなかつたつてことか。わたしはその王女じゃないけど、なんか失礼だな。わたしも人のことは言えないけど、本当に恋とか愛は必要ないんだな。結婚するはずだった王女が可哀想だ。

……けど、王なんだから、結婚するに当たつて相手のこと少しく

らい調べない？

そうすれば、王女とその騎士が恋仲なくらい分かりそななものだけど。

そしたら、さすがにカレヴィイもリリー・マリー王女と婚約しようとはしないはずだ。

「それで今回、リリー・マリー王女からわたしにどうにかしてほしいって依頼があつて。けど、あまり時間がなくてどうしようかと思つてたんだけど、婚礼契約書にカレヴィイ王がサインしなければこの結婚は成立することになるのよね。それで、そこに印を付けたの」「……それはわかつたけど、なんでそこにわたしが召喚されるの？」

「突然召喚されてきたことにはれば、契約書が滅茶苦茶になつても不自然じゃないかなと思って。それにはるかなら、カレヴィイ王とうまくいくかも知れないなつて思つたし」

「ええっ？ 千花、なに言つてるの？」

いきなり千花が妙なことを言い出したので、私はびっくりする。わたしとカレヴィイならうまいくかもつてなんだ。仮にもカレヴィイは王様で、わたしはただの一般庶民（それも喪女）だぞ。

悪いけど、それは千花の思い違いじゃない？

「二人とも自分の恋愛には頓着しないタイプじゃない。愛のない結婚が耐えられない人もいるけど、その点、はるかなら大丈夫だと思つたし。だから、わたしはその可能性にかけたの」

まあ、確かに結婚に夢も希望も持つてないけどね。千花、鋭すぎると。

「でも、本当にカレヴィイ王に手を出させつたりはなかつたんだよ？」

「それだけは信じて」

まあ、それだとカレヴィイが可哀想すぎる気もしたけど、最強である千花なら可能なんだろうな。

「うん、分かつてゐる。……千花、もしかしてわたしの行く末も心配してくれてた？」

わたしがそう言つと、千花はちょっとうろたえた。……図星があ。

確かにわたしも一生一人でも別にいいと思つてはいたけどね。

そうか、我が道を行くわたしは、そんなに千花に心配をかけてたのか。ちょっと反省。

「……恋愛面はともかく、カレヴィ王は悪い人じゃないから。はるかが不幸になることはないと思つたんだ。本当にごめんね、はるか」

そう言つと、もう一度千花は深々と頭を下げた。

「別にいゝよ、千花がわたしのこと心配してくれてるの分かつたし。千花はこのこともう気にしないで。……それに生活面もものすごく保証されてるしね」

いたずらっぽくわたしが笑つて言つと、千花は安心したように息をついて、「うん」と頷いた。

千花によると、わたしとカレヴィがある程度打ち解け、お互に信頼関係が築けたところでの本当の意味での結婚生活を送つてもひづりだつたそうだ。

でも、どうしても反りが合わなそつたら、婚約話を白紙に戻すつもりだつたとも言つていた。

……でもそれだと、わたしに話が有利すぎない？ なんだかカレヴィがいいように利用されてるみたいでちよつと可哀想な気がする。カレヴィも、わたしを娶ることで千花の力を借りようつていうんだからお互い様かもしれないけどさ。

でも千花のわたしに対する気遣いは、わたしの「子供産んでもいいよ」発言で無になつてしまつたわけだけど。

千花の気持ちは嬉しいけれど、やっぱりこうのフュアに行かないとな。

翌朝。千花とわたしとカレヴィは一緒に朝食をとりながら、これからのこと話をしていた。

「とりあえず、一回家に帰つて事情を話しておきたいんだけど。会社にも辞めるつて言わなきやいけないし」

「あ、そうだね。それがいいよ。わたしもはるかの家にお邪魔するから」

千花がわたしの言葉に同調してくれたことで、わたしはちょっとと癖のある両親の説得に千花という味方を得られて、かなり心強かつた。

うちの両親は千花の言つことならたぶん信用するだらうし、それにこざといつときには千花に魔法を披露してもらえばいいだらう。「うん、そうしてくれると助かる」

いきなり異世界の王様のところに嫁にいくつて言つたら正氣を疑われかねないから、千花が同行してくれるのは本当に助かった。

「……俺も行かなくていいのか？」

カレヴィイは執務とかいろいろ忙しいらしいんだけど、でもわざわざそう言つてくるのは、かなり気を遣つてくれてるんだろうな。「どうしても必要だつたら出てきてもらうかもしねないけど、今のところ大丈夫だよ。うちの両親はここに直接来てもらつて理解させるつもりでいるし」

彼氏もいなかつた娘が異世界の王様と結婚するなんて、普通だったら到底信じてはもらえないだろうけど、そこは千花がいるし、大丈夫だよね。

「……問題は会社かなあ」

わたしは焼きたてのパンにバターを塗りながら溜息をつく。

「そうだね。いきなりやめます、はい分かりましたって訳にはいかないものね」

千花もスクランブルエッグをフォークですくいながら同意した。

「うーん、急ですけど外国に嫁ぐことになりましたつて言つたら、認めてくれるかなあ。一応他の子になにかあった時のために仕事内容は教えてはあるんだけど」

ていうか、結婚すること自体信じてもらえないそな気がするの

は、わたしの気のせいだろうか。

なにしろ、わたしがもてなくて彼氏もいなかつたことは職場に浸透しているしさ。

「ではそこで俺を呼べ。必ず認めさせてやるから」  
おお、力強いお言葉。カレヴィイがそう言つと、なんとなく可能な気がしてくるから不思議だ。

「そう? ジャア、そうしようかな。カレヴィイ、その時はお願ひね」「ああ、まかせておけ」

そう言つて爽やかに笑う顔はマジでイケメンで、なんで結婚相手が喪女のわたしなんだと思わざるを得ない。……まあ、手近にいたのがわたしで、たまたま最強の魔術師の千花の友人だったからとうのは理解はしているけど。

でも感情面ではいかんともしがたく、なんとなくもやもやしつつも、わたしはとうあえず帰宅することにした。

千花の異世界移動魔法で「あらの世界の自分の部屋に移動してきましたわたしは、まず適当な服を選んで着替えた。

昨日いなくなっていた間、千花の家に泊まっていたことにするためだ。

言い訳するのに、いくら外見に頼着しないわたしでも、さすがにあのよれよれのジャージで外出はしないからそうしたんだけど、着替えてる間、千花はわたしの汚部屋を整理整頓してくれた。……う、ありがたい。

それで改めて着替えたわたしは、家の鍵とバックを持つて家の外に千花の魔法で移動した。

……家にいるのに、また外から入るつてのも、なんかすごく間抜けな感じがしないでもないけど仕方ない。

おとんとおかんにはわたしが昨日いなくなつてたのは分かっているだろうし、ちょっと情けないけどこれは苦肉の策だ。

「…………」

家の鍵を開けて中に入ると、リビングからおかんが飛びってきた。

「…………はるか？」

「おお、素早いな。…………」応わたしのこと心配してくれてたんだろうか。

「連絡もしないで、今までどこ行つてたの。携帯は通じないし、まったくあんたつて子は。頼みたい用事がつたのに」

「なんだ、結局わたしよりもその用事の方が大事なのか。

おかんからのこついう仕打ちは幼少から受けているけど、やつぱりちょっと落ち込む。

「まあ、いい加減、わたしもこついう人なんだと理解して受け流せばいいんだけどね。」

でも、理性では分かっていても感情が付いていかなことってあるでしょ？

それがまさここの時プチ爆発して、わたしはむつとしてしまった。

おかんの上からの物言いにわたしが黙り込んでいた、そこで千花がフォローを入れてくれた。

「おばさん、お久しぶりです。すみません、はるかはわたしの家に泊まつてたんです。心配をおかけしてすみませんでした」

申し訳なさそうに頭を下げて謝る千花を見て、おかんは驚いたようだ。まあ、千花は結婚して外国に行つてることになつてからね。

「まあ、千花ちゃん、また綺麗になつて。いつ帰ってきたの？」近所でも美人で出来がいいと評判の千花に久しぶりに会つて、おかんはころりと機嫌がよくなつた。

……ちょっと、ぐれてもいい？ それには十年ぐらい遅すぎる気もするけど。

「つい、タべです。それで、はるかに会いたくていきなり呼び出しちゃつたんですけど、本当にすみませんでした。だから、はるかは全然悪くないです」

「まあ、それじゃしようがないわね。でも、はるかは今度からそういうときは連絡入れときなさいよ」

「……分かった」

おかんの小言に内心うんざりしつつも、ここで逆らつとまたうるさいので、とりあえず頷いておく。

「さ、千花ちゃん上がって、上がって。すぐにお茶出すから」

おかんは上機嫌で千花を促すと、「お父さん、千花ちゃんが帰ってきたわよー」とリビングに戻つていつた。

……なんていうか、娘のわたしと千花との扱いの差が激しそぎる。確かにわたしは出来の悪い娘だけどさ。

「……おばさん、なんというか相変わらずだね……」

千花が同情するように言つてきたのをわたしはただ苦笑いして受

け止めた。

改めて自分の評価を親に突きつけられた氣がして、非常に情けなかつた。

「……それについても、『ごめんね。わたしが召喚したせいで、いろいろ迷惑かけて。おばさん達にも心配かけちゃったし、すぐに帰せばよかつたね』

千花が眉を下げる申し訳なさそうにわたしに謝つて來た。

美人の千花にそんな顔をされると、こっちが悪いことをしたように思えてくるから不思議だ。

「別にいいよ。うちの親がいい歳した娘を干渉すぎるんだよ」

……とはいって、連絡の一つもすればよかつたな。

携帯の電波くらい千花ならどうにかできただろうし、それは失敗だつたなと思つ。

まあ、過ぎてしまつたことは仕方ない。次は気をつけよう。

「それより、千花上がつてよ。千花には説明頑張つてもらわないといけないし」

そうなのだ。

情けないことに、わたしでは通常の結婚話すら信じてもらえない可能性が高いので、千花の存在は不可欠なのだ。

「うん、お邪魔します」

千花は頷いて玄関を上ると、わたしの後に付いてリビングに入つた。

「おじさん、お久しぶりです」

千花はおかんに比べるとちよつと影の薄いおとんに笑顔で挨拶した。

千花のその様子はとても爽やかで感じがいい。

「千花ちゃん、久しぶりだね。元気だったかい？」

「はい、おかげさまで。タベははるかをお借りしちゃつてすみませ

「うん、いいんだよ。」ハーフィーがなにとほるかは家にひきこも  
んでした

つてゐるんだから」「

……おとんもなにげに毒舌だよね。それにしても、どれだけ親の評価低いんだ、わたし。

わたし達はとりあえず、リビングのすぐ傍のダイニングテーブルでコーヒーを飲んでいた。

千花はおとんとおかんに外国での生活についていろいろ聞かれていたけれど、そのうちにわたしは業を煮やして無理矢理話を遮った。

「あ、あのさ、実は大事な話があるんだ

「なに、まさか会社辞めたいとかじゃないでしょ?」この不景気に冗談じゃないわよ

う、いや、それも含まれてはいるんだけどね。

わたしが口こじもると、おかんの目がつり上がる。

おかんがなにか言おうとする前にわたしは慌てて言った。「じ、実は今度、わたし結婚することになったんだ

すると、おとんとおかんがうろんな目でわたしを見た。

まあ、今まで男の影がなかったわたしの言づことを一人が信じられなくとも仕方ない。

「本当です。あの変なことを言うと思われるでしょ? けど、聞いてください。はるかは異世界の王様の花嫁になることになりました」この近所の人の評価が抜群に高い千花のその言葉に、おとんとおかんの目が点になった。

「あの……、千花ちゃん? どつしちゃったの? はるかならともかく、千花ちゃんがそんなこと言づなんて……」

わたしならともかくって、どういう意味だ、おかん。

いくらファンタジー漫画を描いているわたしでも、現実と空想の区別くらいはついてるぞ。

「信じられないのも当然ですね。……実はわたし、その異世界で魔

「術師をしています」

見てください、と千花は言つと、その手から明るい球体を出した。……もしかして、これが昨日千花が言つてたあかりを灯す魔法なのかな？

千花はふわふわ浮かぶその球体をいくつもその手から出した。それをおとんとおかんが釘付けになつて見ている。

「……千花ちゃんは手品師なのかな？」

おとんが間の抜けた顔で聞いてくる。まあ、魔術師＝手品師と受け取つても不思議じやない。

「違います。言つなれば、魔法使いですね。……よく見ててください」

千花はあかりの魔法を消してから椅子から立ち上がると、瞬間的にリビングにあるテレビの傍に移動した。

それをぽかんとして見る、おとんとおかん。

……まあ、信じられなくとも無理はない。わたしもこんな事態にならなければ、到底信じられなかつた。

千花はまた瞬間的にテレビの傍からもう一度元の場所に戻つてくれる。

それをおとんとおかんは少し恐怖の入り交じつた目で見ていた。

「……信じていただけましたか？」

その視線に少し寂しそうな笑顔で千花は尋ねる。

「そ、そんな馬鹿なことが……」

おとんが千花に事実を突きつけられても、まだ信じたくないというように呟いたけど、千花がそれに対しても頷いて言つた。

「あるんです。これからその王様のところに移動してもらいますが、玄関で靴を履いてもらつていいでしょつか？ できれば出かける支度をしていただけるといいんですけど。あと戸締まりもしてください

い

「あ、そうだね。ガスの元栓も閉めとかなきや」

呆然としているおとんとおかんを後目に、わたしは家の戸締まり

を開始した。

二人は果然として今は使いものにならないし、わたしが率先してやるしかない。

「おじさん、おばさん、信じられないかもせんが、これは本当のことです。すみませんが、準備してください」

千花がおとんとおかんに向かって右手を広げると、二人はふらふらと自分達の部屋に行き、よそ行きの服に着替え始めた。

……もしかして千花がなにかしたのかもしれない。

おとんとおかんは玄関で靴を履いたところで我に返ったようだつた。

すっかりよそ行きの格好になつている自分達におとんとおかんはうろたえた。

「こ、これはいったい……」

「千花ちゃん、どうなつてるの、これ」

「すみません、説明は後で。……はるか、行くよ」

「うん」

千花に促されて、わたしも慌てて靴を履いた。

……しかし、さすがに四人も玄関にいると狭い。

けれど、それを気にする様子もなく、千花は短く何事かを唱える。すると、その次の瞬間にはわたし達は豪華絢爛な広間に移動していた。

ザクトアリアなのは分かるけど、えーと、ここのはどうだるい？……？

## 010 カレヴィイとの面親の謁見

千花に連れられて来たといひは、今まで一度も見たことのない場所だった。

……まあ、もっともカレヴィイの執務室と居室、その間の共同空間と王妃の部屋くらいしかまだ行ったことないんだけどね。もう少しわたしもこの王宮の間取りを覚えた方がいいかもしけない。

とは言つても、この中はとんでもない部屋数らしいんだだけね。でも、所要な施設の場所くらいは覚えた方がいいだろ？

「来たな、ハルカ」

その声のした方を見ると、一段高くなつたといひにある豪華な椅子にカレヴィイが悠々と腰掛けていた。ひょつとしてあれは玉座だろうか？

「ここは……？」

わたしが疑問を口にすると、おじさん改め、宰相のマウリスがそれに答えてくれた。

「ここは謁見の間ですよ、ハルカ様」

言われてみれば、確かにそれっぽい。わたしはなるほどと納得した。

「この謁見の間は絢爛豪華ではあるんだけど、不思議と下品な感じはしない。それは所々置いてある品のある調度品のおかげかもしない。

「ハルカ、そちらにいるのがおまえの父母か？」

玉座の上からカレヴィイが声をかけてくる。それにわたしは頷いた。

「うん、そう」

うん。こうしてみると、カレヴィイ、確かに王様らしく見えるね。なんというか、王様！ というオーラみたいなものがある。

そこで初めておとんとおかんは我に返つたらしくて、見慣れない

豪華絢爛な謁見の間と、若いけれど威厳のある人物を目の当たりにして、落ち着かなさげに視線をさまよわせていた。

「そつか。……俺はザクトアリア王国の国王カレヴィイだ。この度はるかを花嫁に迎えることになった。今後、よろしく頼む」

「は、はあ……」

威風堂々としたカレヴィイに対し、おとんは気の抜けた返事をした。  
……まあ、今まで一緒に暮らしていた娘が、突然異世界の王様の花嫁になるなんて訳の分からぬ状況になつたわけだし、この反応は無理もないだろう。

一応反応したおとんはまだいい方で、おかんにいたつては呆然とかレヴィイの端正な顔を見つめているだけだった。

「ハルカ、隣に座れ」

おとん達と一緒にいたわたしは、カレヴィイに隣の席を示されてちよつと驚いてしまつた。

だつて、あれつて王妃の席じゃない？　わたしはまだ王妃になつてないぞ。

「え、いいの？」

「構わない。おまえは一月後には俺の妃になる。遠慮するな」

そう、それじや遠慮なく。

わたしはカレヴィイの言葉に従つて、一段高くなつたところに上がり、カレヴィイの横の豪華な椅子に座つた。

そしておとんとおかんの方に向くと、二人は信じられないものを目にするかのように、並んで座つているわたしとカレヴィイを呆けて見ていた。

それを千花がちょっと離れたところで様子を窺つている。

異世界に来てしまえばもうこっちのものだし、大体おとん達を説得できたも同じだから、千花には感謝だね。

「今言つた通り、一月後にはハルカは俺の花嫁になる。そなたらもそのつもりでいてくれ」

「……はあ」

おとんとおかんは未だに信じられない様子で、間の抜けた返事をする。

「……やつこいつですか、今現在はるかが勤めている会社は辞めてもうらづことになります。その代わりと言つてはなんですが、わたしが新たに会社を設立して、はるかをその事務員としていたしましたから、経済的な心配はいらないと思います」

「千花ちゃんが会社を……」

千花の説明にぽかんとするおとんとおかん。結婚しているとしても、まだ二十代の千花が会社設立つていうのは驚愕に値するのだろう。

でもこれは、わたしが異世界で王妃になるよりも現実的だと思うぞ。

「ティカ殿。そのことなんだが、ハルカにかかる費用はザクトアリアから出すことにしたいのだが」

「そうですね。はるかは王妃になるのですし、その方がいいかもしれませんね」

カレヴィイの提案に千花は頷いて了承した。

そうか、わたしの給料はこの国から出るのか。まあ、それが一番妥当だろつな。

千花にも変な負担はかけたくないし。

でもそうなると、わたしも趣味だけにかまけてられないな。王妃の仕事も頑張らないと。……今のところ、どんなことをやらなければいけないのか全然分かつてないけれど。

まあ、それは後でカレヴィイとか侍女長のゼシリアに聞けばいいか。「……ハルカの父母はなにか言いたいことはないか？　あれば答えるが」

カレヴィイのその言葉に、おとんははつとして言つた。

「お、恐れながら、どうしてはるかが王妃に選ばれたのでしょうか？　この娘は容姿は普通ですし、性格も決して気の回る方ではない。友人には恵まれていますが、そう社交的でもない。それなのに、な

ゼですか」

すると、今まで呆然としていたおかんもそれに便乗するように言った。

「そ、そうです。王様ならもつと若くて綺麗な方を選び放題でしょう。それなのに、なぜよりによつてこんな娘なんですか？　わたし共にはとても理解できません」

……一人とも、ここぞとばかりに言いたい放題だな。一人が普段わたしのことをどう思つてるかよく分かつたよ。

わたしが思わずむつとしてると、カレヴィイが椅子の肘掛けに置いてあつたわたしの手にその手を重ねてきた。

「王である俺が、ハルカを選んだのだ。それに文句があるのか」

カレヴィイが威圧的にそう言つと、おとんとおかんはかなりびびつたようだつた。そして、それ以上言つ氣もなくなつたようで、口を噤んでしまつた。

「……もつこのことに対する意見はないな。それでは、これで謁見は終了とする。ハルカの父母は別の間で休むよつこ。……ハルカ、来い」

わたしは席を立つたカレヴィイに手を取られて立ち上がると、彼にぐいぐいと引っ張られた。

彼の表情をそつと窺うと、顔が険しい。

……なんか、カレヴィイ結構怒つてるみたいなんだけど。

ひょつとして、おとんとおかんの話を聞いて、変な女を掘まされたとでも思つてゐるのかなあ……？

それだと、王妃業の傍らに趣味三昧の生活が泡になつて消えそうな気もしたけど、でもわたしが千花とザクトアリアの繫ぎということがあるから、カレヴィイも王の立場からしたら簡単には婚約は取り消せないはずだ、……けど。

……うーん、困つたなあ。

一ヶ月後の婚礼については早すぎると思ってたけど、でもここでカレヴィイにやっぱり気が変わったとか言われたら、それはそれで困

る。

それじゃ、おとんとおかんに後でなんと言われるか分からぬ。  
ね。

わたしは困惑しながらも、市場に売られていく子牛の「」と、複雑な気分でカレヴィに手を引かれて行った。

## 011 憤るカレヴィイ、舞い上がる両親

わたしは機嫌の悪そうなカレヴィイに、そのまま謁見の間の控え室みたいなところまで強引に連れていかれた。

そしてカレヴィイはわたしと向き合つ。

「こんなことは言いたくはないが、なんだ、あの両親は」「……あれ、別にわたしに怒っているわけではないんだ。

わたしは思わず気が抜けて、カレヴィイの端正な顔を見返した。

「……俺は、このことに対してもおまえの父母からの怒りを受ける覚悟もしていたんだぞ」

「え……、なんでおとん、じゃなかつた、父と母が怒るの？」

カレヴィイの思つてもいなかつた言葉に、わたしは思わずぽかんとしてしまつた。

「普通は、異世界などという訳の分からぬことに大事な娘をやりたくないだらうが」「あー、普通はそうなのか。

まあ千花が言うには、うちの両親はちょっと特殊らしいし。

「……でもたぶん、二人ともまだ状況がはつきり把握できていないだけなんぢやないかな。だから失言みたいなことしちゃつたんだと思うし」

おとんとおかん、謁見の間中呆然としてる」とがほとんどだったものね。

それがいきなり威厳のあるカレヴィイに意見を求められたら、それはつらたえるだらう。

でもまあ、あれは娘の結婚相手に対する失言だらうけど、まじ「い」となきあの一人のわたしに対する本音なんぢやうな。

……そう考えると、なんだかちょっと落ち込んできた。

おとんとおかんがあの調子のはいつものことなんだから、いい加減わたしも慣れというか、諦めればいいのに。

でもそれでもやつぱり、10の歳になつても親には認められたいんだろうか。

「それがなんだ。娘のことをあげつらつような真似をして。親なら娘の長所くらい分かつていそうなものだな」「うー

「あー、カレヴィイわたしのために憤つてくれてるんだね？」

「彼に惚れるまではいかないけど、これにはちょっと感動した。

カレヴィイ、なんだかんだ言つていい人だな。

千花しかり、親よりも血の繋がりのない人の方が信頼できるってなんだかちょっと淋しくもあるけれど。

「……未来の王妃をあそこまで言われて黙つているほど、俺は薄情ではないつもりだぞ」

「うん、ありがと。……でもわたしの長所つて自分でも思いつかないな。だからうちの両親がそういう物言いになつたのも仕方ないと思うよ」

わたしがそう言つと、カレヴィイは顎に手を当てて少し考え込んだ。「ハルカの長所は、おおらかなところじゃないか？　たまに卑屈な発言も混じるが」

「……卑屈？」

カレヴィイの言つていることがよく分からなくて、わたしは首を傾げた。

「自分はもてない女だと豪語していたじゃないか」

「ああ、あれね。

「いや、実際もてなかつたし。だから、そう言つただけなんだけど」胸が大きいけれど変なセクハラはされるけど、もてた覚えは全然ない。

「それはやめる。おまえの容姿はおまえが言つほど酷くない。それに、おまえは俺の妃になるのだから、そんなことはもう関係ないだろ？」「うー

「うん、まあ。そうだね」

わたしはカレヴィイのその言葉にこくんと頷いた。

王様でイケメンなのに、気さくでこういう気遣いができる彼は、結婚相手としては、これ以上は望むべくもないのだろう。

……ただし、突然現れたわたしをほとんどやけくそで王妃に据えようとしたことからも、結婚に対するやる気がほとんど皆無だということが分かる。

後でわたしが千花と友達だって知つて、この結婚が国益になるつて理解した途端、やたら乗り気になつたけどさ。

たぶん、カレヴィイはわたしと同じく愛や恋というものあまり重視していないかも知れない。

そんなことを漠然と考えていたら、カレヴィイはわたしが頷いたことで、ほっとしたようだった。

「……それでは、ハルカの両親と合流するか。ハルカはまた着替えてこい」

「え、このままでいいよ」

いちいち着替えるの、めんどくさいし。

この世界の格好じゃないけど、一応それなりの服装をしているんだからこれでいいじゃない。

わたしは断つたけれど、カレヴィイがそれを許さなかつた。そして、有無を言わざない口調で言つた。

「ハルカ、着替える」

カレヴィイの命令で大急ぎで自分に「えられた王妃の間に戻つたわたしは、侍女達に例のキラキラした衣装に着替えさせられた。

あ、そうだ。

そういえば、明日会社辞めるつて言つに当たつて、用意するものがあるんだつた。

わたしがそれまでうつかり忘れていたのは、会社の人配るお菓子

子。

急だつたから無理かなあと思つたけれど、ゼシリアに一応言つてみたら、『自宅に帰宅される前には』用意しますと言つてくれた。

わあ、ゼシリア、有能すぎる。

「ありがとう。助かる」

わたしが感謝の言葉を彼女に伝えると少し困惑したようにゼシリアは言った。

「わたくしは当然のこととしたままでですから、そんなもつたいたいないお言葉など、わたくしじきにおかけにならないでください」

「いや、でも嬉しかったし。本当に助かったし、ゼシリアありがとうね」

わたしがにっこり笑つて言つと、「ありがたいお言葉、ありがとうございます」と少し困つたようにゼシリアが微笑んだ。

……うーん、王妃となる身分の者はやたら侍女に礼を言つものじやないのかな?

でも、いつこつのは身分どうりに関わらずこくへり言つてもいいんじゃないかとわたしは思つんだ。

それで、支度を終えたわたしは、ゼシリアに案内されておとんとおかんのいる部屋に通された。すると既にそこには千花の他にカレヴィも来ていた。

中央の大きなテーブルには、おいしそうな料理と中身はお酒と思われるデカンターなんかが置いてあって、それを皿にしたらなんだかお腹がすいてきた。

わたしの姿を認めたおとんとおかんは真っ赤な顔でふらふらとわたしに近寄つてきた。

「おお〜っ! はるか、そつこつ格好をするとまるで別人だぞ! さすが未来の王妃だ!」

なにがさすがなんだかよく分からぬけど、おとんとおかんは既に出来上がつていた。

……なんで、よりによつてこんな場所でこんなに飲んだんだ。立派なよつぱらいじやないか！

「はるか、よくやつたわ！ またかあんたがこんな玉の輿に乗るなんて、まるで夢みたいだわ！」

そう言いながら、おかんは酒と思われるグラスをある。その様子をカレヴィは呆れたように見ていた。

まあ、彼の気持ちは分かる。

さつきまで、おとんとおかん、カレヴィに湯を入れられてたのに、それが一転してこの有様なんだもん。

「はるか、じめん。ちょっとお酒でも入れて、気分をほぐしてもらってから説明しよつとしたら、おじさんとおばさん、飲み過ぎちゃつて、こんなことに」

千花が申し訳なさそうに謝つてくるけど、どう考へてもこんなに正体を失うほど飲んだ本人達に問題があるだろ。ちょっとは自制しろ。

「侍女になにを用意したのか聞いたら、ルルア酒だったそうだ。これは飲みやすいが、かなり強い酒だ」

カレヴィは、強いと言つわりにはそのルルア酒なるものをくいくらい飲んでいる。カレヴィはお酒には相当強いみたいだ。

わたしはカレヴィに促されて、彼の隣に座つた。

カレヴィにルルア酒を注いでもらうと、一口それを呑んだ。……なるほど、フルーティで確かに飲みやすい。

そんなに強いお酒なら、ちょっと油断するとすぐに酔つぱらう。うだ。

そう思いながら、わたしはおいしい料理を肴にルルア酒をちびちびやついていたら、またしてもおとんとおかんが寄ってきた。

「正直、おまえにはまったく期待していなかつたがあー、世の中には不思議なこともあるもんだなあ～」

……うつせー、おとん。

さりげなく傷を抉るようなこと言つた。

「それもこーんなハンサムな王様とおー。わたしがもつりょつと若かつたら代わりたかつたわ～」

「……もつりょつとつて、それでも歳取りすぎだらう、おかん。

「……しかし、ハルカの両親は変わっているな

カレヴィは溜息をついてしみじみと言つ。

……わたしがここに来るまでにおとんとおかん、いつたいなにをやつたんだ。

千花に聞くと、一人は狂喜乱舞の踊りを今まで披露していたらしい。

うわあ、変な酔っぱらいだ……。傍田にはなぜ奇妙な光景に映つただろう。

しかし、おとんとおかんに踊り癖があるなんて初めて知ったよ。なんだかさつき一人にムカついていたのが馬鹿馬鹿しくなり、わたしは手元のルルア酒のグラスをうつかりあおつてしまつた。

そしてその後。

見事に出来上がつてしまつたわたしは、カレヴィを床に正座させて「政略結婚も結構だけど、そればっかりつていうのはどうなの？それに、もしわたしがとんでもない不細工だったらどうしてたの？」と懇々と説教していたとか。

それを後で千花から聞かされたけど、わたしはまったく覚えていなかつた。

## 012 突然ですが結婚します

とりあえず、おとんとおかんにはわたしがカレヴィの妃になることは理解してもらつた。

だけど問題はまだ残つている。というか、これが最大の難関だ。ザクトアリア王妃になるには、その準備期間もあるから、わたしはすぐに会社を辞めなければならない。

ただ、これが社会人として周りに非常に迷惑をかける行為なのは分かつていて、それは本当に申し訳ないとと思う。

わたしの直属の上司である主任も今すぐ辞めることに済るのは容易に想像できる。

この世界に来たのが金曜日の夕方で、そして今日は土曜日。明日は会社の出勤日だ。

上司の反応やら、突然仕事を放り出すことになつたことについて考えるとともに気が重かつたが、とにかくわたしは休み明け早々主任に話をするとした。

そして、月曜日の朝。

わたしはいつも通り車で出勤した。

ゼシリアには昨晩のうちにみんなに配るお菓子を丁寧かつ上品なラッピングで個別包装してもらつてある。

これなら、みんなに配るのに申し分ない。

ゼシリアと、たぶん厨房の人達いい仕事するなあ。

ちなみにカレヴィと千花はもう少ししたらわたしの魔力をたどつて、会社に移動してくる手筈になつていて。

わたしはいつもより早めに会社に出勤して、主任に話を切り出すための準備をしていた。

今日のわたしは、あか抜けない水色の事務服と白いスカートというこの会社ではまあ標準の格好だ。

「悪いけど、しばらくここで待機しててね」

こちらの世界に移動してきたカレヴィや千花といふ備品倉庫は滅多に人が来ない穴場だ。

もし万が一人が来ても、千花がいるから隠れることはできるし、まあ大丈夫だろう。

「……俺も一緒に行かなくていいのか？」

千花に異世界移動されてきて、この世界の服装をしているカレヴィが少々心配そうに言つてきた。

うん、イケメンはなにを着ても似合つなとこんな時だけわたしは妙に感心してしまった。

カレヴィは初めてきた世界だといふのに、そのことに動搖する気配もない。うむ、肝の据わつたやつだ。さすが王様。

……とは言つても、まだ車とか電車とか、立ち並ぶビルとか見た訳じゃないから、そこ辺はまだピンときていなければかも知れないけど。

「うん、まだ大丈夫。必要になつたら呼びにくるから。……ちょっと殺風景なところだけど、我慢してね」

わたしは力強く頷くと、カレヴィと千花も「分かった」と言つて頷いた。

「はるか、頑張つて。駄目そんならすぐそつちに向かうから」

わたしは千花の応援を受けて、心強く思つた。千花がいるなら百人力だ。

「うん、じゃあ後でね」

わたしは一人の存在をありがたく思いながらも、千花とカレヴィに手を振り、職場の事務所に向かつた。

始業四十分前の事務所にはまだ誰も来ていなかつた。

この会社はみんなぎりぎりにしか来ないらしく出勤が遅い。他の会社に勤めている友達に聞いてみたら、驚かれたけれど。

わたしは謝罪と今までの感謝の意味も込めて、みんなの机の上をいつもより綺麗に水拭きしてから、床を簾で掃いた。  
ちりとりでゴミを集めていたといひで、よつやく主任がやつてきた。

「おはよう。なんだ、只野ちゃん、今日はやけに早いな」  
まあ、いつも二十分前とかだもんね。主任がそのままのまま当たる前だ。

「ええ、まあ。主任、おはようございます」  
わたしは適当にはぐらかしつつ彼に挨拶すると、とつあえずちりとりのゴミを捨てに行つた。

それから給湯室で手を洗つて、お茶の準備をする。  
お湯で急須と主任の湯呑みを暖めてからそのお湯を捨て、お茶を淹れる。

わたしは主任の湯呑みをお盆に乗せて運びながら、結婚話をなんと言つて切り出すつかと考える。……あ、もつ着こちやつた。

「どうぞ」「ありがとう」

わたしが机にお茶を置くと、主任はまず一口啜つてから唸つた。  
「うーん、やっぱ只野ちゃんの淹れたお茶が一番いいなー。なん

といふか、春山ちゃんは淹れ方が適當だからなー」

ちなみに、主任が言つた春山ちゃんといふのはわたしの後輩に当たる事務の女の子だ。

まあ、わたしの淹れ方もじへ普通なので、そんなに褒められるようなものではない。

わたしはお盆を胸の前で抱え込むと、カレヴィーとの結婚話を思い切つて言つてみるとこした。

「とにかく、主任。お話があるんですが

「ん？ なんだ、困ったことでもあったたの？」

「いえ、そういうことではないんですけど……」

「むしろ困るのは、わたしじゃなくて会社の方なんだけれどね。突然わたしが抜けたとしたら、会社としても仕事のやりくりに頭

を悩ませるだろ？」「…………」

「…………実はわたし、今度結婚することになつたんです」

そう言つた瞬間、お茶を飲んでいた主任が思いきり吹き出した。ちょっととその反応はベタすぎるだろ、と漫画描きの視点から、つい心の中でつっこんでしまう。

とりあえず、わたしは急いで給湯室から布巾を取ってきて、惨憺たる状況の主任の机を拭いた。

「あ、ああ、ありがと。…………けど、只野ちゃん結婚するつて本当なのか？」

「本当です。あと急で申し訳ないのですが、すぐに辞めさせてもらいたいんですけど」

わたしがそう言つと、案の定主任は渋い顔になつた。「いやつぱり、こいつ反応になるよね。」

「すぐつて一ヶ月後くらい？」

「いえ、できれば今日にでも」

かなりの無茶を言つてるのは自分でも分かっている。主任も渋りきつた顔になつた。

「それは困るよ、引継もあるし」

「そりや、そりやうな。」

わたしでもこんな状況にいきなりなつたら困るだろ？

「…………一応、春山さんにはわたしの仕事を教えてはあります」

「でも、いきなり仕事量一倍じゃ、とても春山ちゃん一人じゃさばききれない。次の子を入れるにしても、只野ちゃんにはしばりこてもらわないと」

「すみません。でも、外国人に嫁ぐことになつたので、それは無理なんです。本当にすみません」

わたしはここぞばかりに主任に誠心誠意頭を下げて謝った。……  
こんなことしても会社に迷惑をかけるのは変わりないんだけど、やっぱり気持ち的にすぐ申し訳なかつたし。

「只野ちゃんが外国人と……」

主任はモテない女のわたしが急に結婚すると言つてきて、そしてその相手が外国人だということにショックを受けたようだった。  
その時だつた。

「おい、ハルカ。まだ説得できていないのか」

呼んでもいないのに、なぜかカレヴィイがそこに現れてわたしは驚いた。

さらに間の悪いことに事務所の他の人達や作業員のおばちゃん達が出勤してきて、どう見ても外国人で、飛び抜けた美形のカレヴィイを目にして大騒ぎになつた。

彼がわたしの関係者だと知られて、わたしはもみくちゃにされながら、噂好きのおばちゃん達に質問責めにあつ。

「……え、えーと、彼がわたしの結婚相手です」

仕方なくわたしは、カレヴィイを手で示しながら紹介する。

その後の騒ぎは、もちろん先程の比ではなかつた。

ちょっとした大混乱の後、わたしとカレヴィイは主任から報告を受けた係長、課長と一緒に応接室にいた。

「ほう、それではカレヴィイさんはフランスの方なんですね」「どうやっているのかは分からぬけれど、わたしとカレヴィイの耳元には千花の指示が隨時届いている。

わたし達はそれに従つて、目の前の課長と係長に結婚に至る嘘の説明をしていた。

彼らを騙していることは心が痛むけど、本当のことを言つわけにはいかないので仕方がない。ここは割り切つて話を進めなきや。  
最初にカレヴィイをフランス人という設定にすると言つた千花に、浅黒い肌のカレヴィイははたしてそう見えるのか不安を覚えたわたし  
だつたけれど、まったく問題なかつたようだ。

フランス人といったら今まで白人のイメージしかなかつたけれど、  
実際は色々な人種の混血が進んでいて、見た目も様々なんだそうだ。  
課長と係長もそれは初耳だつたようで、カレヴィイのどこの国とも  
知れない容貌を興味深げに見ていた。

「俺の家はそこそこ格式のある世家だ。そこで、ハルカには花嫁修業がてら、言葉を磨得してもらつ。その為には今すぐ日本を発たなければならぬ」

課長と係長相手にどこまでも偉そうにカレヴィイは言つ。

まあ、一国の王様だから仕方ないのかもしれぬけれど、もうち  
よつとなんとかならないものか。

カレヴィイの第一声を聞いた時から、わたしは思わず頭を抱えたくなつてしまつたけど、生まれながらにして王になることが決まつて  
いた彼には臨機応変という文字はないらしい。

ちなみに、課長と係長には最初にカレヴィイは教わった日本語が偏  
つてるので、偉そうに聞こえるのは勘弁してくださいと断つてあ

る。

でも、課長と係長もカレヴィの威風堂々とした態から、その口調もあまり気になつていないようで、むしろとても偉い人を迎えるような態度になつてゐる。

「そうですか。只野さんは仕事もできるし、本当は抜けられると困りますが、そういう事情ならいたしかたありませんね」

「おお。課長、今のはお世辞でも嬉しいよ。」

カレヴィの言葉に領きながら言つた課長の言葉にわたしはちょっと感動する。

「確かに、今度から只野さんに急ぎの文書を上げてもう一つことができなくなるのはちょっと厳しいな。只野さんのタイピングのスピードは貴重だったからね」

確かにキーボードと電卓の打ち込み速度だけはこの会社の誰にも負けない自信はある。

でも、こうやって認められてると思つと嬉しいな。

「すみません」

自分では駄目駄目な人間だと思つてたけど、会社の人達はこんなわたしを評価してくれてたんだ。

そう思つと本当に申し訳なくて、わたしは一人に深々と頭を下げた。

「まあ、こんな事情ならしあうがないから、只野さんは自分の幸せを優先して。慣れない海外生活、体に気をつけ頑張つてね」

「あ、ありがとうございます」

課長がわたしに激励の言葉をかけると、係長も続けて言つた。

「溜まつてゐる有給休暇はちゃんと消化するからね。仕事のことなら、みんなで分担してなんとかするから、後のこととは気にせず、自分の幸せのことを考えてね」

「本当にすみません。ありがとうございます」

「課長と係長、本当にいい人過ぎ」

暖かい一人の言葉にわたしはつい涙腺が緩んで、ちょっとだけ泣

いました。

「ハルカ」

カレヴィがわたしの肩に手を置いて、心配そうに覗きこむ。

課長と係長はそんなわたし達を微笑ましそうに見ながら、心から祝福してくれた。

そしてめでたく寿退社することになったわたしは、自分のロッカーの整理をしてから、机にある私物をまとめると、事務所の人達にゼシリ亞に用意してもらつたお菓子を配つて回つた。

ザクトアリアの王族用に出されるお菓子だから、その美味しさは保証済みだ。

「おめでとう、只野さん」

「まさか只野ちゃんが嫁に行くとはなあ。向こうでも頑張つてね」「只野さん、こんな素敵な彼氏がいるなら早く言つてよ。……前に嫌なこと言つちゃつてごめんね」

先週、取引先の接待にわたしをかりだそつとしていた相田さんがばつが悪そうに謝つてきた。

「本当にすみません。あの時のことは気にしてないですから、相田さんも気にしないでください」

相田さんもこうやって自分の非を認めてきちんと謝つてくれるんだから、別に嫌な人ではないんだよね。ただ、物言いがちょっときついだけで。

「只野さん、いなくなつちゃうなんて寂しいですぅ～」

そう言つて抱きついてきたのは、後輩の奈緒ちゃん。さつき主任に春山ちゃんと呼ばれていた子だ。

ちよつと頼りないところもあるけれど、きっと彼女ならわたしの代わりにバリバリ働いてくれるだろうと信じている。

「急なことで本当にごめんね。迷惑かけるけど、後のことは頼むね

」

わたしがそつぱつと、奈緒ちゃんは真っ赤な皿をして、はい、と頷いた。

「せつかくのおめでたいことなのに、只野ちゃんにお祝いをあげられないで」めんね

主任が申し訳なさそうに言つてきただけれど、いきなりこんな無茶を聞いてくれただけでも充分ありがたい。

「いえ、そんなこと気にしないでください。急に無理を言つてすみませんでした。それから……、今まで本当にお世話になりました」

わたしは事務所の人達に深々と頭を下げてから、失礼しますと言つて、後ろ髪を引かれつゝも踵をかえす。

わたしはカレヴィに肩を抱かれて、その背に「只野さん、お疲れさま」「体に気をつけてね」「お幸せに」等々、ありがたい言葉を受けながらその場を去つた。

わたしが備品倉庫まで戻つてくると、その場に待機していた千花は笑顔で迎えてくれた。

「あつ、はるか！ よかつたね、うまく説得できて」「うん」

千花のその笑顔を見たら、なんだか急に泣きたくなつて、わたしは彼女に抱きついてしまつた。

やつぱり、みんなとそれなりに仲良くなつて、一生懸命働いてた会社を辞めるのはすごく淋しいよ。

ぽろぽろ涙をこぼすと、千花は慰めるようにわたしの背を優しく撫でてくれた。

「……いつこいつ場合は、普通、夫になる俺に抱きつくものじゃないか？」

とかなんとか、カレヴィがぼやいたらしいけれど、その時のわたしもちらん聞いている余裕なんてなかつた。

たとえあっても、たぶんカレヴィに抱きつくるのではないと思つた  
どね。

## 014 花嫁修業……なのか？

めでたく寿退社したわたしは、またザクトアリアに戻つてきてい  
た。

その前に家に戻つて、サイトには私事が忙しいので更新が滞ると  
告知してあるので、これでしばらくは安心だろう。

これからわたしには、怒濤の花嫁修業が待つてゐるんだよね。…

…それを考えると、ちょっと気が重い。

千花もいろいろ忙しいらしくて帰つちゃつたし、これからのこと  
を考えるとかなり不安だ。

わたしは王と王妃の共同の間でカレヴィと晩餐をとつた後、香り  
高いコーヒーを飲みつつ、少し溜息をつく。

それを耳聴く聞きつけたカレヴィが言つてきた。

「なんだ、ハルカ。不安なのか？」

「……まあ、不安といえば不安だけど。わたしは庶民だし、ちょ  
うと気が重いよ」

はたして一ヶ月の間に王妃らしい気品を身につけることができる  
のか、それさえ不安だ。

「そうか、それもそうだな。だが、おまえは無理をせず、徐々に慣  
れていけばいい。……そういうおまえには決まった侍女を付けて  
いなかつたな。代々王妃には三名付くことになつてゐるが」

「え、そんなにいらないよ」

わたしに三人も付くとかそんな大げさな。

一人でも大抵のことはできるのに。

「そつはいかない。王妃となればそれなりに体裁を整えなければな  
らない」

「そうなの？」

王妃の体裁とか、なんか面倒だなあ。

侍女も交代要員を含めて一名もいれば充分だと思つただけど。

「侍女長と相談して、若くともしつかりした者を選ぶよつじょう。そうすればハルカのいい相談相手になるだろつ」

「う、ん。ありがとづ」

ちょっと重いけど、カレヴィイはわたしのためを思つてやつてくれてるんだから、そこは感謝しなきゃいけないよね。

カレヴィイが侍女長のゼシリアを呼ぶと、彼女は既にわたし付きの侍女を決めてあつたらしく、すぐに紹介されることになつた。新しくわたしに付く侍女は、赤毛で水色の瞳、褐色の肌のイヴェンヌ、日本人のそれよりもずっと濃い黒髪黒目、象牙の肌のモニー、白っぽい金髪、緑青色の瞳、白い肌のソフィアと見た目も様々だつた。

この国は他の国よりもいろいろな見た目の人が多いらしいから侍女もそんな感じな人達になつたらしいけれど、これだつたら名前も間違うこともなさうなのでよかつたのかもしない。

それに、この国の人は陽気な人が多いから三人とのおしゃべりが楽しそうだ。

侍女達を紹介された後、わたしは自分の居室に戻つて、下描きまでしていた漫画のペン入れでもしようかと思つていたけれど、なぜかそれをゼシリヤ達に止められて、湯殿まで連れていかれた。

まだ寝るまでに時間はあるし、今はいいよと断つたんだけど、「だからこそです」という謎の言葉を受けて、わたしは首を捻る。

そんなこんなでわたしはゼシリヤ達に気持ちいつもよりも丁寧に洗い上げられ、香油を使ったマッサージも丹念にされて綿の寝間着を着せられた。

「それではおやすみなさいませ」

「ハルカ様、頑張つてくださいませ」

……頑張るつてなにを？

年若い侍女達から赤い顔で言われた言葉に対し、わたしは天蓋付きのベッドに腰掛けながら首を傾げる。

そうしているうちに、侍女達は明朝伺いますと言つて寝室を出ていつてしまつた。

なんだかよく分からぬながらも、寝るにはまだ早いし、家から持つてきた漫画でも寝ころんで読むかと、居室に置いてあるそれを取りに行こうとして立ち上がつた。

その時、いきなり寝室のドアを開けてカレヴィイが現れたのでわたしはびっくりしてしまつた。

「ハルカ」

いるはずのないカレヴィイの出現に、わたしあはすっかりうろたえてしまつた。

「カ、カレヴィイ？ ビうしてここに？」

まさかとは思うけど、アレをしにきたんじゃないよね？

カレヴィイとはまだ結婚している訳ではないし、ただ婚約中というだけなんだから、ぜひそうであつてほしい。

「おまえを抱きにきた」

「はい、つ！？」

嫌な予感が的中してしまつたわたしは思わず飛び上がつてしまつた。

「な、なに言つて……、だつてまだカレヴィイとは婚約期間中でしょ！？」

カレヴィイからなるたけ離れようと後ずさつたわたしは、自分からベッドにダイブしてしまつた。

思わず悲鳴を上げたわたしをカレヴィイは呆気にとられたように見ていたけれど、わたしが体を起こす前に手首を押さえつけられてそれを阻まれた。

「だ、駄目だつて！ だつて、花嫁は清らかじやないといけないって言つてたじやない！」

必死に足をじたばたさせながら訴えたが、カレヴィイはまったく気がしたふうでもなかつた。

「夫になる俺なら別だ。……それにこれは夜の習いといふ花嫁修業の一環である」

そんなの、聞いてないよー！

そう叫ぼうとした途端、カレヴィイの唇に口を塞がれた。

「ちょ……、カレ、……ヴィ……ッ」

文句の一つも言つてやろうと口を開くも、その度にカレヴィイの深い口づけを受けてわたしは息も絶え絶えになる。

こんなことがあるんだつたら、なぜ事前に言つてくれなかつたの？

それだつたら、心の準備もできたのに。

「こんな、急に……、酷いよ……っ」

なんとかそれだけ言つたけど、彼から返つてきたのは容赦のない言葉だつた。

「おまえは俺の妃になると決めたのだろう。だつたら我慢しり」

……そう言われると、わたしはなにも言えなくなつてしまつ。最終的にザクトアリア王妃になることを決めたのは他でもないわたし自身なんだし。

「……分かつたよ」

わたしが諦めて体の力を抜くと、カレヴィイは無駄に色氣を振りまいてふつと笑つた。

けれど、その笑みは経験ゼロのわたしには恐怖でさえあつた。思わず息を飲んでしまつたわたしをカレヴィイは見下すと、いらん宣言をしてくれた。

「いろいろと仕込んでやるから覚悟しておけ、ハルカ」

お願いだから、程々にお願いします。

なんと言つてもわたしは初めてだし、その点はさすがにカレヴィイも考慮はしてくれるだろう。

……などと思ったのは実はどんでもなかつたと、後にわたしは身を持つて知ることになつてしまつた。

「……そう怒るな、ハルカ」  
少しばかり遅い朝食の席で、カレヴィイはわたしにちょっと後ろめたそうに言つてきた。

昨夜は結局合意の上でそういう行為に至つたわけだけど、なぜ起き抜けにまでアレを無理矢理されて、わたしは機嫌が悪かつた。……まあ、それ以外にも理由はあるけど。

「おまえが思いの外よかつたので、つい我を忘れた。すまない」  
「うるさい、このHロ王。……いや、野獸。

わたしを結婚相手に選ぶくらいだから、アレの方も淡泊なのかと思つたら、実はとんでもなかつた。

カレヴィイは、恥ずかしがるわたしにさんざんHロイことや言葉責めをし、そしてあらうことか、わたしにまでそのHロイことをするようには強要してきたのだ。

「……言つておくけど、わたしは初めてだつたんだからね？」

初めてでさすがにあれはないだろう。

恥ずかしいから詳細は言わないけど、そういうのを商売にしているような人がするようなことをわたしはカレヴィイにされたのだ。カレヴィイはさすがに最初はなるべく痛くしないように配慮してくれてたみたいだけど、でもやっぱり初めてだから痛かつたし。……まあ、でもそれは仕方ない。けど問題はそれからだ。

カレヴィイは途中でたがを外してしまつたようで、わたしは何回もやられてしまつた。そしてわたしは、今腰が痛くてたまらない。

今朝も侍女一人に両脇を抱えられてやつとこの席に着いたぐらいだ。

……これが初めての人間にやることか？ やりすぎにも程がある。「それは悪かつたと思っている。しばらくはあの手の無理強いはし

ない」

わたしの怒りの言葉に、カレヴィイはぱつが悪そうな顔で謝つてきた。

「……なら、いいけど。それにしてもいやに手慣れてたけど、過去にそういう人でもいたの？」

わたしがそう聞くと、カレヴィイはちょっとうろたえてた。

……カレヴィイは美形だし、王様だし、そういう人がいてもわたしは一向に気にしないけどね。むしろいなの方が不自然だろう。

「いや、王宮付きの高級娼館からの娼婦としかそういうことはしていない」

「……へー……」

意外と言えば意外。

まあ、その方があとくそれもないのかかもしれないけど。

そうか、だからわたしに対しても高級娼婦相手にするような行動に走つたんだ。

「あれ、普通の姫だつたら、びっくりしそぎて泣いてたんじゃない？ いくらなんでも初めてであんなこと強要するとかないでしょ？」

わたしの代わりに別の姫がカレヴィイの結婚相手となつた場合を想定して言ってみる。

うん、結婚に夢を持つてる姫ならあまりの扱いにショックを受けれるかもね。

わたしは、夢も希望も持つてない歳いつた女だからまだましだけど、それでも初めてであれば酷いと思う。

「……だから、すまないと……、そうだ、ハルカなにか欲しいものはないか」

それまで居心地悪そうな顔をしていたカレヴィイが突然思いついたように言つてきた。

どうやら物で釣る作戦らしい。

ふーん、カレヴィイがせつかくならねだつてみようか。ちようど、欲しかったものがあるんだ。

「それじゃ、腕カバーが欲しい」

わたしがそう言つと、なぜかカレヴィの目が点になつた。

「……腕、カバー……？」

「漫画描くのに衣装の袖が汚れそんなんだよね。腕まくりしてもいいけど、腕が汚れるのは変わりないし」

わたしの描いている漫画はカレヴィには既に見せてある。最初カレヴィは漫画特有のデフォルメした描き方に戸惑っていたけれど、すぐにそれに慣れて漫画の読み方について聞いてきた。基本的には一頁の右から左に読んでいくんだよと言つたらすぐ理解したらしくて、わたしの描きかけの原稿にすいすい目を通していた。

……こんなことなら今まで描いた原稿も持つてくるんだつたな。今度向こうに行つたときは全原稿を持ってこよう。

そういう訳でわたしの描いた漫画を読んだカレヴィだつたけれど、女らしくないわたしにしては、中身がかなり少女趣味だつたので結構驚いていたみたいだ。

人は見かけによらないものだな、とわたしの顔を見て彼はしみじみ呟いてた。……失礼な。

ちなみにわたしの描く漫画は、千花に魔法をかけてもらつてあるから、こちらの世界の人にも理解できるようになつてゐる。

……本当に千花の魔法は便利だなあ。

わたしがつくづく感心していると、カレヴィがちょっと困った顔をして聞いてきた。

「……そんなものでいいのか？ 首飾りとか腕輪が欲しいとかないのか？」

「ううん、腕カバーがいい。それも木綿で黒くて汚れが目立たないやつ

わたしがきつぱりはつきりそつと、カレヴィイはビリとなく不満そうな顔で大きく溜息をついていた。

「なんだ、腕力バーじやいけなかつたのかな？ でも当面欲しいものもないし、もしあつても千花が持つてくれるし。わたしが首を傾げながらそう思つていて、カレヴィイがちょっと呆れたような顔で言つてきた。

「本当に、おまえの考えることは俺には分からん」  
うーん、庶民と王様の考え方の違いは結構大きい、のかな……？  
なんだか、それだけじやないような気もするけど。  
それからカレヴィイは、イヴェンヌ達に腕力バーをすぐ持つてくる  
ように言いつけると、ソフィアが代表してそれを持つてくれた。  
これだよ、これ。

構造は簡単だから、たぶんあるんじやないかとは思つてたけど、  
やつぱり異世界にもあつたよ、黒い腕力バー。  
ちょっと感動しながら装着したら、カレヴィイに今着けるのはやめ  
ろと言われてしまつた。  
これくらいいいじゃん、けち。

仕方なく腕力バーを外してカレヴィイと食後のコーヒーを飲んでたら、千花が律儀にわたしの様子を見にやつてきた。

「千花、つ！」  
昨夜のことを報告しようと千花に駆け寄りついたら、途端に腰  
に痛みが走つてわたしはよろけた。

「危な……」

「ハルカツ」

バランスを崩したわたしに、千花とカレヴィイが声を上げる。

その途端、見えないなにかがわたしの体を支えて、どうにかわたしは転ばずに済んだ。……もしかして、千花が魔法で受け止めてくれたのかな。

「はるか、どうしたの？」

瞬間に千花がよろよろしてわたしの傍に移動して尋ねた。

カレヴィも椅子から立ち上がり、わたしの傍に寄つてくる。

「あ……、うん。ちょっと、腰が痛くて」

「……腰？」

千花が首を傾げながらもわたしの肩に触ると、さつきまでわたしを苦しめていた腰の痛みが急になくなつた。

「あ、あれ……？」

「治癒魔法を使ったの。それにしてもはるか、腰が痛いってもしかして……」

千花が眉を寄せて言いづらそうにした。

「うん、まあこういうことは本人を前にして言いにくいよね。

「あ、うん。昨夜カレヴィとそういう事になつたんだ」

わたしがそう言った途端、千花がきっとカレヴィを睨んだ。

「……どういうことです？ まだはるかとは婚約期間中でしょう」

千花のその厳しい視線にも特に堪えた様子もなく、カレヴィはこともなげに言った。

「我が国では、王及び王太子に輿入れする花嫁は、婚礼一ヶ月前の婚約期間中に伽の習いをするしきたりがある。俺はそれに従つたままでだ」「え……」

千花はザクトアリアのその風習を初めて知つたらしくて、愕然とした顔になつた。

「は、はるか、ごめん。わたし、この国にそんな風習があるなんて知らなくて。……大変だったでしょ？ 「ごめんね」

千花がうろたえながらわたしに縋りついて謝ってきたけれど、これは彼女が悪い訳じやない。まあ、あえて言つとしたら悪いのは。

「ううん、千花が謝る事じやないよ。結局王妃になるつて決めたのはわたし自身だし。だから気にしないで」

「でも……」

わたしは笑つて言つてみたけど、千花はまだ申し訳なさそうだ。

……仕方ない。千花は最強の魔術師で忙しいのは分かつてること、その時間を少しもらつてしまおつ。

「じゃあ、午前中までわたしに付き合つてよ。久しぶりに千花に漫画のアシしてもらつから。それで今回の件は帳消し。ね？」

わたしがひとつ笑つて千花の肩を叩きながらそう言ひと、彼女はちょっとだけ泣きそうになりながら、「うん」と頷いた。

「……まあ、俺も事前に言つておかなくて悪かったが」

それまでわたし達の会話に入りづらそうにしていたカレヴィイがわたくしに謝つてきた。

そんなこと今更言われても遅いんだよー！

だからわたしは、ここぞとばかりに言つてやつた。

「本当だよねー！」

「……おまえ、ティ力殿と夫になる俺との扱いが違いますわー」

「そりや、千花は幼なじみの友達だもん。昨日今日会つたばかりのカレヴィイとは歴史が違うよ。……それよか、カレヴィイ執務に取りかからなくていいの？ わたしもいい加減漫画描きたいし、女同士の話もしたいから、もう自分の部屋に戻るね」

わたしはカレヴィイの抗議を軽くあしらつと、千花を促して、共同の間から自分の居室へとさつと移動する。

「おい、ハルカ」

カレヴィイがなにか言いたそうにしたけど、無視。

腕力バーはもらつたけど、やつぱりまだカレヴィイにはアレのこといろいろと怒つてるんだよね。

「……ねえ、はるか。カレヴィイ王が呼んでるけど」

千花が気遣わしげに言つてくるけれど、いいのいいの、気にしないで。

「それよか、聞いてよ千花。カレヴィイつたら酷いんだよー！」  
わたしは完全にカレヴィイをしかとして千花に話しかける。  
わたしのあからさまな無視にちょっと呆然としているカレヴィイを  
氣の毒そうに見ながらも、モニー力達三人もわたし達の後について  
きた。

それから。

カレヴィイはすごすこと自分の執務室に戻つていって、ちょっと拗  
ねていたとか。

まあ、これはゼシリアから聞いた情報なんだけどね。  
でも彼がわたしにしたことを思えばそれでも生ぬるいと思つ。  
どっちにしろ拗ねたいのはこっちの方だよ！ とカレヴィイに声を  
大にして言いたいわたしだつた。

わたしは昨夜のカレヴィイの所業を千花と侍女達三人に話した。とは言つても、侍女三人は未婚者だし、さすがにありのままのことは話せなかつた。

ただ、カレヴィイのしたことが初めての夜にしてはやりすぎたことと、そんなわたしの体のことを労つてくれなかつたことだけ話した。だけどそれでも、わたしが朝まともに起きあがれなくて、モニー・カとソフィアの介助を受けて朝食の席に着いたこともあり、本当の事情を知らない彼女達の同情を誘つたようだつた。

「陛下、あんまりですわ」

「ハルカ様は初めてだといつのに、酷すぎますわ」

「陛下は自分本位で物事を進めすぎですわ。こういうことは殿方の思いやりがあつて初めてうまくいくものだと思いますのに」「ふふふ、そうでしょ、そうでしょ。

カレヴィイつたら酷いよね。

でも、本當はもつと酷かつたんだよ。

あんなことやこんなことされたなんて言つたら、免疫のない彼女達のことだからきっと卒倒しちゃうかもね。

まあ、千花には後でこつそり本当のことを伝えるつもりだけど。

そして、昨夜のことを「まかしながらもカレヴィイの文句を言いつつ、わたしは居室のテーブルに漫画の原稿を広げていた。

ちなみにわたしは腕カバー装備、アシスタントの千花は魔法で防御するから腕カバーはいらないと言つて綺麗なドレスの格好のままでいた。

まあ、千花の美貌に腕カバーはちょっとというか、かなり台無しだからそれは正解だつたと思う。

「それにも……、さつきのはるかのカレヴィイ王への態度はまず

かつたんじやないかなあ」

千花がペンで枠線引きをしつつそつと書ひてきたので、ちょっと納得できなかつたわたしは反論する。

「だつて、あれくらいしなこときつと反省しないよ。カレヴィイは王だからあまり強く言う人間もいないだろつ」

カレヴィイが昨夜わたしにやつたことを正直に言つたら、みんなドン引きすると思う。

それを怒つてちょっととしかとするくらいうるいもんじやない。

「まあ、そうかもしれないけれど……。でも、あまりやりすぎると一人の仲に関わるかなつて思つて。できればはるかとカレヴィイ王は仲良くやつて欲しいし」

……うーん、そう言わるとなにも言えなくなつちゃうなあ。

千花はわたしの幸せのためにカレヴィイとくつつけようとしているんだし。

……仕方ない、ここは譲歩するか。

「分かつた。わたし後でカレヴィイに謝るよ」

確かに、結婚生活が始まる前から問題起つてしまつるものね。カレヴィイのしたことには、今回だけは皿を回りつ。

「うん、そうした方がいいよ」

わたしの言葉にほつとしたように千花が頷く。

……それにしても、千花つていろいろ気遣いの出来るいい友達だなあ。わたしにはもつたいないくらいい。

「……ハル力様は見事な技術をお持ちですね。素晴らしいですわ。わたくしもなにかお手伝いすることができればよろしいのですけれど」

イヴェンヌがわたしの作業を見ながら溜息をついて言つてきたので、わたしはペン入れをする手を止めてうーん、と考えた。

まったくの初心者でも枠線引きとか消しゴムかけならできるかも。

「……もしよかつたら、やつてみる？ それじゃ千花、ベタ塗りに

変わってくれるかな?」「

「うん、分かつた」

千花は頷くと、すでにペン入れし終わった原稿を魔法で乾かし、  
×印の付いたところを筆で塗りつぶし始めた。

「え……、でもわたくしに出来るのでしょうか。足手まといにならなければよいのですが」

わたしの提案が彼女にとつては思いもかけないことだつたりして、イヴェンヌがうるたえる。

彼女はちょっと自信がなさそうだけど、枠線引き 자체はそう難しい作業じゃない。

そこでわたしは、紙にシャーペンで線を何本か引き、その上をペンでなぞらせて練習をすることにした。

「……出来ましたわ!」

千花の隣に座つて、じばりへ定規とペンで紙相手に格闘していたイヴェンヌは充実感で瞳をきらきらさせて言った。……「お、ちょっと眩しい。若いつていいね。

肝心の枠線の出来は……どれどれ。うん、きちんとシャーペンで描いた線の上を一発でなぞてるし、これなら合格かな。

それでわたしは原稿を一枚イヴェンヌに渡し、枠線引きを開始してもらつた。

それに時折、彼女の隣に座つている千花の的確なフォローが入り、イヴェンヌは少し緊張しながらも、綺麗に枠線を引いていた。

……ありがと、千花。さすが千花は気が利くなあ。

わたしは千花の存在をありがたく思いながらも、ペンを走らせる。千花は仕事が速いから、おちおちしてられないのだ。

「イヴェンヌばかりずるいですわ。わたくしもお手伝いしたいです」

ソフィアがそう言つと、モニークも負けじと言つ。

「わたくしもハルカ様のお役に立ちたいですわ

うーん、彼女達の気持ちは嬉しいけど、道具もそんなにないから枠線引きの練習してもらつわけにもいかないし。後は消しゴムかけぐらいしか残つてないな。

……今度元の世界に帰つたときは、もう少し、ペンとか定規とかも補充しておこう。

「……じゃあ、ソフィアは消しゴムかけして。モニーカは悪いけどイヴェンヌとソフィアの分の腕力バー持つててくれるかな。あとみんなのお茶淹れて。あ、モニーカの分もね」

わたしがそう言うと、ソフィアはぱつと顔を輝かせ、モニーカはがっかりしたような表情になつた。

う、あちらを立てればこちらが立たず。

でもモニーカには悪いけど、本当にやつてもらひつことがないんだよ。ごめんね。

「ごめんね。モニーカにも明日手伝つてもらつから。ソフィアは、わたしの隣に座つて。今から消しゴムかけしてもらつけど、紙を破らないように、文字の書いてあるところだけは残して綺麗に消して。……こんなふうに」

わたしは千花がベタ塗りして乾かしてくれた原稿に慎重に消しゴムをかけて手本を示した。

「分からなかつたら、声かけてね」

「はい、かしこまりました」

ソフィアは使命感に燃えた瞳で頷くと、教えた通り綺麗に消しゴムをかけてくれている。さすがに王宮付きの侍女だけあって、仕事が丁寧だ。

「腕力バー、頂いてまいりましたわ！」

そこで、一時わたしの居室から出ていたモニーカが戻つてきて、侍女二人に腕力バーを渡した。

すると、二人はわたしが指示するまでもなく、腕力バーを装着し

た。

見ると、モニー カも自分の分を確保しているようだ。腕力バーを大事に居室の隅っこに置いていた。

それで、モニー カにお茶を淹れてもらってみんなでほつこつと休み。

そこで、今描いている話の前の話の原稿はないのかと侍女達に聞かれた。

「うん。あるけど、向こうの世界に置いたままなんだ。できるだけ早く持つてくるね」

三人がわたしの漫画を読みたいって言ってくれるのはすぐ嬉しいけど、次はいつ向こうに帰れるかな。

「それなら、今日はるかの礼儀作法が終わった後に向こうに行こう。いろいろ入り用のものもあるだろうし」

千花がわたしの意向をくみ取つて、そつと書ってくれたからすくへ助かつた。

「あ、うん。ありがと、千花」

「お礼なんていいって。わたしも向こうに用があるしね」

それでわたしは千花のありがたい言葉に乗ることにして、向こうに一時的に帰ることにした。

ああ、ほんとに助かつた。嬉しい。千花がいてくれて本当に良かつた。

「じゃあ、家から原稿持つてくるからね」

わたしが侍女達にそう伝えると、「まあ、嬉しいですわ」「楽しみですわー」「ええ、本当に」とうきつきしながらまた作業に入つていつた。

それを眺めていて、わたしはあることに気が付いた。

……そうすると、カレヴィにも向こうに一度帰るつて書いておかないといけないんだよね。

んー、お昼の時に彼に断つておけばいいかな。……わたしが無視したことでカレヴィの機嫌が悪くなればいいけど

わたしが手を止めてちょっとと考え込んでいると、消しゴムかけまで終わつた原稿眺めていたモニー・カが聞いてきた。

「ハルカ様、これで完成なのですか？」

「ああ、まだ。トーン貼りとか写植とかが残つてるよ  
わたしが簡単にトーン貼りと写植の説明をすると、侍女三人が感嘆したように溜息をついた。

「ハルカ様は随分と細かい作業が得意ですね」

「絵もお上手ですし」

「お話も素敵ですわ」

「……ありがとう」

侍女三人が口々に褒めてくれるので、わたしはちょっと照れながらも礼を言つた。

いやー、恥ずかしいけど、やっぱり褒められるのは素直に嬉しいね。

それに、三人の新たなアシスタント候補が増えたことも嬉しいし。  
わたしがそう言つたら、千花にすかさず突っ込まれた。

「……はるか、王の婚約者付きの侍女だよ。そこは間違えちゃ駄目だよ」

う、そうだった。彼女たちは王宮付きの侍女だった。だとしたら、  
そうそう荒使いはできないよなあ。

わたしがそう思つていたら、ソフィアが言つた。

「まあ、ティカ様、わたくしは侍女兼アシスタントがよいですわ  
そうするとイヴェンヌも言つ。

「わたくしもそれがよいです。なんだかおもしろそうでわくわくしますわ」

「わたくし、ゼシリ亞様に正式に許可をいただきますわ。そうすれば、なにも問題ないでしょ」

モニー・カもわたくしや千花につっこり笑いかけながら言つ。

……この三人、マジだよ。

マジでわたしのアシやる気だ。

わたしは感動しながら、千花はちょっと呆れながら三人を見ていた。

でもまあ、これで効率が上がつて趣味のサイトの更新頻度も上がりでたし、なのかなあ？

けど、その前にカレヴィの花嫁修業という難関が立ちふさがってるけどね。

千花や侍女達と和氣あいあいとしていた時は過ぎて、今はお昼。千花をお昼に誘つたけど、ちょっと用があるからとこいつ理由で断られちゃつた。……しょほん。

「それより、はるかはカレヴィ王に早く謝つたほうがいいよ」という千花の言葉を受け、わたしは侍女経由でカレヴィに昼食の誘いをしてみた。

それに対して、カレヴィはすぐにお昼の用意してある共同の間までやつてきた。

「先程は俺を無視していたのに、どうこうつゝ見だ」  
わたしと向かい合つて座つたカレヴィは幾分機嫌悪そうにしていた。

「ありや～……。やっぱりわたし、彼の機嫌損ねちゃつたんだ。カレヴィは王様だし、他人に無視されるとこうことに慣れてないんだろうな。

そう考えれば、彼の機嫌が悪いのも分かる気がした。

「いや、それはやりすぎたよ。」めんね

慌ててわたしがカレヴィに頭を下げるが、彼は不機嫌そうに言つてきつた。

「おまえがそんなに簡単に自分の考えを翻すと言つことは、おおかたティ力殿に諫められでもしたのだろう」

うつ、カレヴィ鋭い。

思わずわたしが絶句してると、彼はふん、と皮肉げに笑つた。

思わずむつとしかけたけど、これじゃいけないと思い直して言つた。

「……千花にカレヴィと仲良くなつてほしいと言われたのは本当だ

よ

「おまえはティカ殿の言ひことなら聞くのか」

なんだ、やけにつつかつてくるなあ。

婚約者の自分が大事にされてないとでも思つてゐるのかな?

「だつて、千花の言ひことはいちいちもつともだし。これから嫌でもずつと顔を合わせることになるんだから、少しさわたしも讓歩しなきやと思つたんだ」

「……讓歩か。まあ、いい。食事が冷める。早く食べろ」

わたしはカレヴィに大皿の料理を取り分けてもらつたので、慌ててありがとうとお礼を言つた。

「……ああ。そういうえば、おまえは昨夜のことを見つたらしいじやないか。なんでもおれは優しくなかつたとな」

わたしはそれで、フォークにくつっていたポテトグラタンを皿にぽとつと落としてしまつた。

これじゃ動搖しているのがバレバレだ。

ふと周りを見ると、わたし付きの侍女達は少々心配そうに、カレヴィ付きの侍女達は興味津々にわたし達の様子を窺つている。

「…………」「めん。そんなに気に障つた?」

つい、興奮してその場にいたみんなにそれっぽいことを言つちやつたけど、カレヴィの耳に入つたのはやっぱりまずかつたよね。

「当たり前だろう。そんなことくらい少しほは我慢しろ。……おかげで俺は女心の分からない王というそしりを受ける羽田になつたぞ」

そんなことくら」と言つられて、わたしはかなりむつとしてしまつた。

カレヴィのしたことは初夜じや考へられないし、わたしに無理させたことは本当のことじやない。

それに、事實をみんなにぶちまけなかつただけでも自分を褒めてやりたいくらいだ。

「……事実じやない」

わたしが小声で言つと、カレヴィにじるつと睨まれた。

「なにか言つたか」

「……カレヴィは酷いよ。そんな言いぐさないじゃない。カレヴィはわたしがそれで体を壊しても構わないって言つんだね」

言いながら、思わずわたしはぽろぽろと涙をこぼしてしまった。慌ててわたしはハンカチでそれを拭い、ごまかすようにポテトグラタンを口にする。……熱い。

わたしはそれでまた涙目になる。

「そんなことは言つてないだろう。ハルカ、泣くな。……分かつた。俺が全面的に悪かった、許せ！ これでいいか！？」

最後の方はちょっとやけくそみたいに聞こえたけど、一応は謝つてるんだよね。……少しば反省しているならいいか。

「うん」

それでわたしはちょっとカレヴィに笑つた。

すると、カレヴィはちょっと田元を赤くして、料理が冷めるから早く食べると再度口にした。

それでわたしは、酸味の効いたソースがかかつた鳥の唐揚げをナイフとフォークで切り分けて口にする。

「……恐れながら陛下、ハルカ様は慣れない環境におられるのですから、あまり不安を煽られないようにお願ひいたします。護衛の者に伝え聞きましたが、ハルカ様はよく我慢なさったと思われますわ。陛下は詳細を侍女達に知らされなかつただけでも良しとされなければ、ぱちが当たります。陛下、どうかハルカ様を大切にされてくださいませ」

侍女長のゼシリアがそう言つたので、わたしは思わずぎょっとしてしまつた。見ると、カレヴィも心なしげざめている。

ひょつとして、ゼシリアには全部バレバレってこと？ 彼女の情報網はいつたいどうなつてるんだ。

「……まいつたな。ハルカはこの短期間のうちに侍女達を掌握したのか。やりにくくてかなわん」

そういうながら、カレヴィはソースのかかつた茹で野菜をフォー

クに刺して溜息をつく。

う、うーん。掌握とかは違うと思うなあ。

こうなれば、女心の分からぬいカレヴィの相手のわたしに対する同情心からだと思ひたがい。

でもわたしは、あえてそれをカレヴィには伝えなかつた。  
それにしても、おまえに泣かれると調子が狂う、と言つて田元を染めて不機嫌そうに食事を進める彼がちょっとおもしろかつたからだ。

……うーん、こうしてみるとわたしつて結構いい性格してるかも  
しない。

「あ、そういうえば。今日の礼儀作法の授業が終わったら、千花と向こうに行つてくるね。晚餐の時には帰つてくるから」  
カレヴィに買い物やら、家に取りに行くものがあるからと言つたら、結構簡単に了承してくれた。

なにか言われるかなあとthoughtしていたので、ちょっと一安心。

「だが、なるべく早く帰つてこいよ」

うん、まあこれくらいは言われるよね。

それにきっと心配してくれてるんだろうし、そう考えたらカレヴィって優しいな。

さつきの暴言はこれで帳消しにしておいた。

「うん、分かつた。ありがと、カレヴィ」

わたしはにつこり笑つて彼にお礼を言つた。

でも、千花がいるからなにも心配することはないんだけどね。

そして、カレヴィとの昼食を終えて迎えた、礼儀作法の初授業。  
ああ、一番恐れていた時間が来ちゃつたよ。  
千花からも、礼儀作法の先生は厳しいものと覚悟しておいた方がいいよ、と言っていたので内心どきどきだ。  
でも実際に現れたのは上品で優しい感じの先生だった。名前はシレネだつて。

「それではハルカ様、立つたまましばらく静止してみてください」  
そうシレネ先生に言わされたので、わたしはその通りにしてみる。  
すると、シレネ先生の細かいチェックが入つた。

「ハルカ様、頭が揺れてます。もう少し我慢してください」

そう言われながら、肩の位置やら、立ち方やらの矯正が入る。

……あ、さつきよりは大丈夫な感じ。

立ち方を直しただけで、結構違うものなんだなあ。

「……はい、今の姿勢がすべての基本ですから忘れないでくださいね。……それでは略式の礼の仕方に入ります」

略式の礼と言われて、わたしはこっちの礼の仕方をぜんぜん知らないことに気がついた。

……本當なら一番最初に習つておくべきものだよね、これって。わたしは自分の悠長さに内心冷や汗が出る思いだった。シレネ先生に教えてもらつた略式の礼は、膝を軽く降り曲げつつスカートの両側を摘んで、小首を右に傾げるというもの。ちなみにこれは大陸共通のものだそうだ。

わたしはそれを何度も繰り返した後、ようやく合格点をもらえた。

「それでは少し休憩にいたしましょうか」

その言葉ですっかり安心してしまったわたしは、いつも通りテーブル席に腰掛けたら、シレネ先生から座り方のチェックを受けてしまった。

う、これも礼儀作法の一環なんだね。

その後も、カップの持ち方やらなんやら指摘されて、それも正すように言われた。

……うーん、シレネ先生は礼儀作法の教師にしては優しい方なのかも知れないけれど、やっぱりチェックは厳しいや。

そして休憩という名の礼儀作法の時間がすぎて、本田のシレネ先生の授業は終了となつた。

「今日習つたことの復習を忘れないでくださいね」

「はい、ありがとうございました」

シレネ先生の礼に、わたしは習つた略式の禮で返す。

先生に何も言わていないので、たぶんうまくできているはずだ。わたしはシレネ先生を笑顔で見送つた後、こつそりと溜息をついた。

一応、あつちでは事務職で接客する」ともあつたから、そういうセミナーを受けたことはあるんだけど、やっぱり一回一回の付け焼

き刃じや駄目か。

そこで、テーブルマナー や礼の復習はカレヴィに見てもらいながらやううとわたしは決意する。……王であるカレヴィなら作法に関しては完璧だらうじ。

そんなことを思いつつ、長椅子に座つてくつろいでいたら千花がやつてきた。

これからあつちの世界で足りない画材の買い物があるので。……千花、お世話になります。

ちなみに、千花に礼儀作法の先生は割と優しかったと言つたら、千花、お世話になります。

するーい、と返された。なんでだ。

……ひょっとしたら、千花の礼儀作法の先生は余程厳しかったのかもしれない。

それから千花にカレヴィとの例の夜の一件を話しておいた。

そしたら千花は「……ありえない」とショックを受けたようだった。

カレヴィとの仲を千花が取り持つたようなものだし、悪いこと言つちゃつたかなあ。

でもその他の条件はそこぶるいいんだから、それくらいはわたしがちょっと我慢すれば……、う、うーん、我慢できるかなあ……。今更ながら不安になつてきた。

わたしは百均と画材屋で画材をしこたま買い込んだ後、スーパーに寄つてスナック菓子やお煎餅を千花と二人でたくさん買つた。

「向こうはお菓子つて言つたら、甘いものだもんね。だから時々塩気の利いたものが無性に食べたくなるよ」

千花のその言葉に、確かにあつちでは甘いものしか出てこなかつたなと思い返す。

とりあえず、今日買つたお菓子は明日のお茶受けに出してもいいことにしよう。

カレヴィイやイヴェンヌ達も珍しがるだらうな。ふふ。

わたしは大量の買い物袋を下げ、ザクトアリア城に戻り、そこで千花と分かれた。千花、今日は（も？）ありがと。

わたしが城に着いたのは既に晚餐の時間に近かつたんだけど、カレヴィイは共同の間にも部屋にもいなかつた。

まだ執務なのかなと思つたけど、ゼシリアが言うには謁見の間で貴族達と会つてゐるそうだ。

「ハルカ、やつと帰られましたか。すぐに着替えられて謁見の間まで来てください」

荷物を置いてちょっと一休みしようとしていたら、なぜかシルヴィが現れた。

いや、彼と会えるのは嬉しいけどさ。わざわざ彼が来るつてよっぽどのことなんぢやないの？

わたしは不安になりつつも、急いで支度をしてシルヴィの後についていく。

わたし達が謁見の間の控えの間に入ると、シルヴィに片手を差し出された。

それをわたしはおずおずと取ると、シルヴィに先導されて謁見の間の王妃の席がある場所まで連れてこられた。

……これはここに座れってことなのかな？

ちらりとカレヴィイを窺うと、彼は肯定するように頷いた。

席に腰を掛けると、シルヴィが数歩退いて静止する。

落ち着いて周りを見てみると、貴族らしい人物が五名程怒りの表情でこちらを見ていた。

……え、え？　これはなに？

なんでわたしは見ず知らずの人達に敵意も露わに見られているの？

「これはこれは、こちらが陛下の婚約者殿ですか。これはまた……醜女をお選びとは陛下もお遊びが過ぎますぞ」

いきなり悪意を浴びせられて、わたしはびっくりしてしまった。

しかも、会つたばかりの人間のことを醜女つて酷すぎない？

「いきなりなんだ、バルア侯爵。それにハルカは醜女などではない」

隣のカレヴィイが不愉快そうに顔をしかめる。

「しかし、わたくしの家の姫はその者が足下にも及ばないほど美しいですよ」

「わたしの姫もです」

「もちろん、わたくしの姫も」

「我が姫も負けませんよ」

「なんの、わたしの姫は花のように美しい」

日々に貴族のおじさん達がわたしを汚らわしいものでも見るかのようにして、自分の娘を自慢する。

「無礼な。ハルカは兄王が選んだ女性だ」

シルヴィイが憤慨して、貴族のおじさん達を睨みつける。

ああ、わたしのために怒つてくれてるんだね。いい子だなあ。

「俺は花嫁に美しさなど求めてはいない。……それにハルカはあるの最強の女魔術師の親しい友人だ。これほどの良縁もあるまい」

ちょっと酷い言いようにも聞こえるけど、カレヴィイにしたらこれが事実なんだろうな。

まあ、わたしも趣味三昧のために彼の王妃になることを決めたんだから、おたがいさまだ。

「しかし……！」この者は異世界の卑しい出ですぞ！

「そうです！ 陛下がティアルスタンの王女と婚礼を挙げられると伺つていたからこそ、我々も堪え忍んできましたのに……っ」

確かにわたしはただの庶民だ。

それに隣国のリリーマリー王女の代役でカレヴィイの婚約者になつたから、王妃にふさわしい気品なんかも全然ない。

わたしが思わず下を向くと、カレヴィイがおとんとおかんに謁見した時みたいにわたしの手をそつと握ってきた。

それで、思わずわたしはカレヴィイの顔を見返してしまつ。

「　なにを言うか。」のハルカはそこいらの姫とは比べものにならないくらい良い女だぞ」

……はあ？

「」の事態にカレヴィイがどうにかしちゃったのかと思つて、わたしは思わず惚ける。

見ると、シルヴィもあつけに取られているじゃないか。

対する貴族のおじさん達も笑いを堪えるよつた表情をしてくる。

「陛下、『冗談を……』」

「冗談ではないぞ。昨夜のハルカとの習いは最高だったぞ。それも今まで抱いたどの高級娼婦よりもな。おまえ達の姫がハルカにかなうとはとても思えんがな」

ちよつ、カレヴィイきなりなにを言い出すかー！！

わたしあびつくりしすぎて思わず席を立つてしまつた。

シルヴィも真つ赤な顔で「」を見てるじ。うひ、『氣まずい』

「なつ、なつ、な……つ」

貴族のおじさん達もカレヴィイのあまりの発言に顔を真つ赤にしている。

あれは怒りのためだらうか、それとも羞恥かな？……たぶん、

両方だらう。

「分かつたら帰れ。いい加減日障りだ」

冷たくカレヴィイに告げられた貴族のおじさん達が、その身を屈辱に震わせながら声を張り上げる。

「わつ、わたくし達はまだ諦めませんぞ！」

「必ずや卑しい娘から陛下をお救い致します！」

……ちよつと、それじゃわたしがカレヴィイをどうにかしているみたいじゃない。

どつちかつていうと、わたしはカレヴィイの方をなんとかしたいと思つてゐるつて言うのに。

その他、叫びたいだけ叫んで、貴族のおじさん達は鼻息も荒く謁見の間から出ていった。

途端に静かになつた謁見の間で、わたしはカレヴィイの前に立つ。そして腰に手を当て顎を少し上げた。

「……ちょっと聞いていい？」

「……なんだ？」

ちょっと偉そうなわたしに、カレヴィイがちょっと引き気味になる。こんなことより、さつきのカレヴィイの発言の方がよっぽどドン引きでしようがあつ！

怒鳴りつけたいのを堪えつつ、わたしはなるべく静かに彼に尋ねる。

「花嫁候補の姫つて他にもいたんだ？」

「いや……、あれはやつらが勝手に言つていることで、俺にはその気はない」

でも、その気になれば妃はいくらでも娶れるんだよね。

わたしは昨夜の苦労を思い出して、思わず震え出す。

それをどう勘違いしたものか、カレヴィイが焦つたように言つた。「どうした、ハルカ。俺は、おまえ以外の妃は娶らないぞ。だから、おまえが王妃だ。安心しろ」

そう、なら安心……できるかーつ！

カレヴィイがあの調子で、わたしがずっとその相手をすることになるかと思うと、目の前が暗くなるような気がする。

カレヴィイもめんどくさがらずに寢妃を一、二人くらい娶つてくれれば、わたしは体力の限界に挑まなくすむんだよね。

そしたらあの貴族のおじさん達に変に敵視されずにするかもしないし。

……などと、わたしは千花が聞いたら「甘い、甘すぎるー」と突っ込みが入りそうなどをつらつらと考えていた。

「ほんとに信じられないっ！」

いろいろと考えている内にさつきの羞恥を再び思い出してしまつたわたしは、カレヴィイとシルヴィしかいなくなつた謁見の間で、年甲斐もなく真つ赤な顔で地団駄を踏んでいた。

「ハ、ハルカ落ち着け」

わたしの荒れようにはカレヴィイが慌てたように立ち上がる。シルヴィもわたしに近づいてきた。

「気持ちは分かりますが、ハルカ落ち着いてください。淑女らしくないですよ」

十歳以上年下なシルヴィに諫められて、わたしは自分が随分と大げなかつたことを恥じた。

……でも、やっぱりカレヴィイのことは許し難い。

「今日は夜の習いしない！」

わたしのその叫びにカレヴィイはかなり驚いたようだつた。

「なにを言つてゐる。そんな勝手が許せるか。それに、あれは褒めたんじゃない。なのに、なぜ怒る？」

……あれを褒めたつて言えるカレヴィイおかしそぎるよ。

「あの言い方じゃ、まるでわたしがカレヴィイを惑わしてゐみたいじゃない。カレヴィイ、酷すぎるよ」

そう言つてゐうちに、羞恥からじわりと涙が浮かんできた。

「ハルカ」

シルヴィが心配そうにわたしに腕を延ばしてきたけど、はつとじたようにその手を引っ込めた。

……なんだろう。ひょつとして慰めようとしてくれたのかな？

「兄王申し訳ありません。出過ぎたまねをしました」

「……まあ、いい。だが、ハルカは俺の婚約者だということを忘れるな」

「はい」

今度はカレヴィイがわたしに腕を延ばってきて涙を拭おうとした。

……あ、あれってこういうことだったのか。

だけどわたしは、カレヴィイの腕をはねのけ、彼から数歩下がつて自分で涙を拭つた。

「……ハルカ、その態度は可愛くないぞ」

カレヴィイがむつとして言つてくるけど、わたしはまだ彼に怒つていた。

「カレヴィイが悪いんじょ。あんな恥ずかしいこと言つから。あの  
人達、わたしのことまるで悪女かなにかみたいに言つてたじゃない  
あの人達が言つよう、わたしは確かに美しくない。でも、この  
体は信じられないことにカレヴィイにとつてはとても貴重なものらし  
いのだ。

でも、それを自分の姫を売り込みたい貴族の人達に誇示するよ  
うに言つなんて酷すぎるよ。

あれじゃ、無駄に敵を増やすだけじゃないか。

わたしはもつとひつそりと王妃業しながら趣味に浸りたいのに。  
わたしがまだ真っ赤な顔でカレヴィイを睨んでいると、彼は仕方な  
さそうに溜息をついた。

「……悪かった。俺の考えがなさすぎた。ハルカ、頼むから機嫌を  
直してくれ」

謝つてきて、そんなに簡単には許さないからね。

わたしの平穏な日常を壊すような真似をしたカレヴィイは、もつと  
根本的なところから考え方直したほうがいいと思う。

あれが、人前で言つてい言葉がどうかぐらい、普通分かるでし  
ょうが。……あ、王様だから分からないのか？ でも、王族のシル  
ヴィは普通にあれが非常識な会話だと理解しているみたいだし。  
うん、やっぱリカレヴィイがおかしいんだ。

結局そういう結論に落ち着いて、わたしはカレヴィイの懇願にも黙  
つっていた。

「ハルカ、俺からも頼みます。どうか機嫌を直してください」「う、シルヴィにそう言われちゃうと、決意が鈍るな。

あんまり意固地になつて、彼に悪印象持たれたら嫌だし。

……仕方ない。ここは彼に免じて、カレヴィを許しちゃうか。

「……分かったよ。でも、カレヴィはもう人前でんなこと言わないで。わたしはすぐ恥ずかしかったんだからね」

「ああ、すまない」

軽く返してくるカレヴィにちょっと、いやかなり不満を感じる。

本当に分かつてるのか、この男は。

わたしは頭が痛くなりながらも、シルヴィの再三のフォローを受けて、仕方なくカレヴィを許した。

心配してくるシルヴィの顔を立てるために、今回は許したんだからね！　そのところは勘違いしないでよね。

それでとりあえず、時間も遅くなつたことだし、晚餐ということになつた。

わたしがシルヴィも一緒にと言つたので彼も同席している。義弟として仲良くなる機会をどんどん作つて行かなくちゃね。ふふ。

その席で、カレヴィに礼儀作法の授業のことについて聞かれたので、わたしはその内容をざつと説明した。

「千花に礼儀作法の先生は厳しいから覚悟しておいた方がいいって聞かされてたからどうなるかと思ってたけど、実際は優しい先生でよかつたよ」

ステーキを切り分けながら笑顔で言つと、カレヴィがとんでもないことを言いだした。

「そうか。……おまえにはもっと厳しい教師を受けた方がよかつたか？」

「え、えつ？　いや、今まで結構です！」

「……冗談だ」

見ると、カレヴィイはおかしそうに口元を押さえている。

「つ、おもしろがられてるよ、わたし。ひょっとして、これはさつきの仕返しか？」

「けれど、ハルカと教師の相性が良さそうによかつたですね。よい信頼関係を作つていいくのも作法を教わるには大事です」

「うん、そうだね」

それは本当にそう思う。  
チェックは厳しいけれど、優しくて信頼できる先生だし、わたしは本当に運がいい。

シルヴィにこにこしながら、わたしは頷く。

「なんだ、ハルカはシルヴィには随分と愛想がいいんだな」  
意外そうに眉を上げてカレヴィイが言つたので、わたしは素直に話した。

「わたし、弟が欲しかったから、シルヴィとは仲良くなりたいんだよね」

「そ、ですか……」

シルヴィがわたしの言葉を受けてちょっと困ったように頷く。

あれ、迷惑だったのかなあ……。

「まあ、程々にしておけよ。それこそ、先程のやつらに妙な噂立てられかねん」

ええ？ 弟として仲良くするだけなのに、そんな心配をしなきゃいけないなんてかなり残念すぎる。

「これだけ歳が離れていたらそんな気になるはずないのにねえ。わたしにはシルヴィは可愛い弟みたいに思えるけど」

まあ、公式には二十歳ということになつていてるから、あの貴族のおじさん達にそう言えないところは苦しいかな。

すると、シルヴィがいかにも気分を害したとでもいうように、むつとした顔をしてきた。

「あれ……？」

「失礼ですが、俺はもう成人しているんです。あなたの相手として

噂される可能性はいくらもあるんですよ。それなのに、そんなことを言わるのは心外です」

「あ、そうだった。ここでは十五で成人なんだつた。だから、その可能性は確かにあるんだよね。わたしからしたら、それが犯罪的行為だとしても。

「ご、ごめんね。シルヴィのプライドを傷つけるつもりはなかつたんだ。許してね」

わたしが頭を下げて謝つたら、シルヴィはちょっと息をついて、首を横に振つた。

「……俺も言い過ぎました。ただ、本当にやつらに妙な言いがかりをつけられるようなことには気をつけてください」

「う、うん、分かつた。気をつける」

なんだかわたしもカレヴィを怒るような感じじやなくなつてきたな。

シルヴィとは仲良くしたいけど、本当に氣をつけないと。……けどその程々具合が難しいんだよねえ。

わたしはちよつと息をついた後、氣を取り直すようにカレヴィに礼儀作法の復習のことについて言つてみた。

「ところで、礼儀作法の先生に今日習つたことの復習してくださいって言われたんだよね。だから、カレヴィ後でわたしがきちんと出来ているか見てほしいんだけど」

「ああ、いいぞ。しっかり見てやる」

それまでシルヴィとのやりとりを黙つて見ていたカレヴィが、わたしのそのお願いに笑顔で快諾してくれた。

「うーん、カレヴィ、いい人だ。……時々かなり非常識だけど。

「その代わり、おまえには夜の方も頑張つてもううだ」

……結局そのオチか！

恥ずかしげもなく言うカレヴィに、ウブなシルヴィが真つ赤にな

る。

カレヴィ、さつきのこと全然反省していないじゃない。

いい人と思ったのは撤回。カレヴィイは王様の皮を被つた野獸だ。

「……なら、侍女達に見てもらつからいいよ」

昨日みたいなこと、また繰り返すのは耐えられない。

わたしの体力だって限界つてものがあるんだぞ。

「礼儀作法なら俺が見た方が確実だぞ。遠慮するな」

そんなこんなでカレヴィイに押し切られたわたしは、礼儀作法の復習を彼に見てもらうことになった。

シルヴィイはある話題に引いたのか、食事もそこそこに、そそくさと帰ってしまった。

……彼には本当に悪いことしちゃつたなあ。これもあけすけすぎるカレヴィイが悪いんだ。

でも、カレヴィイの礼儀作法は完璧で、確かにその人選は間違つてなかつたんだけど。

「……約束は守つてもらつぞ」

とかなんとか言われて、寝室で彼にのしかかられてしまった。

……よくよく考えたら、復習を見てもらうのはシルヴィイでも良かつたんじゃない？ 彼も王族で礼儀作法は完璧なはずだし。

そうカレヴィイに言つたら、なぜか急に不機嫌になつてアレを何回も付き合わされることになつてしまつたのだった。

……本当に、なんでなんだ。

外が明るい。

「……ハルカ、朝だぞ」

耳元でゾクゾクするような美声が響く。  
こんないい声の知り合いなんかいたつて、とわたしは寝起きの働く  
かない頭で考える。

ふと、隣で人が起き出す気配がした。……ああそうだ、カレヴィ  
だ。

段々頭が冴えてきたけど、わたしはシーツにくるまつたまま彼を  
観察する。

初めて会った時も思つたけど、本当に美形だよねえ……。  
それに、浅黒い体は引き締まっていて、すこしく綺麗な筋肉の付き  
方をしている。

腹筋とか割れてるし、ああ、今すぐカレヴィを『テッサン』したい。  
ああ、なんでスケッチブック置いとかなかつたのかな、わたし。  
今夜からはちゃんと用意しておこう。  
それでいろいろポーズ取つてもいいんだ。

「……カレヴィ」

自分で思つていたよりもけだるい声が出て、それにカレヴィが反  
応する。

「なんだ」

「カレヴィって、いい体してるよね」

褒めたのにカレヴィは目をむいて絶句。

……あれ？ わたしはなにかいけないとでも言つただろうか。

「……おまえは俺を誘つているのか？」

「えつ、えつ？ 違つよ、綺麗な体だからトシサンをせてもいいね」  
と……んうつ」

皆まで言わないうちにカレヴィイが覆い被さって、わたしに口づけてきた。

彼の舌がわたしの唇の間から侵入してきて、逃げようとする舌を捉えられた。

「ん……つ、ちが……、『』かい……つだつて……ば」

口腔内を犯されて頭がぼうつとしてくるほど、それでもなんとかそう言った。

「」のままでは一日連續で朝からされてしまう。

「……そうだとしても、もう遅い。ハルカ、覚悟するんだな」  
カレヴィイはふつと笑うと、今度は唇に軽いキスをしてきた。  
ええー、嫌だよ朝つぱらから。

そして、カレヴィイはわたしにかかつっていたシーツをはぎ取ると、嫌がるわたしを無理矢理襲つた。

それからしばらくして、わたしはカレヴィイと一緒に共同の間で朝食を取つていた。

「……もう、信じられない。嫌だつて言つたのに」

一日連續で朝からやられてしまつたわたしは、またも不機嫌だつた。

「すまない。ハルカがそんなに嫌だとは思わなかつたんだ」  
実はカレヴィイは、わたしが誘つたものの、照れて嫌がつてている振りをしていると思いこんでいたらしい。

「それに、なんで朝つぱらからなの？ 夜さんざんしたじゃない」  
かつたるいし、また腰も痛い。

でも、礼儀作法の授業で動けないのはまずい。一応腰に湿布をしてあるけど、時間まで痛みが引けばいいんだけど。

まつたく、加減ということを知らないのが、この男は。

「……それは朝だからだ」

「……はあ?」

カレヴィの気まずそうな言葉に、わたしは一瞬目が点になる。

「朝……? ……ああ、分かった。そういうことね」

そこでようやく、カレヴィの言いたいことが分かつたわたしは納得して頷いた。

でもアレって放つておけば元に戻るんじゃないの? わざわざわ

たしとやることもないのに。

「……そんなに持て余してゐるなら、娼館の人を呼んで相手してもらつたら? いくら花嫁修業とはいえ、毎日こんな調子じゃわたしの体力が持たないよ」

カレヴィがわたし以外の妃を娶らないと宣言している以上、野獣をおとなしくさせる解決策はそれくらいしか思いつかない。

なにせわたしは、特に運動もしていないただのオタクな女なのだ。ただ、昔から体だけは丈夫で、滅多に風邪も引かないんだけどね。それに対しても、カレヴィはちょっとむつとしたように言い返してきた。

「おまえという婚約者がいるのに、そんな不実な真似が出来るか」「……これ、聞く人によつちや、感動ものの台詞なんだろうな。

現に部屋の隅に控えていた年若い侍女達がきやあつ、と嬉しそうな声を上げている。

だけどわたしはそれに動じることもなく、焼きたてのパンにバターを塗つていた。……「ごめんね、こんな枯れた女で。でもそうなると、こんな毎日がこれからも続くつてことだよね。本当に、頼むから程々にしてくれないかなあ。

「……そういえば、こうこうとしてて婚約期間中に子供が出来たりしないの? それって、あんまり外聞がよくないような気がするんだけど」

わたしは常々聞こうと思つていた質問をカレヴィイに投げかける。  
まあ、一ヶ月くらいなら誤差の範囲だつて言つて、こまかせるかもしれないけど。

「おまえは知らなかつたのか？」この期間中は俺が避妊の薬を飲んでいるから、子は出来ない」

……なんと。

初めて知らされる事実に私は目を見開いた。  
なんで、夜の習いとか、避妊薬のこととか、誰も教えてくれないかなあーっ。

もしかして、みんなはカレヴィイが既にわたしに伝えているものと思つてるかもしねりない。

カレヴィイが言つには、この期間は婚約中の一人のお楽しみ期間でもあるんだつて。……でも、主に楽しんでるのはカレヴィイのような気がしないでもないけど。

「ふーん、そうなんだ。まあ、朝からこんな話題もなんだし、もうやめるね」

わたしがそう言つたら、カレヴィイは明らかにほつとしたような顔になつた。

カレヴィイ、昨日の再現になるとでも思つていたのかな？ でもいくらわたしだつて、同じ過ちは繰り返さないよ。

わたしはふわふわのオムレツを味わいながら、そんなことを考える。

「ハルカ、この食事が終わつたら庭園に散策にでも行かないか？ 確か王宮の外を見たことはなかつただろ？」

……そう言つられてみれば、見たことない。

カレヴィイが急にこんなことを言い出したのは、朝のアレの罪滅ぼしのつもりなのかな。

ここに来て日も短いし、わたしはインドア派だから特に気にしたことなかつたけど、でも、せつかくカレヴィイがこう言つてくれてるんだし、断る理由もない。

それでわたしが頷くと、カレヴィは楽しみにしておけ、と爽やかに笑つた。

「の笑顔だけ見ていたら、実は夜は野獸だなんて誰も思わないだろ？」

「なにを隠そう、わたしもこの笑顔に騙された口だ。

千花あたりも、わたくしからカレヴィの生態を聞いて驚いていたから、普段は出来る王様なんだろう。

……それが、夜の時だけアレなのはなんでなんだ。

それに変に義理堅くて、妾妃や娼婦を相手にするのは嫌だと黙りてくる。

そして、どうやらそれを聞いたわたしが喜ぶと思っている節があるんだよね。……まあ、日本が一夫多妻制じゃないって聞いていることもあるんだろうけど。

おまけにカレヴィはなんだかわたしの体を氣に入っちゃってるみたいだし、本当に彼の趣味が分からぬ。

子供を作るのは契約だからまだいいとして、こんなハードなのは全然求めてない。はつきり言つて、王妃になる前からオーバーワークだ。

そうだ。今度、千花に精力減退の魔法薬でもないか聞いてみよう。うん、そうしよう。

わたしはそこまで考えて、カレヴィににっこり笑つた。

……傍目には婚約者同士仲良く話しているように見えるかもしれない。けれど、その一方が考えてこることは、ちょっと不穏なことだった。

カレヴィに庭園に誘われたのはいいんだけど、そういうえばわたし腰が痛いことをすっかり失念してたよ。

それで、そのことをカレヴィに言つたら、すぐに王宮付きの魔術師を呼ばれて治癒魔法をかけられた。

「ティカ様ほど完璧にはいきませんが、これでいくらかは痛みが引かれると思います」

「ありがとう」

その魔術師に言われた通り、少し痛みは残るけど、だいぶ楽になつた。これなら庭園に行けそうだ。

ちなみに治癒魔法って言うのは、完全に治癒させるものじゃなくて、正式には「治癒させる為の魔法」って言うんだって。

千花みたいに完璧に治癒させるのは、むしろ一般の魔術師的にはものすごく非常識な部類に入るらしい。

「……ですが陛下、ハルカ様にあまり『無理な』ことをなされないようにお願ひいたします。治癒魔法もあまり頻繁には使えません故、カレヴィに苦言を呈した魔術師曰く、痛いからってあまり治癒魔法に頼つていると、人体本来の治癒能力が鈍つてくるからなんだそうな。

……それなら、仕方ない。次からは湿布と痛み止めで我慢しよう。痛み止めっていうても、ここのは薬湯だから飲み続けても大丈夫らしいし。

本当はカレヴィが自重してくれるのが一番いいんだけどね。

千花に会つたら、例の精力減退の薬があるか確認しておかなきゃ。

「……ああ、分かった。一応頭に入れておく」

「一応じゃなくて、ちょっとは自重してよね」

本当に分かつてんだかどうか分からぬカレヴィにわたしは文句をつけたけど、ここまで言つても夜には忘れられてそうだよな

あ。……カレヴィイ、鳥頭か。

ああ、と言つたカレヴィイの田が泳いでるのも怪しい。

「……まあ、それはともかく庭園まで移動させてくれ。ハルカの体のこともあるしな」

む、ごまかしたな。

そもそも今、わたしの体を気遣えるんだつたら、夜にセーブして欲しい。

けど、なんでカレヴィイがわたしの体にそこまで執着するのか本当に分からぬ。

カレヴィイは貴族のおじさん達に、どの高級娼婦よりもわたしが最高だつたつて言つてたけど、ひょつとしてあれは真実だつたつてことなのかな。

貴族を追い払う名目で言つたのかと思つてたけど、わたしの体つて、カレヴィイの好みにかなり合つているのかもしれない。……一応、わたしは巨乳とは言われるし。

でも高級娼婦の人に、そういう人はいくらでもいそうなんだけどなあ……。

そのとこをカレヴィイにはつきり聞いてみたいけど、今朝みたいに誘われてると思われたらたまたもんじやないし。どうしたもんだろう。

……でもまあ、カレヴィイには折りを見て聞いてみよう。ちょっとと聞くのにも心構えがいるけど。

わたしがそんなことを思つてゐる内に、カレヴィイに命令された魔術師は頷いて、わたしとカレヴィイ、それにお付きの者達を庭園の入り口まで移動させた。

カレヴィイに案内されたのは、南国ムード溢れる庭園だった。

南国の植物が茂つているそばに人工の川やら噴水が絶妙に配置さ

れていて庭園 자체が涼しくなるように配慮されているみたいだ。

それでも、快適な温度だった王宮内と違つてここは少し暑い。

「ちょっと暑いね」

額に浮かんだ汗をハンカチで拭いながらさう言つと、カレヴィイはいつもと変わらない涼しい顔で肩を竦めた。

「この国の気温はこんなものだ。……城の中は魔術で快適な温度に保つてある」

ふーん、當時クーラーが作動しているようなものか。

こんな快適な環境で趣味に浸れて、最強の魔術師が友達で、王の婚約者としてみんなにかしづかれてる。……わたしつつくづく恵まれてるよなあ。

元はただの一般庶民のわたしは、ザクトアリアの国民に対してもっと罪悪感を感じてしまう。

そう考へると、貴族のおじさん達がわたしに反発していたのも分かる気がする。

それでわたしが少し溜息をついてると、カレヴィイが「どうした」と聞いてきた。

わたしがさつきの自分の考へをカレヴィイに話すと、彼はわたしの肩を抱き寄せて笑つた。

「おまえが気に病むことはない。おまえは王妃の務めを果たすことだけ考へていればいい」

「…………うん」

王妃の務めつていつたら、まず子作りだよね。

カレヴィイがあの調子だつたら、結婚してすぐできるかなあ。できるといいな。……体力的にちょっと大変そうだけど。

そんなことを思いつつ庭園を見回していたら、巨大な黄色い房が垂れ下がっているのが目に入った。

「……これつて、もしかしてバナナ？」

付いてきていた庭師の説明によるとやっぱりバナナで、鑑賞用に植えてあるそうだ。でも本来は食用の品種なので食べられるんだっ

て。

ネットでバナナの房が巨大とは知つてたけど、実際に田にするとなんか感動するなあ。

わたしの住んでる地域は、バナナ育てる人いないしね。  
「へえ……」

わたしは食べごろサインの黒い斑点、いわゆるスイートスポットの出ているバナナを房から一本もぐと、皮を剥いて食べてみた。

うん、濃厚な甘みがあつてとってもおいしい。

にこにこしながらバナナを食べるわたしをカレヴィは最初呆気に取られて見てたけど、なにか変だつたかなあ。

それに、次にはなぜか彼がにやけていたみたいなのも気になつた。

……なんか妖しいぞ、カレヴィ。

「おいしいよ」

でも、わたしはバナナをもう一本房からもいでカレヴィに渡すと、彼は仕方なさそうに苦笑した。

「……ああ、確かにうまいな」

わたしと同じようにバナナにかじりついたカレヴィもちょっと驚いたように瞳を見開いた。

彼も観賞用のものとは思えないおいしさにびっくりしたらしい。

「でしょ？ これ少し持つて帰つていいかなあ」

わたしがそう言つたら、庭師が氣を利かせて房の一部を切り落としてくれた。

「ハル力様、よろしかつたら他にも果物がありますよ」

庭師はわたしがバナナをおいしいと言つたことが余程嬉しかったらしく、パパイヤやアップルマンゴーなんかを山ほど取つてくれた。

ふふふ、庭師の人、気が利きすぎで嬉しいぞ。

他にもいろいろ種類はあるらしいけれど、それはまた、次の機会でいいかなと思って、今日はこの辺でやめておいた。

とりあえず、これは今日の食後のデザートにしよう。

でも、ちょっと量が多いかなあ。まあ、後でモニー力達や近衛兵

に分ければいいか。

にやにやしながら大量にゲットした南国フルーツを見ていたら、カレヴィがちょっと呆れたように言った。

「おまえは庭園に散策に来たのか？ それとも果実狩りに来たのか？」

「え？ もちろん散策に来たんだよ」

思わぬ副産物で、果実狩りもできたけどね。

でも、果実狩り出来る庭園なんて貴重だよねえ。わたしも漫画でそんなの描いたことないぞ。

それに、せっかく庭師が丹誠込めて作ってるんだから、これを食べずに捨ててしまうのはもつたといい。

これは、これからもっと庭園の有効な使い方をカレヴィとも相談しないとね。

とりあえずゲットした南国フルーツは厨房に届けて昼食に出してもらい、残った分は今いるみんなに分けることにした。

そして引き続きわたしはカレヴィと南国ムード溢れる庭園を巡った。

よく見ると庭園には色鮮やかな鳥達もいて、それに負けない色彩の花々と相まってとても素敵だった。

うーん、こういうのを見ると、本当にザクトアリアが熱帯性の気候の国なんだなあって実感が湧いてくる。

うん、かなり異国情緒満点だ。

こいつのを実際にすると、この世界の本で見た、ザクトアリアは他の国よりも気候及び文化が特殊っていうのもなんとなくだけ理解できた。

そして、次にカレヴィに案内されたのは、薔薇の花とかが咲き乱れる庭園だった。

「あ、涼しい」

ここはさつきと違つて魔法が効いているのかな？

そう思つてたら、カレヴィがそれを肯定してくれた。

「ああ、ここは城と同じような気温になつていて、花の管理にはもつと複雑な魔法を使つていいらしいが」

そう言つてみれば、この庭園には薔薇の花の他、いろいろな季節の花が咲き乱れていて、桜まで咲いている始末。……いや、綺麗だけどさ。

薔薇と桜と一緒に咲いてるのは、日本人の感覚からしたら、ちょっと異様に見える。

それを直接言つのはなんだつたので、濁しつつそれを伝えたら、カレヴィはそういうえばおまえの国には四季があるのでたな、と肩

を竦めた。

「この庭園は、ガルディア王国のものを模して作ってある。あそこは一年中春だからな」

へえ、千花がいる国つてそんなんなんだ。  
それにしてしもこの世界の気候つてどうなってるんだら？。まさに

ファンタジー。

「過ごしやすそうだね」

人が住むには少々暑いザクトアリアの王であるカレヴィイはどこか憧憬をこめた瞳で頷いた。

「ああ、そうだろうな。ガルディアは大陸一の魔法大国で教育体制も整っている。おまけに特出した魔術師が一人もいる。大陸中の人民が移住したいと思つていてる国だろ？」

「ふーん、ここの大陸の人には憧れの国つてことかあ

「それにガルディアは魔術師団もさることながら、騎士団が近衛含めて三つもある。……ガルディアは魔法大国と言われているが、他の軍備も群を抜いている」

騎士団が三つ！？

騎士が出てくる漫画を描いているわたしは、思わずその言葉に反応してしまった。

「えっ！？ そうなの？ だったらぜひ、その騎士団を見学してみたいなあ」

うまくいけば漫画のネタになりそう。

カレヴィイがガルディア王国のことをあんまり褒めるので、かなり興味を引かれてそう言つたら、彼にがしつと肩を捕まれた。  
ちょ、ちょっと痛いよ。

「駄目だ」

「なんですよ」

カレヴィイの上からの言葉に、わたしは思わずむつとして言い返す。

「おまえは俺の婚約者なんだぞ。いずれ王妃になる者が気安く他国に出かけるな」

う、まあ、それを言われちやうと苦しいけど。

「じゃ、じゃあ変装して行くつていうのはどう? 」それなら婚約者  
つてばれないでしょ? 「

日本人独特の顔立ちでばれるつてことも考えられるから、そこは  
千花の幻影魔法でごまかしてもらおう。

「あそこは王弟は鋭いぞ。もしばれたらどうす? 」

その王弟つて人は怖い人なのかな? 弱味を握られると国として  
後々困ること? うーん、それはまずいかも。

……でも行きたい。

「なら、こつそり行けばいいじゃない。……千花がいればどうにか  
なるつて! 」

困った時の千花頼み。……千花にはいい迷惑だらうけど。

「……おまえはティ力殿、ティ力殿と……まあ、いい。騎士団と言  
えば聞こえはいいが、要はむさし男の集団だぞ。そんな中に俺の婚  
約者を放り込む真似ができるか」

……さつきは褒めてたのに、今度はむさこときたか。どっちなん  
だよ、カレヴィイ。

カレヴィイは強硬に反対するけど、その理由、狼の群に羊を送り込  
むみたいな例えだな。

カレヴィイ、見学するくらいで大袈裟すぎる。

「だから千花がいるから大丈夫だつて! 紹介くらいしてもらつて  
も別にいいじゃない。減るもんじゃなし」

「減る」

なんだその答えは。お子様か。

「けーち」「けーち」

対するわたしも随分と大人げない反応で返してしまつた。

しばしわたしはカレヴィイと睨み合つ。

せつかくの生の騎士を取材する機会を逃すなんてもつたないこ  
と、わたしには出来ないよ。

やがてカレヴィイがわたしから田を逸らすずに言った。

「いくらティカ殿がいたとしても、駄目なものは駄目だ。どうしても行きたいと言つなら俺を連れていけ」

「ええ！？」

わたしはびっくりしすぎて思わず飛び跳ねちゃったよ。  
ひとつそりとお忍びで「騎士団のファンなんです」とか言って彼らを見学して、うまくしたら騎士道や普段の鍛錬について話せたらなあとかわたしは思つてた。  
それが、王であるカレヴィイがついてくるつて、こつたいでういうこと？

わたしはカレヴィイの婚約者だけじ、まだ王妃じゃないんだよ？  
それなのに、そんなことされたらこつちが困る。

そんな大事になつたら、ガルディアにザクトアリアの重要人物として扱われることになつて、騎士に突っ込んだこと聞けないじやないよ。

「やだよ、そんな大袈裟にするの。そんなことしたら、いろいろとめんどくさいじゃない」

カレヴィイは、わたしのこんな騎士云々の話でわざわざガルディアに公式訪問なんて面倒じゃないんだろうか。

そもそもガルディアへ訪問するのに、どんなふうに説明するの？  
まさか、婚約者が異様にこちらの騎士団に興味を持つていましてなんて、本当のことは言わないだらうけど。

うん、カレヴィイが王としてガルディアの騎士団の体制に興味があるとかというのが理由としては自然かな。

でもでも、そんなのやだよ。

わたしはろくに礼儀作法も出来ていないので外交デビューなんて。

「なら諦める。それ以外は認めん」

カレヴィイから冷たく言われて、期待に胸を膨らませていたわたしはかなりショックを受けた。

……うう、そんなあ。

でも、カレヴィイ頑固そつだし、騎士団取材は無理そつだ。

「……分かつたよ。騎士団のことは諦める」

仕方ない。騎士団に関しては、千花に聞くだけにとどめよう。

「分かればいい。おまえは今は婚礼の準備期間だということを忘れるな。それを理解していればそんな軽はずみなことは言えないはずだ」

「うん、ごめん……」

彼の言う通り、今は凄く忙しい時期だ。確かにそんなことをしている暇があるとは思えない。

でも、一時間くらいでも取材させてくれればだいぶ今後の為にもなると思うんだけどなあ……。

わたしがもの凄くがっくりしてると、カレヴィイは良心が咎めたのか、「後でおまえの部屋にガルディアの騎士に関する本を届けさせる」と言つてきたけど、わたしが会いたいのは生身の騎士なんだよ。わたしがそう言つたら、カレヴィイにすかさず反対された。

「生身は駄目だ、生身は」

「……結局、カレヴィイはわたしが生の騎士に会うのが嫌なわけ?」

「なんとなく、カレヴィイが国とかそういうレベルで言つてる訳じゃなく、実はまったくの個人的な意見だったように聞こえたので、わたしは彼に突っ込んでみた。

すると、カレヴィイは瞳を見開いてから、ちょっとうるたえてた。

「……まあ、そういうこともあるかもしねないな」

なんだ、その曖昧な言い方は。はつきりしないなあ。

でも、庭園から帰つてきたら、早速部屋にガルディアの騎士の本が届けられていて、わたしはカレヴィイの行動の早さに思わず舌を巻いた。

なにがいつたいカレヴィイをそこまでさせるんだ。  
せつかぐだから読むけど。

……ああそれにしても、生の騎士見たかったなあ。

庭園の散策から帰ってきたわたしとカレヴィイは、ちょっと一休み  
ということで共同の間で一緒に「コーヒーを飲んでいた。

そこでわたしは、向こうで買ってきたポテトチップスの袋を大皿  
に開け、カレヴィイに食べてもらうことにした。

…… そういうや、わたしさつきバナナ食べたんだつけ。気をつけな  
いとすぐ脂肪に化けるから、ちょっと自重しなきゃ。

「これがハルカの世界の菓子か。…… 塩辛いが旨い。癖になりそう  
な感じだな」

カレヴィイは塩味のポテチをパリパリとつまみながら、時々興味深  
そうにそれを眺めている。

「これはここでも作れるのか？」

「ポテトチップスくらいなら作れるよ。薄く輪切りにしたジャガイ  
モを水にさらした後、水分をよくふき取ってから油で揚げればいい  
んだよ。後は好みで塩とか調味料で味付けすればいいだけ」  
控えていたゼシリアがわたしの言つたことをメモにとつていく。

厨房で作る気なのかな？

フライドポテトは既にあつたし、今までなかつたのが不思議なく  
らいだけど。

「そうか。では今後こちらで作らせよう。…… ハルカはあちらでい  
ろいろな菓子を買ってきましたようだな」

カレヴィイはそう言いながら、わたしが持ち帰つてきた菓子の入つ  
た袋の中身を確認している。

「うん、こっちには甘いお菓子しかないと聞いてたから。カレヴ  
イもいろいろ試してみて」

シンプルな塩味のポテチは気に入つたみたいだけど、味覚的に駄  
目なものもあるかもしれないし、出来れば念のために買つてきたも  
の全種類試してみた方がいいかなと思つたんだ。

……一応、これ全部わたしが好きなお菓子だし、カレヴィイが駄目ならわたしだけで食べることになるけど。

でもそうすると、ダイエットにはよろしくなさそうではあるなあ。……まあ、少しずつ食べれば問題はないか。イヴォンヌ達もいるし

ね。

「ああ、分かった。俺には珍しいものだから楽しみだぞ」「カレヴィイはカップを口に運びながら、爽やかに笑つて言つてくれた。

「ういう時はカレヴィイ、マジでイケメンなんだけね。これで時々変なことをしてかさなければ、伴侶としては最高なんじゃないだろうか。

お金持ちの國の王様で、美形で仕事も出来て、性格もまあちょいと偉そうなところはあるけれど、基本的には優しいし、浮気の心配もないと来た。

でも、そんなカレヴィイのなにがおかしいって言つと、特に夜とか夜とか夜とか。

そしてそれを異分子のわたしに反発している貴族連中に言つてしまふというのも、おかしすぎる。

カレヴィイに羞恥心というものはないのか。

わたしがそんなことを思つて悶々としていると、近衛と取り次ぎをしていたゼシリアがカレヴィイの近くに寄つてきた。

「陛下、ハルカ様にお目通りを希望なさつておられる方々がいらっしゃいます」

ゼシリアのその報告にカレヴィイの顔がうんざりといった感じになつた。

方々、というからには複数だよね。

またわたし達の婚礼を反対している貴族が来たんだろうか？ だとしたら、ちょっとやだなあ。

「……またか。ハルカはまだこちらにきて間もないのだ。あまり今から疲れさせるのは良くない。帰つてもらえ」

それ、一番わたしを疲れさせているカレヴィイが言うこと？ なんとなく納得できないんだけど。

でもカレヴィイは眉をちょっと顰めていて、わたしのことを本気で心配してくれているみたいだ。

「……それが、リットンモア公爵家のアーネス様とイアス様なのですが」

そこでカレヴィイは飲んでいたコーヒーを氣管に詰まらせたらしく、思い切りむせていた。

わたしは慌てて立ち上ると、カレヴィイの背中をさすつた。

「だ、大丈夫？」

カレヴィイがこんなに動搖するとは、その一人、どういう人物なんだろう。公爵家というからにはかなり高い地位の人達なのだけは分かるんだけど。

カレヴィイはひとしきり咳こんでいたけれど、それもどうにか治まつたようだ。

「ああ、大丈夫だ。ハルカすまない」

カレヴィイが頷いたところでわたしは安心して席に戻る。

すると、カレヴィイはこう言つてきた。

「アーネスがハルカに会うなら俺も立ち会う」

……？ アーネスって人が問題なのかな。イアスって人のことは特になにも言つてないし。

でも随分と偉い人みたいだし、粗相のないようにカレヴィイに付いてて貰つた方が助かるかも知れない。

「うん、お願ひ」

わたしが頷くと、カレヴィイはリットンモア公爵を受け入れる準備をさせた。

「ねえ、その公爵家の方々はおいくつなの？」

「アーネスは公爵で俺と同じ年だ。イアスは十七だったか」

え、ところ」とはその公爵様は一十四歳か。

それなら、昨日の貴族達みたいに姫を妃に、つていうことはないのかな？……いや、妃にしたい妹がいるつて線も考えられるか。

「……いいか、ハルカ。絶対にアーネスに見とれるな。口車に乗るな。惚れるな」

がしつと肩を掴まれて真剣に訴えられたけど、その内容はなんだ。考えていた内容とはまったく違つたことをいきなり忠告されて、わたしは戸惑つた。

……でも分かつたことは一つ。

「……ふうん、格好いいんだ」

カレヴィの言葉から総合して答えを導き出したわたしに、すかさず彼から「絶対に惚れるな！」とビシッと指を指されて言われた。

「……いや、そんなの会つてみないと分からないし」

なんとなく必死なカレヴィがおかしくて、つい言つてみる。

「会うな！」

「……冗談だよ。カレヴィ、なんでそんなに必死なの？」

政略結婚相手のわたしに、ここまで言つてくるのはなんか不自然だ。

「……っ、そ、それは……っ」

普段は王様然としているから、こんなに動じるカレヴィは本当に珍しい。

わたしがじつと彼を見つめていると、それに耐えられなくなつたらしくカレヴィが叫ぶように言つた。

「く……っ、分かつた、認める！ 奴に命わせればいいんだから！」  
えー、ちょっとふざけたことは認めるけど、そこまで必死になつて言つ」と？

そんなことを思つてると、モニーが悪気もなく言つてきた。

「まあ、陛下を翻弄するハルカ様はまるで『小悪魔』のようで、素敵ですわね」

ええ？ 小悪魔つて、それはわたしにもつとも遠い表現じゃない

の？

けれど、そんなわたしの考えに反して、ソフィアもちよつと興奮したように言つてきた。

「小悪魔！ 確かに陛下のお心をこれほどまでに乱されるハルカ様にぴったりの表現ですわ」

え？ そんなにわたしはカレヴィの心を乱したつけ？

そういうや、さつき騎士と会いたいって言つた時は、えらい反対されたけどさ。

「まあ、本当ですわね！」

イヴェンヌも頬を染めながらそれに同意した。

なんだか異様に侍女三人が盛り上がりしている。もしかして、これは変な方向に誤解されているのか？

いや、それはない。それだけは期待されてもないから。

それにしてもカレヴィ、いつたいどうしちゃつたんだ。今までは王様らしくもつと堂々としていたつていづのに。

「そうか、小悪魔か。……ぴったりだな」

カレヴィまで頷いてそう言つてきたので、わたしはびっくりする。確かに今わたしがカレヴィを振り回していたのは本当なんだけどさ。

「えええ、わたしが小悪魔なんてありえない！」

なんといつても、この間までわたしは悪女だつたんだよ？ 小悪つてそれとは正反対じやない。

「……自覚がないというのも、恐ろしいものだな」

カレヴィが感心したように、叫んだわたしを見つめてくる。その様子を侍女三人もなにかを期待する目で見つめてくる。

……いや、本当にそれだけはありえないから。

カレヴィとわたしはお互いの利害が一致しただけの関係の政略結婚なんだよ。

わたしは地味で美人じやないし、カレヴィはただ、わたしを通じて千花の協力が欲しいだけのはずだ。

……そういう訳なので、お願いだから、みんなでわたしを変な目  
で見つめないで欲しい。

## 024 理解不可能

最初にわたし達の目の前に現れたのは、金色から下の方へ次第に銀に変わっていく豪奢な髪を背中の中程まで延ばした男性だつた。

……ふうん、この人がリットンモア公爵様か。随分と派手な人だ。瞳の色は青みがかつた紫。

纖細かつ優美なんだけれど、どこか男性的なところも持ち合わせている顔立ち。はつきり言つて超美形。

すらりとして見えるけど、鍛えているのがなんとなく窺える体つきをしている。

……つていうか、全身から立ち上るような色気が凄い。

なるほど、ゴージャスつていうのはこういう人のことを言つんだなーとわたしはしみじみ思つた。

漫画描きからしたら、ぜひデッサンさせてくださいと頼みたい人種であることは間違いない。

「ハルカ、見とれるな」

隣に座つたカレヴィイがこつそり声をかけてきた。

いや、別に見とれてた訳じやないけど。

単に人間観察をね……、と思つてたら、あちらもこちらを観察しているようだつた。

ふうん、興味があるのはお互い様つてことだね。

もう一人の公爵の弟であるアイアス様は、兄ほどの派手さはないものの、やはり同じ血を引いていると感じさせる程の美貌を持つていた。あと一、二年したら周りの女性がほつとかないんじゃないかと思われた。

魔術師なのか、地味な薄い灰色の外套を来てゐる。それが兄よりも地味な印象を受ける要因なのかもしれない。

でも、肩につくつかないかという長さの金髪や落ち着いた紫の瞳はとても綺麗だ。

正装させたら、ひょっとして兄に負けず劣らずかもしねない。

「お初にお目にかかります、ハルカ嬢。アーネス・クレイル・レグ・リットンモアと申します」

わたしは公爵様に恭しく手に口づけられて、貴婦人への礼を取られる。

「ハルカ・タダノです。よろしくお願ひします、リットンモア公爵様」

この挨拶、普通すぎたかな？

でも目の前の公爵様は「はい」とにこやかに微笑んでいるので問題ないようだ。

「別によろしくしなくていい」

隣に座っているカレヴィイがむすつとして言った。……ちょっと態度悪いよ。

わたしがカレヴィイにそう言おうとした途端、目の前の公爵様が口を開いた。

「おやおや、カレヴィイは噂に違わず随分とハルカ嬢にご執心のようだ。こんな普通の挨拶でご機嫌斜めとは」「え、王であるカレヴィイを呼び捨て？」

それも毒舌付きで。

わたしが思わず瞳を見開くと、公爵様はわたしの戸惑いに気づいたらしく、ああ、と言った。

「彼とは母親同士が姉妹なんですよ。歳も同じですし、わたしはカレヴィイの友人なのです」

「あ、そうなのですか」

わたしが思わず息をついてにっこりすると、目の前の公爵様もにっこりする。

……うーん、目に眩しいぞ。

彼のこの笑顔を目にしたら、ご婦人方がさぞかし騒ぐんだろうなあ。

「ハルカに色目を使うな、アーネス」

「……ちょっと、カレヴィイなんなの？ 普通に話してるだけでしょ」

わたしはカレヴィイの態度の悪さに段々いらしてきた。彼がこんな調子じゃ、わたしは誰とも普通に話せないよ。

「おまえが無邪気に笑いかけたりすると、こいつが調子に乗る。釘を刺しておいてちょうどよいくらいだ」

「あのねえ。……カレヴィイ最近おかしいよ？ いつたいどうしちゃつたの？」

うぬぼれたくはないけど、まるでカレヴィイが嫉妬しているみたいに聞こえる。……でも、まさかわたし相手にそんな馬鹿なことはないよね。

「そ、それは……つ」

あまりにカレヴィイの様子がおかしいので尋ねると、カレヴィイはかなり動搖したみたいだ。

……本当になんなんだ。

けど、カレヴィイと一緒に彼らに会つたのは実は失敗だったかも。そう思つてわたしがカレヴィイを田で制していると、やがてくすぐすという笑い声が聞こえてきた。

「本当にカレヴィイはあなたに骨抜きなんですね。夜の習いのことを彼から聞きましたよ。今のカレヴィイは以前の彼とはまるで別人ですね」

他人、それも男性から「夜の習い」のことを口に出されて、わたしは思わず赤面する。

ちょっと、カレヴィイあちこちでそんなこと言つているのか！？ い、いや、わたしも千花に最初の夜のことを話したからおあいこではあるんだ。

でも、この公爵様もそんなことは黙つていてくれればいいのに。それに、カレヴィイがわたしに骨抜きってなんだ。

「おや、女性個人には興味のなかつたカレヴィイを落とした方にしても随分と可愛らしい」

いや、公爵様、それは誤解！

わたしがカレヴィを落としたりとか無理だから！

「おい、アーネス」

さらに真っ赤になつたわたしをカレヴィが横目で見て、公爵様に文句を付けようとする。

「兄上、いい加減にハルカ様をからかうのはおやめください。お可哀想にあんなに恥ずかしがつていてはありますか？」

まだ挨拶をしていなかつたイアス様が公爵様を諫めてくれたので、わたしはほつとした。

「本当に申し訳ありません、ハルカ様。まだ挨拶もしておりますんでしたね。僕はアーネスの弟でイアスと申します。一応、富廷魔術師をしております」

イアス様もわたしの手を取つて貴婦人への礼をとる。

それをわたしはぼうつと見つめながら、イアス様が生真面目な態度なのはそのせいかと思った。

じゃあ、知らないところでいろいろお世話になつてるかも知れないんだね。

「わたしこそ、よろしくお願ひします、イアス様」

ふざけた兄と違つて弟は真面目で断然感じが良い。

けど、わたしの言葉にイアス様は困つたような顔をした。

「僕はこの王宮に勤めておりますので、ハルカ様に様付けされると非常に困るのですが。どうか、僕には普段通りお話しください」

彼にそう言われて、わたしは凄く納得してしまつた。

宰相のマウリスすら様付けしてないのに、いくら公爵家出身でも、一介の王宮付きの魔術師に様付けはまずいか。

「うん、分かつた。じゃあ、イアスって呼ぶね」

わたしがつこりして言つと、彼も麗しい笑顔で笑い返してくれた。

うわ、地味な格好しても、元が凄く綺麗だから眩しいや。

思わず、彼が年下ということも忘れてわたしはちょっと見とれてしまつた。

すると、カレヴィイがわたしを肘でつついてきた。

「ハルカ。だから、見とれるな」

ああ、もう。

わたしは漫画描きなんだから、綺麗なものに目をとられても仕方ないでしょ。

別にこれくらい、いいじゃないのよ。  
なにも浮氣するわけでもなし。……そもそも向こうがわたしを相手にするわけがないんだから。

「カレヴィイはあなたの目に入る男性にいちいち嫉妬しているのですよ。それくらいあなたに夢中なのです」

「おい……」

勝手にこやかに話を進めてくれる公爵様の言葉に、カレヴィイの顔色が変わる。

それにわたしはびう返していいか分からず、困惑顔になってしまった。

……あれ、IASは別に兄の暴走を止める」ともなくまじめな顔のままだな。

で、でもそんな馬鹿なことはないから。だつて、わたし達は……。  
そう言いかけようとしたら、むつとしていたカレヴィイの口が開いた。

「……ああ、そうだ。俺はハルカに夢中だ。ハルカに下心があつて近づく奴には我慢ならん」

え、えええーっ！？

ちよつ、ちよつとなに言つてるのカレヴィイ。

ひよつとして、頭どうかしちゃつたんじゃないの。

あまりのことにわたしは座つていた席を立つてしまつた。

続けて、カレヴィイも席を立つ。

「おまえら、出て行け。俺はこれからハルカに重要なことを伝える」  
しつしつと、カレヴィイは片手で公爵様とIASを追い返す。ちよ  
つと、失礼だよ。

イアスは少しわたしになにか言いたそうな顔をしたけれど、結局開きかけた口を閉じた。

ただ一人、超越した様子でこの状況を楽しそうに見ていた公爵様がイアスの肩を叩きながら、「また伺いますよ」と言って部屋を出て行つた。

……イアス、なにか言いたいことあつたみたいだけど、聞かなくてよかつたのかな？

仕方ない。次に会う機会があつたら聞いてみよう。

それで、わたしがシルヴィに望むみたいに、弟みたいに親しくしてもらえたなら嬉しいな。

「ハルカ」

わたしが彼らが消えたドアを見つめていたら、不意に後ろから力レヴィに抱きしめられた。

あ、そうだつた。これから大きな問題に向き合つんだった。  
でも、なにもこんなところで羽交い締めにしなくても……。あれ  
？なんか違うか。

侍女達が固唾を呑んでわたし達の様子を窺つてるし、なんだか恥ずかしいよ。

そしたら、いきなりカレヴィの爆弾発言が落とされた。

「ハルカ、俺はおまえがどうやら好きらしー」

「えっ！？」

わたしはびっくりしてカレヴィの腕から逃れようとしたり、強い力で抱きしめられていて、びくともしなかった。

「ハルカ、好きだ。……愛している」

その様子をソフィア達三人が今にも叫び出しそうな様子でそれぞれ口を押さえている。

ゼシリ亞はいつもと変わらなく冷静だ。……うん、さすがだ。

そんなことを悠長に考えていたら、カレヴィの指がわたしの頸をとらえた。

そしてそのままカレヴィの浅黒くて、でも秀麗な顔が近づいてくる。

え、え、え、わ、わたし、わたし、まだ、心の準備が……。

そう言う間もなく、カレヴィの唇がわたしの唇を塞ぐ。

唇に感じるのはとても柔らかい感触。

夜ならともかく、昼間に彼がこんなことをしてくるとは到底信じられなくてわたしは混乱する。

な、ななな、いつたいなにが起こつてゐるの一つ！？

……今のわたしには理解不可能です。

## 025 野獣の暴走の止め方

べたべたべた。  
いやいやいやいや。

今日のカレヴィとわたしを表すとしたら、こんな感じだね。でも、わたしはしたくてそういうしているわけじゃない。ひとえに今の状況はカレヴィのせいだと声を大にして言いたい。なにをしているかと言えば、朝食を取つているだけなんだけど、カレヴィが嬉しそうにわたしをやたら構つてきて、ちょっと困惑。……いつたい、なにがどうなつてこんなことになつてているのや。わたしはカレヴィに気づかれないようにそつと溜息をついた。

昨日わたしはなぜかカレヴィの牛丼を受けた。  
わたしは彼の正気を疑つたけれど、どうやら彼は本氣らしかった。  
でもわたしはカレヴィとのことは政略としか思つてなかつたし、  
まさに晴天の霹靂とはこのことだ。

それですっかりうたえたわたしは、カレヴィを無理矢理執務室  
に押しやり、自身は自室に閉じこもつて頭を抱えてしまつた。

わたしは恋愛には全く免疫のない喪女だったんだから、そんなこと突然言われても困る。  
でもカレヴィは執務を終わらせると、今度はわたしに引っ付きだした。

……悪いけど、かなり鬱陶しい。

わたしだつて空いた時間は趣味に没頭したいんだよ。  
でも、贅沢をさせて貰つてはいる身でそんなことは言えない。

仕方なくわたしは我慢できないところは除いて、その他はカレヴィにされるがままになっていた。

されるがままと言えば、昨夜もそうだった。

リットンモア公爵様に挑発されたのが気にくわなかつたのか、カレヴィはついでわたしの体中にキスマークをつけてくれたのだ。……さすがにこれは恥ずかしい。

案の定、今朝侍女達に見つけられて、「ハルカ様、陛下に愛されますわーっ」とか騒がれてしまった。

「陛下、今ハルカ様にこんな痕を残されでは困ります。魔術師に早速消させていただきます」

他の侍女達が浮き足立つてている中で、ゼシリリアが毅然として言った。

え？ 今キスマーク付けられると困るひととは、今日なにかあるの？

確かに恥ずかしいし、おかげで外にも出られないけど。

「別にいいだろ？ このくらい。ハルカが俺にどのくらい愛されているかの喧伝にもなる」

そう言つと、すました顔でカレヴィイが隣に座つているわたしを抱き寄せキスをする。

「カレヴィイ、朝食の時間なんだから、そういうのはなるべく遠慮してよ。おちおちお茶も味わえないじゃない」

普段はコーヒーが多いようにも思えるけれど、今日はミルクティーだ。ザクトアリアではコーヒー豆の他に、お茶の生産もしてるんだって。

ちなみに力力オの生産国でもあるので、ココアも選べたりする。チョコレートも食べ放題だし。……ただし、これは太るという事情で程々にしている。

でも千花なんかは喜んでお土産にもらつて帰つて行くんだよなー。

もちろん家族にも配るんだらうけど。それでも、いくら食べても太らない体质なのは、まったくもってうらやましい限りだ。

そんなこんなで、大陸中の嗜好品の生産国であるこの国は、実は結構にお金持ちだったりする。

「確かに喧伝にはなりますが、ハルカ様が恥ずかしい思いをされると思いますわ。なんといっても、本田は婚礼衣装の採寸ですし」ゼシリアがちょっと困った顔でそう言つてきたので、わたしは思わずミルクティーを吹いちやうところだった。

「えええ、そんなのがあるの！？ それなら消してっ、絶対消して！」

「そんなのいい見せ物じゃないよーっ！」

カレヴィ、なに考へてるんだ。

「せっかく付けたのに、もつたいない  
いやいやいや、もつたいなくないから。

「まあ、いい。今回は反対にあつたが、また付けねばいいんだからな」

……いや、一度反対されたら、普通もう付けないでしょ？

カレヴィの思考に付いていけなくて、わたしは思わず頭を抱えてしまった。

そんな時、まさに麗しい天使が現れた。

「イアスでござります。お呼びでござりますか」

そういえば、彼は宫廷魔術師だったんだっけ。

わたしは喜び勇んで彼に近づいていくと、なぜかイアスは顔を赤くした。

……あ、この痕はイアスには刺激が強すぎたか。  
まだ、十七歳だものね、ちょっと反省。

「……まあ、こいつには少しあは牽制になつたか

横でカレヴィイが訳の分からぬことを呟いている。

弟みたいな年齢のイアスを牽制してなんになるんだ。

カレヴィイ、おかしいよ。

わたしはカレヴィイをちょっと睨んでから、まだ顔を赤くしているイアスに頬んだ。

「イアス、悪いけどこの痕消してくれるかな。これから婚礼衣装の採寸があるから、こんなのがあると恥ずかしくて」

「かしこまりました」

イアスはその綺麗な瞳を閉じて短い詠唱をすると、最近はいつも朝にある倦怠感と共に、みるみる全身に散りばめられたキスマーケも消えていく。

これが千花なんかだと、わたしに触れただけで出来るんだろうけど、イアスは彼女と違うし。そのところどうなんだろ？  
わたしがイアスに突っ込んで聞いてみたら、彼はちょっと困惑つたような顔になつた。

「確かに、触れた分だけ魔法の浸透率は早くなります。僕もティカ様程完璧ではないですが、ある程度は出来ますよ」

それを横で聞いていたカレヴィイが口を出してきた。

「イアス、俺の婚約者に手を出す気か」「は……？」

頭が沸いているカレヴィイに、イアスの目が点になる。……うん、気持ちちは良く分かるよ。

「ちょっと、治癒魔法の話してるだけでしょ。それがなんでそんなことになるの？」

「ハルカに触れると治りが早くなるらしいじゃないか。俺の前でそんなことはさせないぞ」

「だから、イアスは詠唱だけで済ませたでしょ。変なこと言つてないで、カレヴィイはもう執務に入つてよ」

ちょっと酷いかもしないけど、おかしなことを言い出すカレヴィ

イにはこれくらいでちょうどいいかもしない。

「……一応、俺も衣装の採寸があるんだが」「ちょっとといじけたようにカレヴィイが言ひ。

「それなら、尚更忙しいでしょ。もう朝食終わりにして、解散しよ「ハルカ、俺がこれほどまでに想つていうといつのにつれないな」カレヴィイがわたしの言いように苦笑してきて、わたしは思わず口ごもる。

……だつて、カレヴィイのわたしに対する変わりようが突然すぎるんだよ。

この環境に慣れるだけでも精一杯なのに、異世界の王様に溺愛されるなんて、喪女だつたわたしには理解不能だ。

それにこの結婚は完璧に政略だと思つてたし、いきなりのカレヴィイのこの攻勢にはこちらとしては困惑するしかない。

「……ごめんね。わたしも出来るだけあなたの気持ちに応えられるようになるから、それで我慢してね……？」

これで納得してもらえたるうかと小首を傾げてカレヴィイを見ると、彼はふるふると大きく震えていた。……どこか、悪いところでもあるんだろうか。

「ハルカッ！」

カレヴィイは大きく叫ぶとわたしを強く抱きしめた。それでつい、わたしあも叫び声あげてしまう。

「本当におまえは優しいな。惚れ直したぞ」

……いやー……、優しいといつより、流されたといつ方が正しいかもしねりない。

そしてまた、衆人環視の中、カレヴィイの端正な顔が近づいてくる。あ、今回はイアスもいるや。ちらりと彼を窺うと、ちょっと息を呑んでいる。

ごめんね、朝っぱらからこんな見せて。

でも野獸を懷柔するには多少の忍耐も必要なんだよ。

でも、つづづく今日の朝食にシルヴィイを招待してなくて良かつた。

じんなの見たら、あつと彼は兄の壊れ具合に嘆くと思つ。

本当に、なんでこんなことになつちやつたのかなあ。  
考えつくとしたら夜の習いくらいだけじ、それくらいで、王であるカレヴィイがどうにかなつちやつとは思いたくない。

いや、思い返せば、貴族達に言つたことみたいに、今の片鱗は確かにその時に見えてたけどわ。

でも、カレヴィイにはもうちょっと冷静になつて貰わないといつぱりしても困る。

ところ構わずにちやここたりしたら田も当たられないしね。

そう考えて、今日はイアスにカレヴィイを執務室に強制的に送つてもらつた。

うん、少しさは執務で頭を冷やして欲しい。

……マウリス、後は頼んだ。

そうやって、わたしは實に他人任せなことを思いながら、すこし呆然としているイアスを誘つて、朝食の後のお茶の続きをつつき合つてもらつちやつた。

あー、やつぱりイアスも弟みたいで可愛い。なんといつか、癒される。

成人男子にそんなこと言つと失礼らしくから口には出さないナゾね。

それにしても今後、カレヴィイの暴走をビリヤツで止めようか。  
夜のこともあるし、やつぱり千花に出てきて貰うしかないなどわたしは思うのだった。

婚礼衣装の採寸も無事に終わったわたしは、早速千花にはつきりと「精力減退の薬ない?」と手紙を書いて送ると、彼女はしばらくしてやつてきた。

「一瞬なにかと思ったよ。……カレヴィ王のことだね」

いくら親しい仲でも、いきなり一言だけアレな手紙を送りつけたのはまずかったかなあ。千花、「ごめん。

「うん、そう。カレヴィ、程々つてのが出来ないみたいだからどうにかしたくて。わたしも体力的にそろそろきついし」

なんだかんだ言って、夜の習いの終わった後は、治癒魔法とか湿布とか痛み止め使い放題だし、いくらなんでもカレヴィはやりすぎだ。

おまけに、わたしへの愛(ー)に田覚めてしまったカレヴィはやたら行為を引き延ばしたがるし、わたしとしては死活問題だ。

「ふうん、カレヴィ王はかなり落ちるのが早かつたんだね」

訳知り顔で千花が一人頷く。……意味が分からぬ。

「? なんのこと、千花」

「ううん、こっちのこと」

……? 笑って「まかされたような気もするけど、まあいいか。

それよりも重要なこと確認したいし。

「それで、例の薬はあるかなあ?」

期待でどきどきしながら聞いたら、千花にあっさりと突き落とされた。

「うーん、そういう方面的の需要はないから、はつきり言つちやうとない」

「そうか、やつぱりないか。

そうだよね。あっちの世界でも精力が欲しいっていう人の方が多いみたいだし。

わたしがしょんぼりしていると、千花が慰めるように肩を叩いてきた。

「まあ、作ることはできるから、はるかはそつ氣を落とさないで」

「えっ、本当？ 千花、作ってくれる？」

それで現金にもわたしは色めきたつてしまつた。

カレヴィのアレが抑えられるなんて素敵すぎる。

「それはいいけど。……でも、カレヴィ王がそんな薬飲むかなあ？」  
千花が首を傾げながら疑問を投げかけたけど、わたしの体力がかかつてゐるんだもの、絶対にカレヴィには認めさせてみせる！

……とは思ったものの。

執務室に行って、カレヴィにそのことを伝えると、思い切り拒否された。

「俺は、そんなものは飲まんぞ」

「えええ、だつてカレヴィ、程度つてものを知らないんだもの。わたし、このままじや体が続かないよ」

結果的に体力を落とすから、治癒魔法をかけ続ける訳にもいかないしさ。

わたしがそう言つと、カレヴィがちょっと動搖した。

「……それは、悪いとは思つてゐる。だが、実際におまえを前にする」と抑えがきかないんだ

「だから、薬で抑えようつて話じゃない。カレヴィ、お願ひだから了承してよ」

カレヴィは気持ちが揺れてたみたいだけど、結局うんとは言わなかつた。

「それだけは、男として嫌だ。ハルカ、すまない」

ええーっ、じゃあ、これからも夜はこのまま野獣の餌食なわけ？  
わたしはそれからもさんざんごねたけど、「駄目なものは駄目だ」とついには執務室を追い出されてしまった。

……カレヴィってわたしを好きなんじゃないの？ やつぱりあの

言葉は嘘だつたんだねっ！

そうわたしが憤つてると、なぜか千花までがカレヴィのフォローを入れてきた。

「……まあ、カレヴィ王にも男のプライドってものがあるんだろうし、了承させるのはそう簡単にはいかないと思うよ」

「でも、千花。男のプライドって言つたって限度があるよ。このまじやわたし死んじゃうよ」

趣味三昧で快適生活と思つてたら、こんなことなんでもない魔が潜んでいたなんて思つてもいなかつた。

やつぱり、そういうまい話はないよね。

このまま過労死コースかと、わたしが落ち込んでいると、千花が頸に指を当てて考え込む。

「……それなら、魔法で時間制限するつていつのはどう？ 魔法自体ははるか自体にかけるからカレヴィ王に薬を盛るわけでもないし

時間制限！！

「えつ、そんなこと出来るの、千花！」

わたしは藁にも縋りつく思いで、千花を見てしまった。

「うん、出来るよ。たとえば真夜中になつたらカレヴィ王ははるかに手を出せないうちにしたりとか

「そつ、それつ、ぜひお願ひ！ 千花、わたしの体調管理のためにも協力して！」

「うん、分かつた」

わたしは千花と話し合つて、カレヴィがわたしに手を出せる時間は夜の習いの始まりから真夜中までとした。もちろん、朝はなし。

「まあ、これだけあれば普通大丈夫だらう。

千花によると、これは防御壁魔法の改変版らしい。

ということはその時間以外は、わたしはカレヴィを拒絶するつてことになるのかな。

「……ひょつとしたら、カレヴィ傷つくかも。

でも、カレヴィだってわたしの体のこと考えてくれないんだから、

おあいこだよね。

わたしはちょっと後ろめたかつたけれど、千花にその魔法をかけて貰つた。

うん、これで過労死は免れたぞ。

「千花、ありがとね」

「うん……。心配だから、明後日くらいにまた様子見にくるね」  
上機嫌のわたしとは対照的に、千花はなぜか心配そうだ。

千花は心配性だな。

千花の魔法のおかげで、カレヴィの無茶が減るんだから、心配することなんてなにもないって！

結果から言つと、千花の魔法は効果抜群だった。

夜の習いの最中、本当にあらかじめ決めた時間になつたら、カレヴィはわたしに手を出せなくなつた。

千花、マジで凄すぎる。

焦つている彼にわたしがにんまりしていると、カレヴィがものすごく不機嫌そうに聞いてきた。

「どういうことだ、ハルカ。まさか、なにかしたのか？」

「うん、千花に時間制限の魔法をかけて貰つたの。だからカレヴィ、わたしに手を出せないでしょ。カレヴィがわたしの体のこと考えてくれないからいけないんだよ」

いくらわたしが丈夫だからっていっても、ものには限度つてものがあるんだからね。

わたしの再三の願いを聞かなかつた罰をカレヴィは受けければいいんだよ。

「考えていないことはない！ ハルカ、ティカ殿に言つてすぐに解いてもらえ」

「えー、やだよ。カレヴィ、たまには我慢することも覚えなきや。

……じゃあね、お休みカレヴィ

わたしは寝間着を着込むとさつやヒシーツを引き被つて眠りに入つた。

「ハルカーッ！」

煩いなあ、もう。

近衛とか侍女がなにかと思つて見に来るじゃないよ。

……でも、千花が事前に事情を話してあつたらしく、彼らは現れなかつた。

よし、これで安眠できるぞ。

「俺にこの状態でいるというのか。酷すぎるぞ、ハルカ」  
そう言うカレヴィはいわゆる寸止め状態。

だから可哀想は可哀想だけど、ここはあえて心を鬼にしなきやね。カレヴィが男のプライドをちょっとくらい捨ててくれれば、わたしだつてこんなことしなくて済んだんだよ？

「わたしが好きなら、このくらい耐えられるよね、カレヴィ？」  
シーツから顔だけだしてわたしはにっこり笑つた。

するとカレヴィが心底悔しそうに唸つた。  
そして、してやつたりと満足したわたしは、カレヴィを置いてきぼりにして、久しぶりに朝まで安眠したのだった。

そして、カレヴィイを絶望的な気分に陥らせた夜が開けた。

今日はわたし、シルヴィイをお客様として朝食に誘つてゐるんだ。  
これも、千花が時間制限という魔法をかけてくれたから、できる  
ことなんだけれど。

できれば、シルヴィイにはカレヴィイのアレによつてよれよれになつ  
たわたしを見て欲しくなかつたし。

弟にしたいシルヴィイと朝食を一緒に取ることが出来て上機嫌なわ  
たしと、なぜだか遠慮氣味なシルヴィイ、不機嫌も露わなカレヴィイの  
三人での朝食会。

なんだかちぐはぐだけど、カレヴィイの機嫌の悪いのはあのせいだ  
つて分かつてゐるから放つておいた。

「シルヴィイ、食べないの？　まだまだ育ち盛りなんだからたくさん  
食べないと」

わたしは食が進まないらしいシルヴィイの前に、スクランブルエッグとかチーズやソーセージとかサラダとかを山盛り皿に乗せた。

……本当は、これは女性がやるべきことじゃないらしいんだけど  
ね。

実際、カレヴィイは食事の時はわたしに料理を皿に取り分けてるし。  
でも、まだ食べ盛りのシルヴィイが食事を取らないのは良くない。  
まだまだ背も伸びそудし、十六という年齢的にも、体がこれから  
らしつかりして行くところだしね。

「あ、はい……。お気遣い頂いてすみません……」

シルヴィイは、先程から受けているカレヴィイの視線が気になつて仕  
方ないようだ。

「なんでおまえがハルカに料理を取り分けて貰つてるんだ。ハルカ  
に気を遣わせるな」

カレヴィイが機嫌悪く言つと、シルヴィイは居心地悪そうに身を縮こ

ませた。

「申し訳ありません」

「ちょっと、カレヴィ。せつかくシルヴィが招待に応じてくれたつて言うのに、そんな言い方つてないでしょ。朝ぐらい機嫌良くできないの？」

「しかし、おまえはこいつに心を碎きすぎだ。それくらいならもつと俺に気を使え」

カレヴィは、未だにわたしに触れられなくて不機嫌みたい。

うーん、あっちの時間で九時頃には時間制限魔法の効果が消えるはずだから、そんなに焦らなくてもいいのになあ。

それに、いくら機嫌が悪いからって、シルヴィにハツ当たりすることないでしょ。

「カレヴィ、心狭すぎ。未来の弟と仲良くしてなにが悪いの」

「しかし、おまえは俺よりも、イアスやシルヴィと仲良くする」と心が向いているようだぞ。違うのか？」

カレヴィにはつきりと言われて、わたしは思わずぎゅくしゃくしゃつた。

弟みたいで一人とも可愛いなあって、つい構いたくなるんだけどね。絶句しているわたしをなんととらえたのか、カレヴィが眉を寄せて苦言を呈してくる。

「いいが、ハルカ。一人とも成人しているんだ。まずそれを気にしろ。……また、貴族の者共になんと言われるか分からんぞ」

「……それって、二人と会うなってこと？ 王族じゃないイアスはともかく、王弟のシルヴィにまでそれっておかしくない？ これから家族になるんだし、仲良くして損はないと思うけど」

なんで、これから王族としてつき合つて行かなくちゃいけないシリヴィとのつき合いまで貴族にあれこれ言われなくちゃいけないんだ。

「おまえの言葉は一理あるが、おまえはまだ俺の婚約者で王妃ではない。変えようと思えば、おまえの相手はまだ変更できる」

「……え……？」

カレヴィイの言葉が余りにも衝撃的だったので、わたしはしばらく呆然としました。

夜にあんなことしてて、相手が変更できるってビックリ? 「王の婚約者と分かつていて手を出す大馬鹿者はどこにでもいるものだ。過去にはそれで婚約破棄になつた例も僅かにだがある」

「え、そうなんだ。王の婚約者に手を出すなんて随分な豪傑だね」わたしは正直言つて驚いた。

権力の頂点にいる王の婚約者を奪うなんて、カレヴィイがさつき言つたみたいによほどの大馬鹿者か、大物かのどつちかだと思つ。

「……それで、手を出した人はどうなつたの?」

「半年から一年程度の謹慎処分になつた。なかには政務が滞るということで咎めなしという例もあるが

「え、そんなに罰が甘いの?」

よくて、鞭打ちとか国外追放とかだと思つてたから、カレヴィイのこの言葉にはびっくりした。

「たまたまだろうが、それが侯爵や公爵の子息などだつたんだ。いくら王とはいえ、身分の高い貴族をそうそう処分するわけにもいくまい。王妃になつていればこうはいかないがな」

「そつなんだ。婚約者と妃では随分違つてくるんだね」

女としては、やることやつてるのになんか納得できないけど。でも、わたしに限つて、そんなことは起きないだろう。わたしは今までてない女だつたんだから。

「こんな地味女を口説くような、そんな勇者がいるとは思えなんだけど」

「アーネスなどは、その気満々だつたぞ。早々に追い出したからおまえは無事だつだがな。……とにかくあいつは女に手が早い。おまえは特に流れやすいから気をつける」

「まあ、流れやすいのは事実だけど、わたしはカレヴィイの婚約者なんだし、そんなことにはならないよ。」

けど、リットンモア公爵様がわたしを口説く気満々で本當なんだろつか。

わたしなんかより、他にもっと綺麗で素敵な人がいると思つんだけどねえ。

「……ひょっとして、異世界の女が珍しいだけじゃないの？ そのうち公爵様もわたしがつまらない女だと気づくよ」

わたしが真面目な顔で言つと、なぜかカレヴィイじやなくてシルヴィがむつとした顔で言つてきた。

「ハルカは王族となるのでから、自分を卑下する言葉など言わないでください。あなたはもつと毅然としてくださらないと困ります」

うわ、これは正論。反論できないわ。

「あ、うん。ごめんね。氣をつけよ。ありがと、シルヴィー」

わたしがシルヴィにこいつと笑つて感謝の意を告げると、なぜか彼は頬を赤らめた。

「べ、別に、俺は王族のあり方を説いたまでです。そんな感謝を受けるいわれはありません」

うーん、その返し、なんだか、シン『トレッボイゼ。

「でも、シルヴィの言葉、嬉しかったよ。確かに自分を卑下するのはいけないものね」

わたしがシルヴィにこいつにこ笑いかけると、彼は更に真っ赤になる。

……ひょっとして、シルヴィ、ツンデレ属性？

だとしたら、弟属性に加えて更に萌えなんだけど。

ああ、今シルヴィの頭を抱えて思い切りぐりぐりしたい。カレヴィがいるからやらなければ。

「とにかく、ハルカは気をつける。それだけじゃなく、おまえに反発する貴族どもが妙な男をけしかけることも考えられるんだからな……そ、そうか、その可能性は考えてなかつた。本当に氣をつけなくちゃいけないなあ。

「とりあえず、近衛と魔術師の警護は強化してあるから、おかしな

ことはそうそうおこらないと思うがな。だが、おまえは人がいいと  
いうか、口車に乗りやすいから本当にアーネスには気をつけろ」

……一応、リットンモア公爵様つてカレヴィの友達なんだよね？  
でも、そのカレヴィでさえ口酸っぱく警告してくる人つていつた  
いどうなんだ、という好奇心が逆に沸いてくる。確かに、もの凄い  
美形だけだ。

いや、いけない、いけない。

わたしがこんなこと考えてるって言つたら、カレヴィまた変なこ  
と口走るよ。

「……ところで、時間制限の魔法はいつまで効力があるんだ」

あ、そうだ。酷いけど、そのことすっかり忘れてたよ。

「ええと、四刻半（約午前九時頃）まで。もう切れるよ」  
わたしがそう言つと、カレヴィは頷いてわたしにつかつかと近づ  
いてきた。

「そうか」

「……っ！」

わたしはいきなりカレヴィに抱き寄せられて、濃厚なキスを受け  
てしまつた。それも何度も。

ああ、今椅子に座つてて良かつた。

立つてたら、確実に倒れてるね。

「それでは、執務に入る。……ハルカ今日の夜は覚えておけ」  
「えつ！？」

時間制限したのに、カレヴィはまだにかやる気なの？ いつた  
い、どうやつて？

聞き返したかつたけれど、カレヴィは颯爽と執務室に入つていつ  
てしまつた。

そして、後に残されたのはわたしとシルヴィ。

見ると、シルヴィは真つ赤な顔で固まつている。

それで、わたしもなんだかすごく恥ずかしくなっちゃつた。

……なんだか、シルヴィには悪いことしちゃつたかなあ。

それにもしても、カレヴィはいい加減人前でああいう言動はよして  
欲しい。

「実は、本日ハルカ様に献上品がございまして」  
ちょっとおかしな雰囲気だつた朝食が終わつてしばらくたつた後。  
腹ごなしに庭園でも散歩しようかなと思つていたけど、その前に  
ソフィアが非常に言いにくそうに伝えてきた。

「へえ、どなたから？ 貴族の方？」

また煩い貴族連中だつたら嫌だなあ。

わたしは礼儀作法もまだなつてないし、突つ込みどころはいくら  
でもあるだろう。

……けど、それはわたしの杞憂だつたみたい。

「いえ……、貴族の方ではいらっしゃらないのですが、王宮とは縁  
の深い方ですわ」

ソフィアは、なんとなく歯切れが悪い。

どうしたんだろ、と首を傾げてると、モニークが意を決したよう  
に言つてきた。

「実は、その方がハルカ様に直接お会いしたいと申してきました。  
身分的にそれは遠慮して頂くように申したのですが……」

身分的に……ってことは、わたしには会うのはばかられる人な  
のかな？ それで、貴族でもないと。

「ただ、どういう訳か、その方はリットンモア公爵様の紹介状をお  
持ちになつていまして」

ふうん、公爵様の仲介があるなら、じゃあ会わないわけにもいか  
ないような気がする。……カレヴィ辺りは反対するだらうけどさ。

「……で、その方はわたしに直接会いたいってことだよね？」

「は、はい……。あの、ハルカ様、差し出がましい口をきくようで  
すが、いくら公爵様のご紹介でもその方とはお会いにならない方が  
よいかと思われますわ」

「わたくしもそう思います」

イヴェンヌもモニーに同意して頷いた。ソフィアもそれに賛同するように頷いている。

「そんなにわたしに会わせたくない人って、誰？」

はつきりしない三人にわたしは切り込んで聞いた。

「あの……、実は、高級娼館の主なのですわ。そのフレイヤ様がハルカ様にお目通りを願つているのです」

「ああ、例のあれね」

非常に言いづらそうなイヴェンヌの言葉に、わたしは納得してポンと手のひらを拳で叩いた。

カレヴィイがわたしとの婚約前にあっちの方面でさんざんお世話になつてた所の主なら、彼女達がわたしに会わせたがらないのも納得だ。

……ふーん、でもおもしろそう。

わたし、そつち関係は元の世界の知識とカレヴィイ経由でしか知らないし。

こちらでカレヴィイの弱みを探つておくのもいいかも知れない。わたしは悪魔のようなことを考えながら、内心ニヤニヤした。

一応、時間制限の魔法をカレヴィイにかけたけど、それ以外にカレヴィイを止める方法があるなら聞きたいし。

あ、でも一番のお得意様が減っちゃつて、ここまでこぼしに來たつてことも考え方られるな。

なにせ、夜の習いが始まってから、カレヴィイはわたし以外はそういう相手はいらないって言つてるし。

……ま、いいか。その時はその時だ。

「いいよ、お通しして」

「ハルカ様！？」

三人が信じられないと言つよう叫んだ。

「その人に興味があるんだ。だから、会つてみよ」と思つ

一応、献上品には魔術師による検分が行われる。だから、それ自体には問題はないだろうし。

「……かしこまりましたわ」

諦めたようにイヴェンヌが待機しているであるかつフレイヤを呼びに行くために礼をして下がっていく。

心配そうにわたしを見てくるソフィアとモニーカには悪いけど、わたしは娼館の主に興味津々だった。

やがて、謁見用の椅子に座つたわたしの前に高級娼館「月華の館」の主、フレイヤが現れた。

わたしのとしては、恰幅のよい厚化粧の中年女性を想像していたんだけど、実際の彼女は四十代くらいの上品な感じの女性だった。ちなみに、あまりいい顔をしない三人を納得させるために、念のため部屋には近衛兵士を入れてある。

それに、この献上品を検分したIASがすぐ傍に控えているし、なんの問題もないだろう。

「ハルカ様におかれましては、」拝謁をお許し願えまして、欣幸の至りでござります」

わたしに対して正式な礼をして丁寧な挨拶をしてくるこのフレイヤという人物、いったいどんな人なんだろう。

第一印象としてはかなりいい感じなんだけど。

「本日はこちらを献上させて頂きにあがりました。月光蓮花香でございます。どうかお納めくださいませ」

使用者と思われる男性がずいと出てきて、恭しくイヴェンヌ達が立ちはだかるわたしの前に、被せてある上等な布を外して、細長い纖細な細工のしてある綺麗な桃色の石の箱を差し出した。

……なにこれ？

「香を焚く香炉ですわ。少し焚いてお見せしたいのですが、よろしいでしょうか？」

わたしが頷くと、モニーク達が小さなテーブルを用意して、フレ

イヤはそこに同じ桃色の石の板にのせた香炉を乗せた。

もう一人の彼女の使用人が持ってきた細長い金の綺麗な入れものからからスティック型のお香と思われるものを取り出した。

あ、なんだか、向こうの世界の長い線香型のインド香みたいだ。フレイヤの使用人がそれを香炉にセットすると、それに火をつけ蓋を閉める。

すると、やがて香炉の細工の隙間から僅かな煙と共に、爽やかな花の香りが立ちこめた。

「……まあ、よい香りですわ」

ソフィアが思わずといった様子で言つたけど、確かにいい香りだ。それにどこかで嗅いだような懐かしい香りも混ざっている。……

そうかベビーパウダーだ。

人によつては好き嫌いもあるかもしだれないので、わたしはこの香りが気に入つた。

「いい香りですね」

につこり笑つて言つと、フレイヤも上品に微笑み返してきた。

「蓮の花の香りを主に調合した香ですわ。ハルカ様がお気に召されたようで喜ばしい限りです。どうぞ、寝室等でお焚きくださいませ」あー、フレイヤも直接には言つてないけど、カレヴィとのアレの時に焚けつてことか。

それを証明するかのように、イアスが無表情で言つてくる。

「ごく微量ですが、気分を高揚させる成分がこの香には含まれています。まず問題ないかと思われますが、焚すぎないようにお願ひします」

なるほど、いくらいいい香りでも焚きすぎ厳禁と。

こつちもせつかくカレヴィを牽制したんだから、それをぶち壊しにするのは良くないよね。

一番いいのは焚かないことだろ?けど、ごく微量なら特に問題はないだろう。

「……カレヴィもこの香はよく焚いてたんですか?」

つい、わたしはフレイヤに单刀直入に聞いてみる。

するとフレイヤは少し面白そうな色を瞳に滲ませてわたしを見た。

「匂の香の元になつたものは、焚いている時にお褒め頂きましたわ。

これは、ハルカ様に合わせて調合させて頂きました」

ふーん、なら寝室で焚いてもカレヴィも大丈夫そう。

逆に高級娼婦としている時のことと思い出して萎えたりしたら面白いかも。

まあ、これは希望的観測だけど。

カレヴィ、今日の夜は覚えておけ、とか捨て台詞残していつたし、ちょっとだけ心配なんだよね。

「まことに結構なものを頂きまして、ありがとうございます。ありがとうございました」

がたくいただきますわ

イヴェンヌに代行してもらつてわたしはお礼を言つ。

王妃になる予定のわたしは、大貴族相手くらいじゃないと軽々しく直接礼なんて言つちゃいけないらしいんだよね。

「もつたひないお言葉ですわ」

恭しくフレイヤが頭を下げる。

でも、さつきから興味深そうにわたしの体とか顔とかちらちら見てるんだよね。

……やっぱり、彼女の真の目的は王妃となるわたしがどんな人物か見に来たんだろう。

わたしのその考えを肯定するようにフレイヤは微笑んで言つた。

「実は献上品をお贈りするというのは建前で、わたくし、ハルカ様がどういう方か是非拝見させて頂きたかったのですわ」

王宮と専属契約しているとはいって、王の婚約者であるわたしにこうもはつきり言つとは、フレイヤは肝の座り方が半端じやない。

それとも、王宮専属の高級娼館の主ともなればやつぱり違うものなのだろうか。

……などと、わたしは妙な感心をしながら、フレイヤの次の出方を見守っていた。

きつと胸はあるけど、顔は地味とか思ってるんだろうなあ。

それに、リットンモア公爵の紹介といつのも気にかかる。

あの公爵様はなにを思つて彼女をわたしに会わせようとしたのか。それはさておき、彼女の口からいつたいどんな私に対する感想が出てくるんだろう?

下手な美辞麗句だけは嫌だなあ。そんなのは余計惨めになるだけだもんね。

だから、この際はつきつい言つちやつて欲しい。

「それで、実際会つてみてどうでした?」

「ハルカ様」

フレイヤに訪ねたわたしを侍女三人がはらはらして見てくる。心配してくれるのはありがたいけど、わたしは大丈夫だよ。

「政略にも関わらず、陛下が熱烈に愛されている方ともっぱらの噂です。実際に我が館にもそれをこぼしに来られる方がいらっしゃいますし、それに実際にリットンモア公爵様にも伺いましたわ」

……あー、カレヴィイ、貴族の人達にわたしは最高と言ったのみならず、伯爵様とイアスにはわたしに夢中つて言つたんだよね。」

「うやつて思い返してみると、カレヴィイの口を縫いつけたくなつてきた。

「わたくし、実際にハルカ様にお会いして納得いたしました。とても素敵なお体をされていらっしゃいますね」

「え……?」

わたしはフレイヤの言葉に目を瞠つた。

素敵なお体つてなに?

わたしはそんな風に言われるほどスタイルはよくない。ちょっとぽつちやり体型だ。

ただ、胸だけは小学生の頃からやたらとあって、男子に牛とかよくからかわれていた。

それは千花が全部撃退してくれたけどね。

そういう理由で、わたしはブラも実際より小さいサイズを無理矢理つけて大きすぎる胸を誤魔化していた。

千花に締め付けは体によくないよとは言われたけど、昔からのコンプレックスがそう直るわけもなく、今まで来てしまったんだけれど。

「フレイヤ様、無礼ですわ」

ソフィアが苦情を言つたけれど、肝心のフレイヤはあまり気にしたふうもなかつた。

「ハルカ様は男性を虜にさせるお体をお持ちですわ。……もちろん陛下があなた様を溺愛されるのはそれ以外の要素もあるのでしょうかけれど」

……まあ、確かにカレヴィに要約するとおまえはエロい体だとはさんざん言われたけど、フレイヤのその考えはなにかの間違いじゃない？

わたしはついこの間まで喪女だつたんだよ？

この世界に来てカレヴィみたいな物好きに会つたけれども。ひょっとしたらフレイヤのこれは、ただのお世辞かもしれないし、軽く流しておいた方がいいのかもしれない。

本気にするのも自意識過剰みたいで恥ずかしいし。

「そうなのですか？ わたしにはよく分かりませんが」

けれど、わたしの思惑とは裏腹にフレイヤは真剣な顔で頷いた。「はい、そうです。……ただ、そのお化粧はいけません。せっかくのお体の魅力を相殺してしまいます」

「まあ！」

フレイヤの言葉に、化粧担当の侍女三人が氣色ばむ。

突然出てきて言いたいことを言つフレイヤに彼女達が文句を言いたいのは分かる。……でもここは少し落ち着いてほしい。

わたしは三人を目で制すると、フレイヤに尋ねた。

「化粧がいけないとは、どういうことですか？ わたしはこれでよいと思うのですけど」

わたし自身は今のナチュラルメイクでいいと思うんだけどね。たまに化粧を落とすと誰……？ ってレベルの人がいるけど、まさか顔が変わつてしまつくらいの化粧をしうとか言わないよね？

「無難すぎるのです。ハルカ様にはそのお体にあつた化粧をすべきですわ」

「お言葉ですが、厚化粧はごめんです」

皮膚呼吸できなくくらい塗りたくつたりするのはごめん被りたい。できれば化粧もあまりしたくないくらいだけど、いい大人がそういうわけにもいかないだろうから仕方なくわたしはそうしているだけだ。

「いえいえ、厚化粧などいたしませんよ。少し目と頬の周りに色を入れさせていただくだけですわ。……ハルカ様、お疑いならぜひわたくしにお化粧直しをさせてくださいませ。もちろん侍女の方にもご覧になつていただきたいですわ」

そうまで言われて、わたしは断るのもどうかなと考え、結局は了承した。

そんな経緯で、わたしは支度用の大きな鏡の前に座つて、フレイヤに化粧を直されている。

……というか、色を足されているというか。

フレイヤはブラウンのアイシャドーをわたしの瞼から鼻にかけてささりと塗つてから、ブラウンのアイラインを上瞼にかいした後、暗めの紫のシャドーをその上に重ねるように塗つて眉の下にハイライトを入れていく。

そうすると目が大きく見えて、自分で言うのもなんだけど、とても魅力的になつたように見えた。

「まあ」

侍女達三人も鏡に映つたわたしを見て、感嘆の溜息をついた。

そして、瞼が紫ですから赤系統の頬紅にしましそうかとフレイヤは言つて、頬骨の上にチークを軽くのせた。

これは顔色を健康的かつ華やかに見せるためらしい。

「ハルカ様、出来ましたわ。わたしが想像した通り、とても素敵に仕上りましたわ」

フレイヤが満足そうに鏡の中のわたしに微笑むと、侍女三人もなぜか頬を染めながら頷いた。

「まったくですわね」

と、イヴェンヌは鏡のわたしを見て溜息をついた。

「ハルカ様、とてもお綺麗です」

ソフィアは頬を両手で覆つてわたしの変わりように感嘆している。「ハルカ様がこんなに素敵になられるなんて、わたし達はいっつたなにをやつていたんでしょう」

モニーク、そんなこと言わないで。わたしはあれで満足してたんだし。

とはいえ、わたしはフレイヤのほんの数分たらずの化粧の出来映えに舌を巻いていた。

いや、だつて、びっくりだよ！

鏡の中のわたしは体の線も相まって、どこか艶やかな美人になっていた。でもけつして下品な感じではない。

「ハルカ様、いかがでしょうか」

「……驚きました。わたしでも変わるものですね」

言うなれば、お色気美人って感じ？

顔自体はわたしだつて分かるのに、喪女だったわたしをここまで変えるフレイヤの技術は素直に凄いと思う。

「ハルカ様は素材は悪くないのですよ。いえ、それどころか磨けば光る宝玉ですわ」

「え……」

フレイヤの明らかな賞賛に、そういう方面では褒められ慣れていないわたしは盛大に照れた。

「まあ、ハルカ様はとてもお可愛らしいのですね。そんなところも陛下に愛されるところなのでしょうね」

真っ赤になつたわたしを見て、フレイヤがくすくすと口元に手を当てて笑つた。

「そ、そんな……」

わたしはそのフレイヤの言葉にさらに真っ赤になるしかない。わたし、そんなに可愛げのある女じゃないよ。

カレヴィに従順とは言ひがたいし。……特に夜とか。

「ど、どうもありがとう。とても綺麗にしてもらつて、感謝します」  
すっかり動転したわたしは、気安く礼を言つのはいけないという  
ことも忘れ果て、慌てて椅子から立ち上がつた。

その時だつた。

「ハルカ！」

大きな音を立てて支度部屋のドアが開くと、カレヴィが慌てたよ  
うに入つてきた。

「カレヴィ、どうしたの……？」

尋常でないカレヴィの様子に、わたしは驚いて彼に向き直つた。  
もしかして、フレイヤから高級娼館の女性からの夜のあれこれを  
わたしが既に仕入れたとでも思つたんだろうか。

いや、カレヴィが現れなければ、そのつもりだつたんだけどさ。  
そんな悪魔のようなことを顔に出さずに考えていたわたしを見て、  
カレヴィは固まつた。その瞳は見開いたままだ。

……あれ、とても綺麗にしてもらつたと思ったんだけど。それと  
も、わたしの思つていたこと、カレヴィにダダ漏れだつた……？  
「まさか、ハルカか……？」

信じられないといふうにカレヴィが呟いたので、それまで舞い  
上がつていたわたしはちょっと不安に思つてしまつた。

モニー力達の評判はいいし、フレイヤは満足そうにしてるからお  
かしくはないと思うんだけど。

わたしは氣に入つただけに、この化粧をカレヴィが嫌がつたら、  
ちょっとショックかなあ。

「……なにか変だつたかな?」

凝視してくるカレヴィイにわたしは居心地の悪さを感じて、思い切つて聞いてみた。

「い、いや、そんなことはないが……」

ようやく正気に戻つたカレヴィイは、少し動搖したように呟つゝ言つたけれど、うーん、なんだかはつきりしないなあ。

「それより、なぜフレイヤがここにいるんだ」

あ、話を逸らした。

このわたしの姿、そんなに変?

「ハルカ様にお会いするついでに、香を献上に参つただけですわ」懇意にしていたつてのは聞いてたけど、一人とも結構親しげ。フレイヤは国王相手に気後れする様子もなく、にこやかに話してる。

「それがなぜハルカの化粧などしている」

あれ、カレヴィイ見てないはずなのになんで分かつたんだろう。

化粧の仕方がいつもと違うせいかな。

「ハルカ様はせつかくよい素材をお持ちですのに、そのままではもつたいのうございましたから。その御身にふさわしい化粧をされているハルカ様はお美しいでしょう?」

蠱惑的な笑みを浮かべて、フレイヤがわたしを手で示した。

けど、わたしを見たカレヴィイは、顔をしかめてくれたよ。失礼な。「よけいなことを。ハルカはそのままでよかったです。こんなことをしたら他の男の目につくだろ?」

「まあ、まだ見ぬ恋敵に嫉妬でござりますか? 陛下」

くすくすとおかしそうにフレイヤが口に手を当てて笑うと、不機嫌そうにカレヴィイが「笑うな」と言った。

「……カレヴィイは気に入らないの? セつかく綺麗にしてもらつた

のに「

せっかく地味なわたしでも美人に見えるようにしてもらつたのに、

肝心のカレヴィの反応がこれだとなんだかしょんぼりしちゃう。

沈んだわたしに慌てたのか、カレヴィが勢い込んで言つてきた。

「違うぞ、ハルカ。今のおまえはとても美しい。俺も思わず見とれた」

「……本当？」

それならいいんだけど、カレヴィ内心はわたしのこの化粧が嫌なんじやないだろうか。

「ああ。俺はおまえが美しくなりすぎて他の男の目に留まるのが嫌なだけだ。俺はそのままのおまえで満足してるし、それ以上は望んでいない」

冴えないわたしがいいなんて、カレヴィ変わり者過ぎ。……まあ、その言葉はちょっと嬉しいけどさ。

「まあまあ、陛下、殺し文句ですわね。ここまで愛されていらっしゃるハルカ様はお幸せですね」

「……そうですね」

確かにカレヴィはこれ以上ないくらいの待遇でわたしを婚約者として迎えてくれたし、わたしはものすごい幸せ者だ。

……ただ、それに王妃の責務でしかお礼を返すことが出来ないのが心苦しいけれど。

ちょっと困りながら愛想笑いをしていると、カレヴィが苦笑してわたしを抱き寄せた。

「おまえはよくやつている。だから、気に病むことはない」

「……うん」

すらりとして見えるけど、意外と逞しいカレヴィの胸に顔を埋めてわたしは目を閉じた。

「……ああ、本当にカレヴィを好きになればいいのに。申し訳なさに胸がちくちく痛むよ。

だから、人前でちょっと恥ずかしかったけれど、わたしはカレヴィ

イのされるがままになっていた。

その様子を見ていたフレイヤが少し驚いたように尋ねてきた。

「まさか、陛下の片思いですか？」

「うん、そのままか。

カレヴィイみたいな男前に愛されて、それもこんな地味なわたしが好きにならないなんてフレイヤも信じられないのだろう。瞳を見開いてわたしを凝視している。

「ああ。だが俺はいつかハルカが想いを返してくれるよう努力していくつもりだ」

「まあ」

フレイヤが更にこぼれそくなぐりい田を見開いた。

「あうああ、居心地悪い。」

なぜにカレヴィイ、わたしみたいな地味女にベタぼれなんだ。本当に、物好きにも程がある。

「こう申してはなんですが、ハルカ様は男殺しですね」

「は？」

「おい」

信じられないことを聞いた気がして、わたしはカレヴィイの腕から出てフレイヤをまじまじと見つめてしまった。

男殺しつていいんだ、それどころかわたしは全くの逆を行つていた喪女だぞ。

カレヴィイもそれに同意なのか、なにを言つんだという田でフレイヤを見つめている。

「それはあなたの勘違いでしょう。わたしは今まで異性にまったくモテませんでしたよ」

わたしがそう言つと、フレイヤは本当に驚いたようだった。

「ハルカ様、それは」「冗談でしょうか？」

「本當です」

力強くわたしが頷くと、フレイヤは片手で顔を覆つて溜息をついた。

「ハルカ様の世界の男性はどこがおかしいのですか？ それほどまでに魅力的なお体ですのに」

あ、フレイヤ、わたしが異世界人であることも知ってるんだ。

じゃあ、最強の女魔術師である千花繫がりつてことも知ってるのかな。

「どこかおかしいって……、普通だと思いますよ。わたしもモテる努力をしませんでしたし。……ただ、この大きすぎる胸はよくからかわれましたけど」

「なんだと」

わたしの言葉に、なぜかいきなりカレヴィイが氣色ばんだ。  
ど、どうしたの？

「それです。それが男性側のハルカ様に対する異性としての訴えだつたのですわ」

「はあ？ ただのセクハラなだけじゃないですか？ それにこんなことは小学生……割と小さな頃から日常茶飯事でしたし。……ああ、そのせいいか知らないおじさんには声をかけられるのもショッちゅうでしたね」

「ショッちゅうって、それはおまえ危機感なさすぎだらう」  
少し怒ったみたいにカレヴィイが呆れた様子で言つてくる。

「うん、でもそれは全部千花が撃退してくれたから。千花はその頃からかつこよかつたし」

「おまえはまた……」

途端におもしろくなさそうな顔になるカレヴィイをおかしそうに見ながら、フレイヤが納得したように頷いた。

「そうですか、ティカ様が」

「うん、そう。千花はすごいんだよ。頭はいいし強いし優しいし綺麗だし」

あ、すっかりわたし王の婚約者じゃない、元の口調に戻つてゐるな。

でも、千花のことは友達としても誇らしく、そうなつても

しょうがないよね？

「その上、最強の魔術師ですものね」

フレイヤはうんうんと頷きながらわたしの話を聞いてくれる。…

…うん、いい人だ。

「でしよう！？」最初聞いたときはびっくりしたけど、でも千花ならそれもなんとなく納得できちゃうんだよね

なんでも留学していたと思っていた一年間が、この世界で魔術を習っていた期間だったらしいけど、そんな短期間で最強とまで言われる千花はやっぱり並じやない。

「ふふ、そうでしたか。では、もしティカ様が男性でしたらお好きになられました？」

「……千花が？」

なんだか変なことを聞く人だなあ。

「おい」

不機嫌そうにカレヴィイが声をかけてくるけれど、フレイヤは笑つて受け流した。

うわあ、一国の王に対してフレイヤってば強心臓ー。

ああ、でも聞かれたことに答えなきや。

「そうだね、千花が異性だったら好きになつてたかもね。たぶんかなり理想かも」

そう言つた途端、なぜか恥ずかしさがこみ上げてきてわたしは熱くなる頬を覆つた。

なぜ赤くなるんだ、わたし。

ああ、ここに千花がいなくてよかつた。せつかく大切な友情を築いてるのに、変なやつだと思われちゃうよ。

「まあ、ふふふ。やはりそうなのですか。ティカ様は大魅力的ですからね」

「うん」

わたしが頷くと、フレイヤはおかしそうに口元に手を当ててカレヴィを見る。

わたしもつられてカレヴィを見ると、苦虫を噛みつぶしたような  
変な顔をしていた。

……あれ、どうしたの？

「陛下、前途多難ですわね」

まるで吹き出すのを堪えるような表情でフレイヤが言ひつと、カレ  
ヴィは不機嫌な表情のまま、わたしを抱き寄せた。

「……時間はいくらでもある。必ず俺の方を向かせてみせる」

そう言つと、カレヴィはわたしに何度も口づけた。

……あのー、人前なんですけど。

そんなことを言つても、カレヴィが聞くわけないって分かつては  
いるけどね……。

### 031 説得、そして……

「……それで結局、この化粧はこれからしてもいいのかな?」  
いつまでもキスしてくるカレヴィイの腕からやつと逃れて、わたし  
は聞いてみた。

「駄目だ」

「ええー、なんで?」

カレヴィイだつて美しいつて言つてくれたじやない。まあ、お世辞  
かもしけないけど。

「さつき言つただろ? 他の男の田に留まるから駄目だ」  
「田に留まつたつて、わたしなんかにいちいち声なんかかける人い  
ないつて!」

化粧で綺麗にはして貰つてるけど、元が地味女だし、素顔を知つ  
たらがつかりすると思う。

「おまえは自己評価が低すぎるな。俺がおまえを好きだと言つてい  
るのになぜそんなことが言える?」

わたしはカレヴィイのその言葉に思わず黙り込んじやつた。  
わたしの素顔は綺麗じやないし、それを補うような行動的な性格  
でもない。それに飛び抜けた特技もない。

それは、昔から両親に刷り込まれている呪縛にも似た言葉だ。  
漫画描きはそれなりに自信はあるけれど、それはあくまでも趣味  
だし、落ちるのが怖くて投稿なんかする勇気すらなかつた。  
千花みたいになんでも出来て綺麗だつたら自信も持てるのかもし  
れないけど、わたしはそうじやない。

だから、カレヴィイがわたしを好きつていうのもなにかの間違いな  
んじやないかと今も思つてゐる。

「……それに、おまえに貴族の者共が群がつてくる可能性も話した  
はずだが」

「あ……」

そうだった。

わたしに反発する貴族が、カレヴィイと引き離すためにそういう人達を寄越す可能性もあるんだっけ。すっかり忘れてた。

それに、リットンモア公爵も、カレヴィイの言葉を借りればわたしを口説く気満々らしいし。

なんというか、わたしの意図しないところで、いろいろな思惑が渦巻いていて、ちょっと怖いな。

ちゃんと、近衛やイアス達のような魔術師が守ってくれてるのは分かるけれど。

「……だから、ハルカは以前のままでいい。間違つて貴族の馬鹿共達があまえに惚れてしまつ可能性もあるしな。惜しいが、ハルカはその化粧を落とせ」

えー、ちょっと化粧で綺麗になつたくらいで、そう簡単に惚れた腫れたになるもの？

なんとなく、カレヴィイのその考えは杞憂に思える。

「え、やだよ。王妃になるなら綺麗な方が国民受けもいいでしょ。大体実際にわたしを口説く人に会つてもいないので、カレヴィイ気にし過ぎ」

「そついでいざいますわねえ。確かにハルカ様のおっしゃる通りですわ」

今まで楽しそうに傍観していたフレイヤが頷いて同意してくれた。「いや、確実にアーネスはあまえに声をかけてくると思うぞ。なるべくなら俺も阻止したいが」

「まあ、確かにあの公爵様ならハルカ様にお声をかけそうですねフレイヤ……、いつたいどっちの味方なの？ てつきり一緒にカレヴィイを説得してくれると思ったのに。」

でも、わたしのその気持ちを汲んだよつて、フレイヤは言つてくれた。

「けれど、せつかくお美しくなられる資質がありですのに、その機会を奪われてしまいしますのはハルカ様のためにもなりませんわ。

陛下はハルカ様が美しくないといつも等感にこの先ずっと苛まれてもよろしいんですの？」

「いや、それは……」

カレヴィイはフレイヤの言葉につぶやいていた。「…………よしよし、いい感じだ。

「カレヴィイはわたしが國民から不細工な王妃つていつそしりを受けても平気なの？　わたしはそれも仕方ないと思つてたけど、化粧で綺麗になれるならその憂いもなくなると思つてたのに」

「ハルカ、おまえはけつして不細工などではないぞ。おまえは普通だ！」

カレヴィイが熱心にわたしを説得にかかりてくる。

「うん、カレヴィイのその気持ちは嬉しい。嬉しいけど…………。

「でも國民は多分そう見ないよ。カレヴィイは男前だから、地味なわたしはきっと比べられて不細工つて言われるよ」

「おまえが俺を男前と…………」

「…………カレヴィイ、わたしを今まで説得してたんじゃないの？　そんなところでなぜ感動してるんだ。」

わたしとフレイヤが乾いた目でカレヴィイを見ていたら、それに気づいた彼は咳払いをした。

「た、確かにそんな事態になつたらおまえが氣の毒ではあるが…………でしょ？　だからきちんとお化粧して、國民にお似合いのカッフルだつて分かつてもらう必要があると思うんだ。カレヴィイだつてその方がいいと思うでしょ？」

「それは…………、そうだが…………」

カレヴィイはすっかりさつきの勢いをなくしてゐる。よし、もう少しで説得できそうだぞ。

「そこで『j』やいますね。その方がハルカ様が國民に歓迎されますでしちゃうね」

フレイヤ、ナイスアシスト。

そこまで言われたら、カレヴィイもわたしのこの化粧に反対できな

いだろう。

この装いでいれば、反対勢力の貴族達にも醜女とはたぶん言われないだろうし。

「く……つ、分かった。認める、認めればいいんだろ？」「カレヴィイが呻くようにそう言つと、頭をかきむしった。

……なんだか、すごく不本意そう。

そんなに、わたしが男の人に口説かれるかもしれないというのが嫌なのかなあ。

わたしはカレヴィイに寄り添うと、その片腕にしがみついた。

「わたしはあなたの婚約者だよ？ 少しは信用してよ」

「ハルカ……」

サービス精神からの行動だつたけれど、カレヴィイはなんだか感動してくれたようだ。

ぎゅむつとわたしを抱きしめるとカレヴィイはわたしの顔のあちこちにキスをした。

……ああ、またこのパターンかあ。

わたしがそう思つてゐるうちにもカレヴィイの口づけば激しくなつていく。

「やはり、ハルカ様は男殺しですね」

いや、フレイヤ、その認識は間違つてるから。

単に、カレヴィイの好みが変わつてゐつてだけだと思うよ。

……それでもカレヴィイはもうちょっと自重して欲しい。

昼間からこういちやいちやされると、城の風紀にも関わるような気がするんだけど。

ふと、目を他にやると、警護のためか支度部屋の隅でイアスが複雑そうな顔でたたずんでいた。

イアスも国王が暴走気味できつと困つてゐるんだろうなあ。

彼の兄も王の婚約者のわたしを口説くだらうつて、カレヴィイに断言されちゃつてるし、宫廷魔術師のイアスには肩身が狭いんじやなかろうか。

「ハルカ様……素敵です。陛下とお似合いですわ……」

事の次第を見守っていた侍女達がほつと溜息をついて、やはりカレヴィの暴走を見守っている。

……いや、だからイアスもソフィア達も見てるだけじゃなくて助けてよ。

わたしは惰性でカレヴィのキスを受け続けていたけれど、その後危うく寝室に連れ込まれそうになり、大いに慌てたのであった。でも、その時はさすがにイアスが止めてくれたので助かった。そういうえば、時間制限の魔法は習いの始まりからとしたけれど、朝の九時すぎたらカレヴィはわたしに手を出し放題なんだよね。いくらカレヴィでもさすがに昼間にわたしを寝室に連れ込むようなことはないと思っていたから、これは盲点だつた。

明日、千花にこのことをしっかりと相談しなくちゃ。

……本当に野獣め、昼間つからい加減にしろー！

その夜はフレイヤから貰つた月光蓮華香を焚き、カレヴィの希望でわたしはフレイヤから習つたお化粧をしたまま事に及んだ。その結果、カレヴィは大盛り上がりでわたしは大変だった。そ、それになんだかいつもよりも激しくない？ ちょっと、いやかなりきついんですけど！

「いつもと違つて新鮮だつたぞ」

とかなんとかカレヴィはすつきりした顔で言つてたけど、わたしは彼に翻弄されっぱなしでぐつたりだ。

でも、どんなに疲れてても化粧だけは落とさなきやいけない。控えてた侍女を呼んでもよかつたんだけど、闇の雰囲気のままそうするのはためらわれて、わたしは一人で洗面所に行つて化粧を落とした。

「なんだ化粧を落としたのか」

幾分カレヴィはがつかりしていたみたいだけど、してた方がよかつたのかな？

「カレヴィは普段のわたしじゃ嫌なの？」

「い、いや、そんなことはないぞハルカ」

……これで嫌だつていつたら口きいてやらないところだけど、カレヴィはどもりながらもわたしの機嫌を取りにかかってきた。

「化粧したまま寝ると、後でニキビとかできたりして大変なんだよ。

……そういうわけだから、今後化粧してでは程々にしてね」

「……そうか、それはすまなかつた。おまえの希望通り化粧している時は程々にする」

うーん、素直だなあ。

この調子なら、時間制限なんてそのうちいらなくなるかも。

「ん、じゃあ、今日はもう寝よっか。わたし疲れちゃった」

「俺はまだ疲れてないぞ。それにハルカは化粧を落としたのだから、

もつ少し可愛がりたい

「……」

素直と思つたのは訂正。

やつぱりカレヴィは野獸だった。

「……だめか？」

やつやって、少し寂しそうに聞かれると、ものぐいぐく困るんです  
けど！

わたしはカレヴィに愛されてて、そしてこれ以上ない待遇の身の  
上だ。

なのに彼の愛に応えられないわたしは、こうこうこうお返し  
をするぐらいしか思いつかない。

それに、カレヴィがわたしに手を出せない真夜中までにはまだだ  
いぶ時間があるから物理的に抵抗できないし。

「わ、分かつた。少しならいいよ」

もしかして流されてるのかもしれないけど、これだけよくして貰  
つてるんだもの、そのくらいはしなきゃ駄目だよね……？

「そうか」

カレヴィは嬉しそうに笑うと、早速わたしにのしかかつってきた。

でも、今日は昨日と違つて少しごこごじや済まなかつた。  
変な学習をしてしまつたカレヴィは、いつもより激しいペースで  
アレをしてきたのだ。

どうせ学習するなら、わたしの体を気遣う方向でして欲しい。  
そんなことがあつて、次にわたしが気がついたのは朝だった。

「……もつぱりが少しなのよ……」

「すまない。おまえがあまりにも可愛すぎて我を忘れた  
もつ恒例となつてきた共同の間の朝食時のやりとり。

治癒魔法をあまりかけられないわたしは、腰に湿布を貼つて貰つてなんとか痛みをやり過ごしている。

「そこで思いとどまるのが人間でしょ。カレヴィイつてば野獸ーっ」  
わたしがそう言つと、周りに控えていた侍女達が一斉に吹き出した。

「……野獸」

わたしの言葉にカレヴィイはショックを受けたみたいだけど、これを野獸と言わなくてなんと言つ。

「まあまあ、お一人とも仲のよろこいことで」

ゼシリアがにこやかに言つてくるけど、本当に仲が良いくらい見えるんだろうか？

カレヴィイを見ると「そつか？」となんとなくにやけていて、満更でもなさそうだ。

その顔を見ていてわたしはなんだか脱力してしまう。カレヴィイ、わたしの大変さを全然理解していない。

それにしても、時間制限がある分、カレヴィイの責めが激しくなったのはいただけない。

これじゃ、体に負担がかかるのは一緒じゃないよ。

……やっぱり、今後のことを考えると、カレヴィイには一服盛つた方がいいのかもしれない。

千花は今日来るつて言つてたし、早速相談してみよう。

「わたしはこれから用があるから、カレヴィイはもう執務に入つてよ」  
わたしが昨夜の恨みもあつて冷たく言つと、カレヴィイはちょっと傷ついた顔をした。

う、ちょっと気がとがめるけど、カレヴィイが一向にわたしの体を気遣ってくれないのが悪いんだからね。

カレヴィイから顔を逸らすと、彼はようやくわたしが本氣で怒つていることに気が付いたようだ。

「ハルカ、無理をさせたことは謝る。だから、機嫌を直してくれ」  
焦つた様子でカレヴィイが言つてきたから、わたしは内心にんまり

してしまった。

「……じゃあ、例の薬飲んでくれる?」

ちょっと上目遣いにカレヴィを見たら、面白ごくりこりつらえた。

「そ、それは……っ」

「そう。じゃあ、やつぱりカレヴィはわたしのことが好きじゃないんだね。本当に好きなら、普通はそのくらい我慢できるものね」「深く溜息をつきながらわたしが言うと、カレヴィは叫ぶように言った。

「分かった! 飲めばいいんだろう、飲めば!」

おまえに愛を疑われたらかなわん、とカレヴィはついに根負けした。

ふふふ、わたしはやつたよ、千花!

ただし、三日の一回は飲まない日をもうけてくれとカレヴィに懇願された。

そんなに懇願するほど、飲みたくないのか、カレヴィ。でも三日に一度くらいならまあいいかな。

時間制限の魔法も千花に言つて解いて貰おう。

そんなわけで、わたしはここにこしながら、がっくりと肩を落とすカレヴィを執務室に送り出した。

そして、カレヴィが執務に入つてしまはしくしてから待望の千花がやつてきた。

「へえ、よくカレヴィ王に了承させたね」

感心したように千花が言つてきたので、わたしは夜から朝の経緯を詳しく話した。

「なるほどねえ、それならカレヴィ王も妥協せざるを得ないかな。肝心のはるかに嫌われちゃ元も子もないしね」

うん、カレヴィイの気持ちはこれでなんとなくだけど、分かつたような気がする。

一応、カレヴィイは体だけじゃなくてわたし自身も好きなんだ。これで、わたしも想いを返せたらいいんだけど、これはどうなんだろうなあ。

一緒にいるうちにそれなりに愛着は湧くだろうから、それでもいいか。

なんだかちよつと酷いような気もしたけど、わたしがその気になれないんだからしょうがない。その点はカレヴィイに我慢して貰うしかないか。

「それで例の薬だけど、ゼシリアに渡しておくれからね  
考え込んでいたわたしに千花がそう言つてきたので、わたしは驚いてしまった。

「えつ、千花薬作つてくれたの？」

それって、なんだか用意がよすぎない？

「カレヴィイ王のことだから、こつこつともあるかと思つて、最悪一服盛るつもりで作つてたんだ」

「え、でも、仮にも国王に一服盛るつて過激すぎない？」

わたしはさつき自分がそのことを考えてたことも忘れて、思わず聞いてしまった。

千花の気持ちは嬉しいけど、カレヴィイがそんなこと知つたら激怒しそうだ。

「あ、一応、宰相にも了承取つてあるから大丈夫だよ。未来の王妃が子を成す前に体壊したりしたらまずいからね」

「そうだつたんだ。千花、本当にありがとうね」

わたしは嬉しくて思わず千花に抱きついちゃつた。

本当に千花つて友達思いだなあ。

彼女と友達でいられて、わたしは凄くラッキーだ。

これで、カレヴィイやマウリスの了承も得たことだし、わたしの体の安全は確保したも同然だ。

それに千花が言つには、薬の効力はたぶん普通の人並みになるくらいっていうから、子づくりの妨げにはならないだろうってことだつた。

それなら、確かにマウリスも喜んで了承するだらうね。世継ぎの心配はこれでなくなるんだから。

……それにしても、精力減退の薬服用でようやく人並みつて、力レヴィは本当に人間なんだろうか？

ただ、問題は三日に一度の薬を服用していない時の彼なんだけど。それに今までつき合つてたわたしも相当頑丈だから、たぶん大丈夫……と思いたい。

わたしはその日一日、カレヴィに例の薬を飲ませることを了承させたので上機嫌だった。

それに、昨夜カレヴィが無茶したことによって痛かった腰も、千花が調合してくれた痛み止めでしつかり回復して絶好調だ。

シレネ先生に既に教えて貰った正式の礼はもう太鼓判をもらつたし、今日は細々した王妃の話し方とか上品に見える仕草とか教えて貰つた。

わたしがそれをノートに真剣に書き写していると、シレネ先生が微笑んで言った。

「本当にハルカ様は優秀な生徒ですわ。それに熱心に授業に取り組まれておられるようで、わたくしも教えがいがあるというものですわ」

「いえ、シレネ先生の教え方が素晴らしいんですよ。おかげで、王宮でなんとかやっていけそうで本当に感謝しています」

そう言つてわたしが先生に頭を下げる時、落ち着いた彼女にしては珍しく慌てたようだった。

「まあ、いざれ王妃になられるハルカ様がわたくしなどに頭を下げられては困りますわ。……お気持ちはとてもありがたく思いますけれど、ハルカ様は下々の者に軽々しくそうされはいけません」

う、感謝の気持ちを表したかつただけなんだけど、逆に怒られちゃつた。

まあ、確かにシレネ先生の言つとおりなんだけどね。

「はい、気をつけます」

わたしがまじめな顔でそつまつと、シレネ先生は優しく笑つて言ってくれた。

「けれど、ハルカ様のそういうところは美点でもありますわ。どうか、王妃になられても、下々の者への感謝の意だけはお忘れになつてくれた。

ならないでください」

「はい」

王や王妃は、国民や貴族、王宮で働く人々に支えられて、その地位にいるんだ。

わたしも趣味だけに没頭せずに、出来るだけ王妃として頑張りつと思う。

……それでも、礼儀作法の先生がシレネ先生みたいな優しい人で良かったな。

千花の時はかなり厳しい人だったみたいでビシビシやられたらしこれど、わたしがその立場だったら確實に萎縮していると思う。この点はカレヴィの人選（というかゼシリアがかなり助言しているらしいけど）は間違つていなかつたみたいだ。

それから異世界のお菓子をお茶請けにして、それを話題にほっこりお茶しながら、わたしはシレネ先生と礼儀作法以外の話もたくさんした。

うん、最初は緊張したけど、シレネ先生とも個人的にどんどん仲良くなつていつてる気がする。

それに、少しずつだけどわたしもなんだか社交的になつてきているみたいだ。

うん、これは王妃になる身としては凄く良い傾向だよね。

そんなことをしているうちに、礼儀作法の終わりの時間が来た。わたしはシレネ先生とまだまだ話したいことはあつたけれど、また明日話せばいいか。

それで、彼女となんでも話せて、相談できる友人になればな、とわたしは思つてゐる。

そう言つたら彼女は遠慮するかもしれないけれど、シレネ先生はきちんと自分の意見を持つてるし、まだ若くてわたしにはかなり馬の合つ人なんだもの。それでいつかわたしの相談役にでもなつてもらえたらしいな。

千花に今その役をしてもらつてゐるけれど、彼女は忙しい身だし、

王宮付きの人でそういう人を見つけていくのも悪くはないと思つ。もちろん、ゼシリ亞やイヴェンヌ達も信頼はしているけどね。

楽しい礼儀作法の授業が終わつたら、ゼシリ亞経由でまたカレヴィから謁見の間に来いとお達しがあつた。

……また例の貴族の人達が来ているのかなと思つて謁見の間に行つてみたら本当にその通りだつた。

わたしはゼシリ亞に手を取られてカレヴィの隣に座るべく移動してたんだけど、今度はそれぞれ姫を連れてきていた貴族達はわたしの顔をみてポカーン。

わたしの印象が以前とあまりにも変わつてるので驚いているのだろう。

それに加えて、同伴の姫君達はわたしを見て騒ぎ出した。

「……お父様、お話と違いますわ」

「この方がどこが醜女なのです。今度、目をお医者様に見ていただいた方がよろしいです」

「とてもお美しい方ではありますか、これではわたくし、とても勝ち目はありません」

「それに、最強の魔女様が後見というではありませんか」

「これでは、わたくし達恥をかきに来たようなものですわ」

掴みかかりそうな勢いで、令嬢達がそれぞれの父親に食つてかかる。

……うーん、フレイヤにお化粧の仕方を教えて貰つて本当に良かつた。

それに千花がわたしの後見になつているのも大きいみたいだし、千花の偉大さをつくづく思い知らされる。

「い、いや……、以前はこんなではなかつたのだ。あの時は、本当にこの娘は醜女で……」

貴族達はしじろもじろになりながら、汗をかいている。

わたしがこんなに急激に変わると思つてなかつたんだから大変だなあ。

などと、まるで他人事のようにわたしは思つ。 実際他人事だけど。でも、ここにいる姫君達もかなり美人で、この間貴族達が言つていたことは嘘じやないと分かつた。

でも、こんな綺麗な姫達に勝ち目がないなんて言われるほど、わたしは変わつたんだろうか？

「……これでまだ、ハルカとの婚礼を反対するのか？」

カレヴィイが玉座に肘をつき、手の甲に顎を乗せて楽しそうに言つ。……あんなにわたしの化粧に反対したくせに現金だなあ。

「そ、それはつ。 し、しかし、この娘は異世界の卑しき者で……」

「その言葉、最強の女魔術師であるティカ殿をも愚弄することになるが、そのままかの者に伝えても良いか、リシイズ伯爵」

千花の名前を出されて、カレヴィイにリシイズ伯爵と呼ばれたおじさんはひつと息を呑む。

……うーん、千花は最強の魔術師として尊敬もされてるけど、同時に恐れられているんだな。

思えば国王であるカレヴィイにも気安く意見を言えるし、他の国でもそうなのかもしねりない。

そんなふうに各國が千花を持ち上げるのは、彼女がその氣になればこの大陸を制圧することも可能だかららしい。

なんでも千花の魔力は無尽蔵で、魔術に関してはこの大陸が今まで輩出した偉大な魔術師でも右に出る者はいないと聞いたことがある。

今まで単純に最強なんて言われて、千花凄いなと思つてたけど、千花は千花でそんな立場に立たされ恐れられて、孤独に思つことはないんだろうか。

そう考へると、千花がなんだか氣の毒になつてきちゃつた。

せめて友達であるわたしは今までと変わらず彼女と接しよう。

その前に千花に愛想尽かされないようにすることも必要だけどね。そのために、千花がお膳立てしてくれたザクトアリアの王妃業をとりあえず頑張ろう。

まだ婚約期間中で問題は山積みだけど、一つずつ解決していくばいいよね。

とりあえず、野獣な力レヴィ対策はなんとかなりそうだし。

「し、しかし、その娘は相当な化粧を重ねているのでは。冴えなかつた以前とは印象が違い過ぎます」

「この化粧は月華の館の主フレイヤが指図した。あの者は決して女に厚化粧などさせない。品が悪くなるからな」

力レヴィがそう言つたら、その貴族の人は黙つちゃつた。

ひょつとしてフレイヤつて相当な有名人？

「……それに、フレイヤはハルカのことを磨けば光る宝玉と称していたぞ。ハルカはまだまだ美しくなる余地がある」

あれ、その時力レヴィはその場にいなかつたはずだけど、モニー力達の誰かに聞いたんだろうか。

それはともかくとして、それを聞いた貴族達も一言も口を開かない。

フレイヤがそつまで言つてことは、かなり凄いことなんだろうか。

「……お父様、もうおことまさせて頂きましょう。なんだかいたたまれませんわ」

「そうです。そうさせて頂きましょう」

集まつた令嬢達が口々にそう言つ。

「この姫達は父親とは違つて随分慎ましやかなんだな。

……中には醜女云々つて言つた姫もいたけど、父親の言葉を鵜呑みにしてここまで連れられて来たんだろうから仕方ないと言えば仕方ない。

「そういうことなら、もつこの場は必要ないな。謁見はこれにて終了とする」

楽しそうなカレヴィの宣言で、貴族達が悔しそうな顔をしてわたしを睨み付ける。

……なんだか、まだ諦めてないみたいだよ、このおじさん達。思わず溜息を付きたくなつたわたしの手を取つてカレヴィがわたしを立たせた。

そして大事そうに肩を抱いて控えの間まで連れて行こうとしてくれる。

けど、わたしの背に貴族達の視線がちくちく刺さつてなんだから痛い。

「しかし、これだけ言つてもまだ分からんことは、俺はああいう闘だけは『めんだぞ』

控えの間でカレヴィがうぶざりしたように言つ。

「う、うん……」

姫達は納得してくれたみたいだけど、肝心の親があれじやあねえ。「ともかく、おまえの警護は今まで以上にしっかりとさせる。不快だろうが、ハルカそれで納得してくれ」

「うん、分かった」

心配そうな様子のカレヴィにわたしは頷いた。

でも別に不快とかじゃないけどね。ただ、しつこいなあと思つだけで。

でも、他の方法での貴族達が攻撃してくる可能性はあるな。まさか暗殺なんてハイリスクなことはするとは思えないけど、用心に越したことはないよね。

うーん、そう考えたら急に殺伐としてきたぞ。わたしはただのんびりと趣味に没頭したいだけなのに。

まあ、ここに警護はしつかりしているから大丈夫だと思うけどね。それに、わたしになにかあつたら千花が黙つていないのでし。

「そういえば、おまえに言い寄る男にも充分注意しておけよ。そういう方面から攻撃してくる可能性もあるからな。……それでなくてもおまえは美しくなりすぎたんだからな」

カレヴィに痛いほど両肩を掴まれて、わたしは言い含められた。  
うん、分かつた、分かつたよ。

こうなると、いきなり綺麗になるのも考え方だ。  
でも、元の地味なわたしじゃ、あの様子だともつと大騒ぎになる  
のは目に見えてたし。

……まあ、とにかく。

わたしの安穏生活はまだまだ遠そうなことだけは身にしみて分か  
つたよ。

翌日はとても気持ちのいい朝だった。

わたしは、ふわふわのオムレツとかカリカリに焼いたベーコンとか、香辛料の効いたハムやチーズ、焼きたてのパンを前にして、ここにこしながらカレヴィイがそれを皿に取り分けてくれるのを待っていた。

「わあ、おいしそう。いただきまーす」

わたしは両手を重ねて挨拶した後、さっそく、おいしそうに湯気を立てるオムレツにナイフを入れる。

うん、思った通りふわふわでおいしい。

おいしい朝食にっこりするわたしとは違つて、カレヴィイはやや不機嫌そうだ。

「……俺がこんなに落ち込んでいるのに、おまえは薄情だな」

「えー、そんなことないよ」

一応、そう言つてみたけれど、わたしの満面の笑顔がそれを裏切つている。

千花の作った精力減退の薬の威力は絶大だった。

だつて、カレヴィイのアレが馬並から人になつたんだよ。

この場合、つい嬉しくて笑顔になつちゃつたつて仕方ないとと思う。カレヴィイはなんか変なトラウマみたいになつちゃつたみたいだけどさ。

でも、普通の人はあれぐらいらしいんだから、カレヴィイもちょっとは我慢しないと。

「でも、カレヴィイがあの薬飲んでくれて嬉しかった。ありがとう」  
わたしがにこにこしてカレヴィイに言つと、彼は立ち上がりつてわたしの隣の席まで移動してきた。

「……なんだ？」と思つてると、カレヴィイはわたしの頬にキスをしきてきた。

うーん、薬飲んでもこうこうすることはするんだね。

人にさんざん見られて生活していたから、侍女達がいてもカレヴィは全然平気なんだよね。

でもシルヴィなんかは、赤くなつて可愛かつたけど。

でも、あれは侍女達を気にして赤くなつたわけじゃないから、王族関連の人はこういう傾向があるって覚悟しておいた方がいい気がする。

わたしもそのうちこれに慣れるのかなあ。

そういうえば、お風呂とかも侍女達に入れて貰うの平氣になつたし。だけど、夜は近衛兵とか控えの侍女とかがアレを聞いているらしい。

これは思い起こすたび、顔から火が出るほど恥ずかしい！

カレヴィなんかは、「ああ……」とか呟いて、わたしに警護上の問題もあるから、そういうものだと割り切れと黙つてくる。

つづ、王族にはプライベートつてものはないって言つんだね。

まったくの庶民には、そういう部分が未だに慣れないよ。

そんなことを考えていたら、カレヴィのキスが段々激しくなってきた。

「ちょっと、カレヴィ……ッ」

まだ食べる途中なんだし、ちょっとは遠慮してほしい。

そんなことを考えながら息を切らしていたらカレヴィは一応満足したらしく、またわたしの向かいの席へと移動していった。

「もう、朝食の途中なのに酷いよ」

「いや、おまえの笑顔が可愛いくてついな」

……どうやらカレヴィは基本的な部分で、我慢つてことを知らないみたいだ。

これは、そのうち矯正する必要があるかもしけないな、とわたしはちょっと呆れながらも思つ。

精力減退の薬を飲ませても油断がならないなんて、さすが野獸。侍女達に言わせれば、「愛されている」かららしいけど、でも、

やつぱり「飯の時くらい落ち着いていて欲しいと思つのはわたしの贅沢なんだろうか？

平和だと油断していた朝食を終わらせて、カレヴィイが執務室に入るので見送ると、わたしは腹ごなしに庭園に行くことにした。

今回わたしが行つたのは、ガルティア式庭園の方。  
なんというか、桜がすごく見たかったんだよね。

周囲との違和感はあるけど、桜の花びらが舞い散る光景はやつぱり綺麗で、わたしは思わず日本のことと思い出してしまつ。  
あの朝食もおいしかつたけど、そろそろ納豆とか、あじの干物とか日本的なものが恋しくなつてきた。

うーん、わたしホームシックか？

あじの干物はともかく、納豆はきっとカレヴィイは駄目だらうな。  
それに焼き立ての白い「飯が食べたい。

キユウリのぬか漬けや、柴漬け、焼き海苔が恋しい。

……そういうとこ、千花はどうしてるのかなあ。今度聞いてみよ。

そう思いながら桜の傍で溜息を付いていると、ビニカで聞いたような美声が聞こえてきた。

「おや、美しい人が花の傍で、そんな切なげな溜息をついて。……  
なにか思い悩むことでもあるのかな？」

煌びやかな容姿のその人は、リットンモア公爵だった。

うーん、相変わらず目に眩しい人だ。

「いえ、たいしたことではないんですけど。ただ日本のこと少し思い出してしまつて」

まさか、桜を見て納豆のことを思い出していたとは言えないから、わたしはちょっとだけごまかした。

「……ハルカ嬢はカレヴィイとの婚約を少し後悔しているのかな？」

「え……」

この公爵様、冴えないわたししか知らないはずだけど、なぜかわ  
たしだと分かつたみたい。

あ……でも確かに、公爵様はフレイヤに紹介状を渡したんだつけ。  
「どうして、わたしだつて分かつたんですか？」

あれからわたしはかなり変わったはずだ。

それなのに、どうしてだろう。

「君がハルカ嬢だつてことは付いている侍女や近衛兵で分かるよ。  
君の顔立ちに面影が残っているし」

あ、そうか。言われてみれば、納得。

今日はソフィアが付いてるからね。

私の顔のこともだけど、付いている侍女の顔まで覚えてしちゃう  
この公爵様の記憶力はちょっと凄いよ。

「公爵様、記憶力いいんですね」

わたしが感心してちょっと息を付くと、公爵様は笑いながら人差  
し指を立てて、横に振った。

うわ、こんな気障な仕草まで似合つなんて、ちょっと凄い。さす  
が、並外れた美形だ。

「わたしのことはアーネスでいいよ。君にはかしこまつた話し方を  
されたくないから、普段通りの話し方で頼みたいな」

「……じゃあ、アーネス」

柔らかいけれど、有無を言わせない話し方をされて、わたしはつ  
い彼の言うとおりにしてしまう。

すると、アーネスはその麗しい顔で微笑んだ。

するとなぜか、近くにいたソフィアが赤くなつて両手で頬を覆つ  
てしまふ。

うーむ、さすがにタラシの異名を持つ人だ。意図してないのに侍  
女までたらしこむとは。

「それはそうと、先程の話だけれど。君はカレヴィとの婚約をどう  
思つてるんだい？」

「どうして……」

わたしはアーネスに突っ込まれて聞かれて、少し困惑してしまう。

……いけない。これじゃ、変に誤解されちゃうよ。

「自分で選んだことだから、後悔はしていないよ。ここのみんなはとても良くしてくれるし。これで文句なんて言つたらばしが当たるよ」

「けれど、君のことを反対している者達もいるね。それは、どうしたらい？」

わたしはそれを聞いて、もしかしてアーネスがそつちの回し者かと思つて思わず警戒してしまった。

だつて、カレヴィも言い寄る男には注意しうつて言つてたし。女性を落とすにはこのアーネスなんかはもの凄く最適なんじゃない？「いや、そんなにわたしを警戒しないで欲しいね。別にわたしはあの者達とは関係ないよ」

「そりなんだらうつか？」

でもそつ言われて簡単に信じちゃうのも、まずこよくな気がするし。

それでわたしがちょっと困つていると、アーネスは「困つたね」と苦笑してきた。

うーん、一応カレヴィの従兄弟で友人なんだから、あまり疑うのも悪い気がする。

「……ごめんね。カレヴィに氣をつけろつて言われたばかりだから、ちょっと神経質になりすぎたよ。」めんなさい

わたしが反省して謝ると、アーネスは安心したようすみゅうっと息を付いた。

「それは良かった。確かに君はとても美しくなつたし、警戒すること越したことはないけれど、わたしにまでそうされたら困るからね」

そう言つてちよつと笑つと、アーネスはわたしの右手を取つて指先に口づけた。

そうすると、アーネスの豪奢な髪がさらりと肩から滑り落ちて、

わたしはそれにちょっと見とれてしまった。

綺麗な人はこんな普通の淑女への礼でも様になつて得だよね。

「ああ、ここの場でアーネスと会つと分かつていたら、スケッチチブックとか持つて来るんだった。」

これからは臨機応変に対応できるように出かけるときは待ち歩くようにしよう。

それに、庭園で風景画とか描くのもいいしね。

「……それで君はカレヴィイ自身のことをどう思つてるんだい？」

「どうつて……、わたしのことをこれ以上ない待遇で迎えてくれたし、とても感謝しているよ。」

わたしはアーネスの更に突っ込んだ質問に少し戸惑いを隠せない。

「いつたい、なにが言いたいの？」

「けれど、カレヴィイは政略ではなく、君をとても愛しているよ。……でも君自身はどうなのかな？」

「ああ、一番聞かれたくないことを聞かれてしまった。」

カレヴィイがわたしを好きって言ってくれるのは、嬉しいよ。嬉しいけど……。

「彼には申し訳ないけど、わたし、カレヴィイのことは利害関係とか思えない。……あんなにわたしを愛してるっていうのも、正直ちよつと重いよ。」

わたしが常々思つていたことを吐露してしまったその時だった。

「……ハルカッ」

「ここにいなのはずのカレヴィイがなぜか現れて、わたしは思わず身を竦ませる。

あの発言、もしかして聞かれちゃったかな。

いや、カレヴィイ、怒った顔してるし間違いなく聞かれたよ。どうしよう。

「おやまあ、カレヴィイ。なにもこんな時に来なくてもいいのに、緊迫する空氣の中で、ことの発端のアーネスはのんびりと笑つて

言つ。

その顔を見ていたら、なんだかちよつと一発くらい殴りたくなつてきた。

そういえば、わたしカレヴィにアーネスに氣をつけろって言われてたんだよね。

それより、今のわたしの発言、巻き戻らないかな。……無理だろうけど。

あああ、この後のカレヴィの言動が怖すぎる！

もしかしながら、これは修羅場つてやつですか！？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0653ba/>

---

王様と喪女

2012年1月10日20時04分発行